２人の覇王？　少女と覇王の奮闘記

コルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２人の覇王？　少女と覇王の奮闘記

【Ｎコード】
Ｎ９８１９Ｖ

【作者名】
コルト

【あらすじ】
赤壁で敗北した少女がいた。少女は双子と出会い、新たな舞台へと立つ。その舞台には、自分と同じ存在、同じ道を進まんとする者がいた・・・

双子に出会う華琳

少女の目に映る地は、真っ赤な炎に包まれていた。

少女の周りは、近しい将何人がいるだけ。

少女は将達に何かを伝えると

最後に

炎に包まれた地を一瞥し

誰にも聞こえない声で

呟いていた

「覇王の物語もここで終わりか」

曹操（華琳）

『ここはどこだろう？』
突然のことだった。
白い空間がどこまでも伸びている場所に私はいた。
『確か、蜀呉同盟と赤壁で戦い、私達は負けた』
そして、華琳を慕う将達と共に、新天地を目指して出発をしようと思っていた。
『火計によって焼かれた赤壁を見た後、目を閉じ、開いた瞬間、こんな場所。私の頭はおかしくなったのかしら』
周りに自分の愛する将達は誰もいない。突然、この様な場所にくれば混乱するのが当たり前なのだろうが、華琳はとても冷静だった。
答えが何も出ぬまま、思考の海にいた華琳だったが、『クスクス』と笑い声が聞こえ、その方向に振り向いた。

『双子の子供？』

まだ、１０にも満たないくらいの子供だろう。私の方を向き、交互に笑いあっていた。

「「迷いこんじゃったんだね」」
『どういうこと？』
「言葉のまんま」「あなたは迷った」
『意味がわからないわ。あなた達、ここがどこか知っているの？』
双子は顔を見合わせ、また、クスクス笑っていた。
『あなた達、人の話を「「お姉さん、質問に答えて」」？』
私の話は無視ですか、そうですか。
子供に怒るのも大人げないが、言わなければならないと思ったが、
華琳は自分が受けたことのない『氣』を受け、言葉が止まった。
「あなたは覇王になりたかった？」「あなたは少女になりたかった？」
何を言ってるの？
「あなたは選ばれた」「新天地に連れてってあげる」
『選ばれた？連れていくとはどこへ？私の部下はどうなるの？』
様々な疑問を投げかけるが、双子は気にせず、更に言葉を続ける。
「新天地で新しい自分を見つける事ができる」「だけど・・・」
『けど？』
「「あなたは全てを失う」」
『！？全てを失う！？だから、私の部下達がここにいないの！！』
強力な『氣』にも負けず、双子に近づこうとしたが急に周りが暗くなり、私は闇に閉じ込まれていく。
『待って！！これだけ聞かせて！！私の部下達は！？あなた達は一体、何者？』
すでに暗くなった空間から、どこからか声が聞こえた。
「私は白。いつかまた会えるよ」「僕は黒。さて、いつになるかな」
その言葉を最後に、私は意識を失った。

双子に出会う華琳（後書き）

文章作るのは大変ですね。
コルトです。

文才なし、駄文ですが、観ていただいて光栄ですm（＿＿）m

男と出逢う華琳

目を覚ませば質感のある白色が見えた。
それが、天井である事はすぐに理解できた。
先ほどの双子と空間は何だったのだろう？
全てをなくすとはどういう事なのか？
ここは何処なのか？

様々に疑問が浮かんだが、答えはでない。
とりあえず、ここが何処なのかを把握しようと体を起こした。
どうやら寝台に寝かされていたらしい。
周りを見渡せば、本や竹簡などが綺麗に棚に並んでいた。
ここは書庫なのだろうか？
そんな事を考えていたら、不意に声がした。

「眼が覚めましたか？おはようございます」

驚いて、声がした方へ振り向くと、椅子にゆったり座っている人物がいた。
背を向けているのでよくわからないが、声を聞くに男だろう。
言葉を出そうとする前に、その男性から話をしてきた。

男「予想より早いお目覚めですね。体は動かせますか？」

華琳「え？ええ、問題はないわ」

男「でしたら此方へ。美味しいかどうかはわかりませんが、お茶を用意しています。」

彼の言葉に少し疑問を感じたが、話が進まないし、色々聞けるだろうと思い、彼に指定された椅子についた。

男「口に合うかはわかりませんが、お茶請けもありますよ？」

華琳「あ、ありがとう・・・」

書物を読みながら、私に呼びかけていた。

そして、言われるがまま、お茶と菓子を頂いた。

話をするわけでもなく、ゆっくりと時間が経っていった。

始めは聞きたい事が多数あったため、質問をしようと思ったが、男の雰囲気に飲まれたのか、この場の流れを読んだのか、話を切り出してくるのを待っていようと思っていた。

お茶も飲み終わり、男も書物を読み終えたのか、こちらに振り向き話をしてきた。

男「お茶と菓子はどうでした？どちらも口に合っていればよかったのですが・・・」

私と同じ金色の髪で両目は包帯を巻いて表情はわかりにくいが、不安そうな、しかし感想が気になるのか、そわそわしていた。

・・・どうやって書を読んでいたのかしら？

華琳「ええ、とてもおいしかったわ。初めて頂く物ばかりで。・・・素直に美味しいと言える私自身にも驚いているわ」

男「それはよかった。それらは、私が栽培しているものを使って用意したのですよ。初めてなのは仕方ないですね。」

嬉しそうに微笑みながら、私の湯呑み？に先ほどと同じ茶を淹れていく。

『見えてるの？両目包帯を巻いているのに・・・』

そんな事を思っていたが、男は茶を淹れ終わり話しかけてきた。

男「気分も、思考も落ち着いてきたようですね。これなら話をしても大丈夫でしょう。先ほどまではとても暗い顔をしていたので正直不安でした。」

それほど酷い顔をしていたのか。少し恥ずかしくなったが続けて語りかけてくる。

男「では改めて。私は、タチバナと申します。真名ですが、とても気に入っているので皆さんにはこちらで呼んでもらってます。」

華琳「・・・えっ？」

初対面の人間に『真名』を呼ばせる？
ありえないと思った。
突然の事で思考が停止しかかったが話は続いていく。

タチバナ「私の作った物を素直に美味しいと言ってくれました。真名を預ける理由に充分なります。あっ、場所も知りたかったのでしたね。私の屋敷で洛陽郊外です。と言ってもそれなりに街より離れてますが・・・」

状況が理解できずどんどん混乱していく。

タチバナ「あっ、すみませんでした。あなたの話を聞くつもりでしたのに、私ばかりが喋っても面白くありませんね。」

と、言いながらお茶を飲んで一息ついていた。

タチバナ「あなたの意見、質問、判る範囲ですべてお答えしましょう。」

そう言って私の方を静かに向いていた。

男と出逢う華琳（後書き）

華琳さんが華琳さんじゃないですね。

コルトです。

一応、恋姫は一通りやってるつもりですが、つもりですね。
言葉とか考え方とか違和感ありありです。
少しずつ直していきたいですけど、できるでしょうか？

人に見せても恥ずかしくない文章を作りたいです。

状況把握の華琳

気持ちを落ち着かせるため、深呼吸をし、改めてタチバナという男を向き、話を進めていった。

私が『この世界』の住人ではないこと、彼が洛陽からこの屋敷に帰る時に私を拾ったこと、突然、黒い円の中から私が出てきたことを教えてくれた。

さらに、黄巾の乱も反董卓連合も結成されてないことも知った。

そうでしょうね、劉宏つまり霊帝がまだ生きていること、何進がまだ大将軍になっていないのだから。

・・・とても頭が痛い状況を聞かされた。

過去に戻ったというのか？

確かに体が前より小さくなっているのはわかる。

えっ？どうやって確かめたかですって？

・・・鏡を見せてもらったからに決まっているでしょ？

何か言いたいことがあるのかしら？

・・・話をもどしましょう。

様々な状況から、過去に遡ったことは判ったが『私のいた世界』の過去ではないようだ。

その理由は彼に今までの話を聞いている途中で起こった。

タチバナ「確かに最近は賊の出没は後を絶ちませんね。黄色い巾？見ないですよ。それがどう『コンコン』？はい、どうぞ？」

扉を叩く音がして、それに反応した彼が扉の前まで行くと、ゆっく

りと扉が開いた。

開いた扉の先には、まさに名家の箱入り娘と言わんばかりの儚げな少女で、私はその少女が誰かわかってしまった。

華琳『董卓、か』

顔は波打つ髪で隠しているため判りにくいが、あの雰囲気や服装から判断できた。

タチバナ「月さんではないですか。く～ちゃんから聞いてないですか？塾は1ヶ月ほどお休みします、と。」

董卓？「へぅ・・・ごめんなさい。」

・・・可愛いわね。何故か苛めたくなるわ。

タチバナ「謝らなくてもいいですよ？こんな所まで来たのです。どうされましたか？相談事なら、すぐに、とは言えませんがお聞きしますよ。」

彼はそう言いながら、こちらを申し訳なさそうに見た。

華琳「かまわないわ。後で話が出来るなら少しくらい待つわよ？」

その様子を見て少女は、

董卓？「あっ、ごめんなさい！お客様がいらしたのですね。でしたら、また、後日・・・」

タチバナ「少しなら待つ、と言われていますから大丈夫でしょう。場所を移しましょうか？」

董卓？「いえ！私の話はすぐ終わります。ここでも大丈夫ですっ！」

董卓？「先生の多忙さは重々承知です！塾が1ヶ月休みなのもその状況からと理解できます！！ですが、その、そのような休みの時でないと、・・・1対1で・・・勉強教えてもらえない・・・ので・・・」

最初は意気込んでいたがどんどん声が小さくなっていく。

自分の言いたいことは言い終えたのか、俯いてタチバナの返答を待っているようだ。

恥ずかしかったのだろう。微かに見える耳はとても赤くなっていた。

そんなことを思って、彼を見ると少し考えるような仕草をして彼女

の目線に合わすように腰を落とした。

タチバナ「わかりました。可愛い教え子の頼みです。聞かないわけにはいきません。ですが、今日はあちらの方と話しをしています。明日の昼から授業をしましょう。」

何度も言うが、少女の顔は見えない。だが、とても嬉しそうにしているのは判る。

タチバナ「外にく～ちゃんと護衛の華雄さんがいるのでしょう？今日は3人とも泊まっていきなさい。部屋はわかりますね？後で夕食を作るのを手伝ってもらいますから、その部屋で待っていて下さい。」

董卓？「はいっ！！ありがとうございます！！後で、お手伝いしますね。」

外で待っている2人を迎えに行こうとしたのだろう。
走り去ろうとした彼女を止め、前髪に手を当てていた。

タチバナ「いつも言っているはずですが。前髪で顔を隠してはいけません。目も悪くなりますし、何より綺麗な顔が見れないじゃないですか。」

そんなことを言いながら、どこから出したか赤いリボンで少女の前髪を上げ、留めていた。

いきなりのことでビックリしたのか、動きが止まったが、頭の上から湯気が出そうなほど顔を真っ赤になったのを確認できたと思ったらその瞬間には姿を消していた。

タチバナ「やはり月さんはとても可愛らしいですね。あの姿を見るとほっとします。」

華琳「あなた・・・いい性格してるわね。」

タチバナ「ありがとうございます。私は紳士のつもりなので、そのような言葉は嬉しいです。あっ、取って付けたような言い方で申し訳ないですが、あなたもとても可愛いですよ？お人形さんみたいです。」

華琳「・・・本当、いい性格してるわ。」

改めて話をしようと椅子の方に戻ろうとすると、緑色の髪をした少女が物凄い速さでやってきた。

タチバナ「おろ？く～ちゃんじゃな・・・」

彼の言葉を一切聞かず、少女は走ってきた勢いを殺さぬまま、「このバカーーーーー！！！！！」と言いながら、タチバナの顔面に跳び膝蹴りを放っていた。

タチバナは窓を壊しながら華麗に外に飛んでいった。

・・・人間って、あんなにキレイに吹っ飛んでいけるのね。

肩で息をする緑髪の少女を横目で見ながら、タチバナが飛んでいった方に体を向け、ため息をついた。

状況把握の華琳（後書き）

よく見るとお気に入りされてました。ありがとうございます。

コルトです。

一応、簡単にこの小説の概要をm（＿＿）m

えっ？いらない？

・・・そんな事言われても勝手にやります。生暖かく見てあげて下さい。

？この小説は基本的に華琳さん視点で進んで行きます。主人公は華琳さんです。

？黄巾の乱より１０年前を設定してます。

？一刀君は出てきます。原作よりとても早く。

？原作キャラも早い段階で出てきます。董卓や賈駆（漢字が違う）は出てきましたし。

？原作キャラは死なないように書きます。まあ、予定にはないですから。

？魏オリジナルルートを取ります。

？私が進むは王道ではない。ただの覇道だ！！

?は言ってみたかっただけです。
ですが一応、覇道と王道、２つのルートを作ってます。どうなるかは華琳さん次第。だって主役ですから。王道だと被っちゃいますね。

双子で出てますがここの華琳さんは呉ルート後の華琳さんです。

ルート１２５ではないですよ?

あれ?違ったっけ?
・・・数学キライです。
長すぎる後書きでした。それでは。

自己紹介と華琳（前書き）

タチバナは紳士（変態）ではありません。

紳士（変人）です。

一緒ではありません！！よく見て！！

自己紹介と華琳

く～ちゃんと呼ばれる少女の一撃により、外に吹き飛ばされたタチバナは一つの怪我もなく、楽しそうに帰ってきた。

タチバナ「何とも、とても素晴らしい一撃です。天下を狙えますね。」

く～&華琳「「いやいや、狙えないから。」」

く～「じゃなくて、よくも月を泣かせたわね！！その罪重いからね！！」

董卓の真名を呼んでいること、く～ちゃんと呼ばれていることから、彼女が賈駆だろうと予測した。

董卓とは、以前に会って話をしたことがあるため幼くなっても何となくわかる。
しかし、賈駆は反董卓連合でも表舞台にでてこなかったためどんな人物なのだろうかわからなかった。

・・・まあ、こんな人物なのだろう。

先ほどから、節操なしや、女心がわかってないや、く～ちゃん呼ぶな！！と、桂花ほど酷くはないが、プチ桂花を見ているような錯覚

に陥っていた。

賈駆「・・・だからあんたはダメ人間なのよ。先生なんだから少しは学習しなさい！後、月のこと言えないわよ？包帯取りなさい。・・・あんたの顔見れないじゃない・・・」

最後の方はよく聞き取りにくかったが、どうやら彼が嫌いなのではなく、慕っていることはわかった。

タチバナ「おお！忘れてました。『氣』で本を読む鍛練の途中でしたから。」

『氣』で本を？考え方がぶっ飛んでるわね。

タチバナ「月さんやく～ちゃんの反応があまりに可愛いので、つい苛めたくなるのですよ？ダメ人間なのは仕方ありません。妹も救えない男ですから・・・」

包帯を取りながらそんなことを言う。包帯を外して見えた目は、これまた、見えてるの？と言いたくなるほど細かったが、哀しい表情なのは簡単に見て取れた。

賈駆は始め、顔を赤くして何か言おうとしたが、あとに続いた言葉により、申し訳なさそうな表情を浮かべる。

賈駆「無神経だったわ。ごめんなさい。」

タチバナ「いえ、く～ちゃんの言うとおりです。少し学習が足りません。あなたの言ったことは真摯にうけます。紳士なだけに。」

3人「「「「・・・」」」」

華琳「真面目って言葉知ってる？」

タチバナ「ヒドいですね・・・。いつも真面目で本気ですよ？愛しいく～ちゃんを笑顔が見たかっただけなのに。」

わき腹に回し蹴りが放たれていた。

タチバナ「やれやれ、やっと落ち着いて話ができますね。」

あの後、息を切らして追いついた董卓と、妙にニヤニヤした顔の華雄に引きずられ、賈駆は書庫から退場していった。

華琳「全面的にあなたが悪いわよ。」

タチバナ「手厳しさにぐうの音も出ません。」

私ははぁっ、とため息をついてると彼は話を切り出してきた。

タチバナ「いい加減、話を進めましょう。夕食の用意もありますし、あなたも色々考える時間もほしいでしょう。」

タチバナ「お客様、あなたでは楽しくないのであなたに自己紹介をしていただきましょう。」

華琳「ええ、そうね。あなたには世話になるでしょうし。私もお客様と言われるのは面白くないわ。」

タチバナ「では、ちゃんと名乗りましょう。私は、曹家当主代行、姓は曹、名は弥光（びこう）、字は孟徳、真名をタチバナと申します。」

華琳「っ！！『やっぱり』私は、姓は曹、名を操という。字はあなたと同じ、孟徳、真名を華琳と言うわ。」

タチバナ「私が言うのは何ですが、真名をよろしいので？」

華琳「愚問ね。あなたはわかっていたのでしょう？」

彼は笑顔だった。

タチバナ「ありがとうございます。やはり聡明な方でしたね。連れてきてよかった。とりあえず、これからどうされます？」

華琳「はっきりいってどうすればいいかわからないわ。暫くは、あなたのところに厄介になろうと思うけど・・・」

タチバナ「構いませんよ。でしたら、塾の手伝いをして下さいますか？曹家の方は、しばらくやることはないですから。あっ、先生してほしいと言うわけではないです。補佐してほしいというのです。」

華琳「そうなの？でも塾の方も休みなのでしょう？」

タチバナ「多分、月さんみたいな子が何人か来ると思いますから。早速ですが、私の予定をお伝えします。あちらの紙にも書いてますが頭にも入れておいて下さい。」

彼の予定は、今日と明日以外、意味がわからなかった。
なぜなら、３日は昼から荊州、４日は朝から幽州となっていたから。

華琳「ねぇ？幽州や荊州って毎日行って帰れる距離じゃないわよね？この予定おかしいのではないかしら・・・」

タチバナ「？？私が本気で走れば幽州までは、一刻（３０分）くらいで着きますよ？」

華琳「意味がわからないから！！あなたの体は何で出来てるのよ！？」

タチバナ「私の体の半分はやさしさで出来ています！」

あっ、何かとても殺してやりたくなった。賈駆があれだけ、蹴り飛ばす理由がわかる気がした。

タチバナ「まあ、半分冗談ですが、幽州までは、一時（2時間）くらいですかね。行くのは、5日後にある演舞の用意のためです。大事な方が来られます。なので特殊なお茶請けを用意したいのです。」

董卓の所に厄介になった方がいいのかしら？
頭が痛くなってきた。

タチバナ「ああ、朝と夕方からは屋敷にもどりますので。食事の都合はちゃんとつけます。心配しないで下さい。」

そう微笑みながら言っていた。

・・・心配なんてしていません。誰か助けて下さい・・・

早くも不安と後悔に陥っている華琳だった。

自己紹介と華琳（後書き）

本小説を読んでいただいてる皆様、ありがとうございます。
心より御礼を申し上げますm（＿＿）m

コルトです。

話が進みません。予定ではもう原作キャラ何人か出てるんですが・・・

・

ん～もう少し、文章増やすべきか？どうですかね？

次の話は、一応文章増やすつもりです。
夕食会、最初の朝、弥光塾をお送りしますの予定。

それでは、また。

買駆と夕食と華琳、と悪巧み？（前書き）

うん。
無理だったんだ。
嘘つきました・・・
ごめんなさいm（＿＿）m

賈駆と夕食と華琳、と悪巧み？

数日の予定を確認したタチバナは、夕食を作りに出て行った。
私も手伝うと言ったのだが、どこからかお茶と菓子を取り出して呼びにくると言っていた。

華琳『まあ、少し整理する時間も必要か。』

そのような配慮だろう。
夕食の用意にしては少し早い、と思うし。

タチバナ。
彼は今までの対応を見ている限り、かなりアホな行動もするが人を気遣ったり気持ちを汲むこともできる人物なのだろう。

少なくとも、突然現れた私を疑いもせず助け、真名や生活の場を与えるくらいだ。

代行とはいえ曹家の当主にいるほどだから、広い器を持っているようだ。
・・・器に穴は空いてそうだが。

能力はどうだろう。

知識は、董卓や賈駆もいる私塾を開いていること、この書庫の容量を見れば容易に想像できる。

武の方は、子供の力とはいえ大人を窓の外へ吹き飛ばす一撃を喰らいながら無傷でいること、使い方は不明瞭だが『氣』を扱うことができる所からかなり高いことがわかる。

性格にクセがあるが、有能なのは変わりない。

暫くは彼についていくのが賢明か。

私一人がここにいる理由。

元の世界に帰ることができるか。

仮に帰ることができなければどうなるか？

また戦乱になる。

黄巾の乱を皮切りに群雄割拠の時代に・・・。

・・・なるのかしら？

張角達の起こした騒乱は、今より１０年弱後に起こる。

『私のいた世界』で、だ。

彼の話を聞く限り、そのような風潮はみられない。
後、何年かすればわからない。
起こるかもしれない。
起こらないかもしれない。

今はとにかく情報が足りない。

予定の構成がおかしいが、彼は色々な所に行くみたいだ。
彼の補佐なのだから言えば連れていってもくれるだろう。
その時に、情報を手に入れよう。

ついでに言えばうまく立ち回れば幼少期の英雄達と会えるかもしれない。董卓や賈駆に会えたのだ。可能性はあるだろう。

この世界でも楽しみができた。

部下たちも心配だか、どのようになっても後悔はない。
そこにいる世界で私の道を進もう。

・・・そういえば、曹家なのだから近くに春蘭や秋蘭はいないのかしら？

曹家が機能していない？疑問にならない方がおかしかった。

『妹』というのが関係しているのか？

『当主代行』という、本来ありえないだろう。

彼の立ち位置が気になる。

聞かなければならないことがたくさんあるなと考えに没頭していた。

かなりの時間、思考の海に入り込んでいたのだろう。

く～ちゃんと言われていた賈駆が夕食ができたと呼びにきた。

賈駆「夕食の時に自己紹介するだろうけど、先に名乗っておくわ。少し時間もあるし。賈駆、文和。先生みたいにく～ちゃんとは呼ばないで。」

あんたから先生にかわっている。いじったら愉しそうだけど止めておこう。

・・・彼女はやはり賈駆だったか。

華琳「私は曹操、孟徳。真名が軽いものでなくてよかった。彼、初めの名乗りは真名からだったから・・・」

賈駆「ふ～ん。先生に随分信頼されてるわね。・・・まあ、名も字も一緒だったからって理由もあるでしょうけど。」

華琳「亡くなったという妹と一緒ってこと？」

賈駆「先生のいない所で言うのも難だけど、多分そうよ。でも、その理由は1割くらいね。気に入ったってのが大半でしょう。」

華琳「そう。まあ、いいわ。一つ聞きたいのだけど、曹家当主代行って彼は言ってたけどどうなってるの？」賈駆「代行、代行って先生はよく言うけど、曹家の正真正銘、現当主よ。多分、この塾続けたいから、名目上、そんなこといってるのね。」

少し嬉しそうに頬を染める。

賈駆「洛陽に本家があるの。使用人も全員そっちにいたから先生もいると思ったんだけど、何か、1ヶ月は誰も来ちゃダメだって使用人達は言われたんですって。」

華琳「たまたまなのね。ここに人がいないのは。」

賈駆「そうよ？本来は、春蘭、秋蘭・・・ああ、先生の従姉妹なんだけど夏候姉妹はついてくるんだけど・・・彼女達もダメって言われたみたい。」

ここで、春蘭や秋蘭の名前が出てくるか。

いないわけではないことがわかりほっとした。でも、彼女らは賈駆

と真名を交換してるのね。

やはり私の世界とは何か違う。

少し不安だ。

英雄達と出会えるのは楽しみだが、私のよく知っている顔と逢ったときどうなるだろう？

特に春蘭や秋蘭との邂逅は不安の一言に尽きる。

また、思考の海に入り込みそうになったが、賈駆が呼んだ。

賈駆「聞きたいことはもう、ない？なければ、ご飯食べに行こう。そろそろ本当に出来上がってるだろうし。あっ、妹のことは禁句ね！？ボクが喋ったって怒られちゃう。」

華琳「ええ。わかってるわ。２人のヒミツ、ね。」

賈駆「ありがとう！ヒミツを共有するんだから、真名を預けるね。ボクは詠って言います。よろしく！！」

華琳「私こそありがとう。真名、華琳を預けるわ。よろしくね、詠。」

私達は、笑いながら3人の待つ部屋へと急いだ。

夕食は、『かれー』と言う香辛料の強い料理だった。
辛いものが苦手な私だったが、董卓や詠は好物らしい。
美味しそうに食べるのを見て、意を決し口に運ぶ。

私が想像したものと全然違った。

名前の通り、辛いものかと思ったが、確かにピリッとはする。
しかし、それ以上に、甘みも運んでくる。

甘みの正体は、りんごと蜂蜜だった。

子供の出入りが多いため、食べやすいように辛味を抑えて甘くしているそうだ。

華雄のそれは、とても赤かった。
顔も真っ赤にしながらすごい速さで食べていた。

食事中は、お互いの自己紹介をし、他愛のない話をしていた。

ちなみに、皆、真名を預け合った。董卓、月は勿論のこと、なんと華雄の真名も預かった。

『澪香(れいか)』と、言うそうだ。

タチバナが、月の護衛に華雄が任命された時、自分には真名がないと泣く華雄に、新たな気持ちで月さんを護って下さいと、与えたらしい。

華雄、澪香はとても気に入ったそうで、この真名を知らない者の前では絶対に口にしないでほしいそうだ。

・・・本来、そういうものよね？真名って。

食事と雑談が終わり、私を部屋へと月と詠が、懐中電灯と言う明るい光の出る道具を使いながら案内してくれた。
原理は2人共わからないそうだが、ハンドルというものを回せば光るというのはわかるらしい。

真桜も似たようなものを造ってたわね。何度も壊れていたけど。

私の部屋の隣が、彼女達がいつも泊まる部屋らしい。
何かあれば呼んでほしいと言われ、彼女達と別れた。

1日で色々な事を体験した。

赤壁での敗北。

謎の双子に別の世界に送られた。

身体が小さくなったこと。

月や詠、澪香と、そして直感だが、私と同じ道を進むであろう『タチバナ』という男との邂逅。

目まぐるしく変わる事態と、考えすぎで、疲れた。
・・・ついでに、この懐中電灯を回すのに疲れた。

寝ようと思い、寝台に近づいた時、ふと、机の上に紙が置いてあった。

『今日はお疲れさまです。色々な事があり疲れたでしょう？明日か

らお願いをたくさんします。ゆっくり休んで下さい。』

・・・こういう気遣いは大事ね。

自分の口から言えばいいのにと笑みが浮かんだ。

『一つお願いですが、毎日、どんなに疲れても日記を書いて下さい。後で、添削しちゃいます。』

・・・格好が子供だから仕方ないが、何故か納得できないわ。

まあ、お願いだからしなくてもいいのだろうが、一応、簡潔に月や詠、澪香の事を書いた。

寝台に潜り込むと、睡魔が襲ってきてそのまま意識を手放した。

タチバナ

夕食の片付けを終え、書庫へと足を運んだ。

『氣』を巡らせると周囲に生体反応はない。

月さんとく～ちゃん、華琳さんは自分たちの部屋で話をしているようだ。

澪香は日課として義務付けた、精神統一を外で行っているようだ。

・・・それでいい

今はまだ、偽りの平和を楽しんでほしい

もう曹蒿も陶兼も抑えきれないだろう

まあ、保ったほうだ

乱世は間もなく訪れる

用意は間に合わなかったが・・・

しかし種は蒔けた

彼女達に任せる、か

愛しいから

生きてほしいから

開花することを祈るばかり

「さて華琳さんには悪いですが、私の目的に付いてきてもらいますか。」

誰に言うでなく、ただ、静かに、呟く

一日目、終了

賈駆と夕食と華琳、と悪巧み？（後書き）

突貫工事意味不明？

コルトです。

文章書きながら、１０分くらいで読める方がいいよね？と方針をかえました。

一日目、終了。

詰め込み過ぎ感が否めない。

弥光塾や幽州、荊州のくだりは軽くしようと思います。

だってこのままやると原作始まる前に終わっちゃいそうなので・・・。

我慢強くないですよ？タチバナさんは。

多分、華琳さんも。

次か、その次に幕間を入れます。

予定の修正したりするので。

ついでに、ご意見、ご指摘いただけるとありがたいです。

気が向いたらでいいですよ？

読んでいただきありがとうございますm（　）m

人外認定と演舞の華琳

彼の1日は早い。
夜が明ける頃には既に活動を始めているみたいだ。

今日はとても気持ちよく寝ることができた。
こんなに快適な睡眠がとれたのは何時以来か？

私が起きた時、タチバナはすでにいなかった。

勉強会を始める前まで帰ってこないそうだ。
いつもは大雑把だが行き先を告げるのだが、稀にこんなこともあるそうだ。
ちゃんと時間になれば帰ってくるので気にしないほうがいいと詠は言っていた。

タチバナは昼過ぎにふらっと帰ってきて、さっそく月と詠の先生をしていた。

やはり2人は優秀だ。
あの年で政治学や軍学、文学に幅広く精通している。
後は経験さえ積めば、問題ないだろう。
彼女達の勤勉さだけではない。
彼の教え方も上手だ。

私の知っている春蘭でも、彼に師事をすれば『残念な子』からすぐ卒業できそうだ。

となると、こちらの春蘭は頭の方も優秀なのだろうか？

不安に思っていたが、会うのが楽しみになってきた。

澪香が暇そうにしていたので、私と一緒に武の鍛練をお願いした。

・・・少し驚いた。

私の世界の華雄は猪武者と言われるくらいの猛将だった。

しかし、こちらの華雄、つまり澪香は全く違う。

いや、基本は一緒だ。

武に絶対の自信を持っている。

なのにそれに慢心する訳でなく、日々、自分の武を高めようとする姿勢を感じ取れる。

鍛練を終えた後、少し聞いてみた。

澪香「月様を護るため、誰よりも高く、強くならなければならない。タチバナ様を見れば私は足元にも及ばないことは明白だ。タチバナ様は教えて下さった。何故強くなりたいのか、と。」

澪香「強くなるのは誰でもできる。その先が見えなければ本当の強者にはなれない、と。私は強くなりたい。月様を護るために。そして、私を導いて下さったタチバナ様に恩返しをするために高くなりたいんだ。」

仮に反董卓連合が組まれることになったら、連合に勝てる要素はないわね。

鍛練も学習もとても有意義なものになっていた。

次の日は、朝から学習や鍛練だったが、どちらも貴重な体験だった。

・・・そして、今日は演舞を披露する日だ。

なに？幽州や荊州はどうだったって？

貴重な体験をさせていただきましたよ、ええ。

どちらも日帰りできるくらい近かったのね？

・・・そんなわけないじゃない！！

なんなの！！あれ！？

『氣』を脚に纏わせて、それを放つを交互に行えば速く走れる！？

バカじゃないの！！バカじゃないの！！！！

死ぬかと思ったわよ・・・速すぎるわ・・・

2日とも唐突に小脇に抱えられたかと思えば、行ってきますで屋敷を出て行き、一時もしない内に目的地に着いてるのよ？

・・・出かける際、小脇に抱えられている私を見ながら、月と詠は顔をひきつらせ遠い目をしてたし、澪香は『生きて・・・帰ってこいよ？』とか言うし、本当に日帰りできるとは思わないわよ・・・

ちなみに、荊州へは劉表に会いに、幽州にはどこかの洞窟から氷を、荷車3つ分くらいの量を片手で軽く持って、行きとあまりかわらない速さで帰った。

あれの人脈の広さ、人間（笑）の能力を見せてもらったわ。

私以上の才能を持った人間と、この数日で思ってたけど、違うわね。

あれを、『人』と認める訳にはいかない。

あれは、『人の皮を被った何か』なのよ。

人類を無礼るなっ！！

・・・もう止めよう。

気分悪くなってきた・・・

・・・とりあえず、今日は演舞披露の日。

ちなみに誰が来るのかしら？

特別な人とは言っていたがそれ以上は教えてくれなかった。

まあ、誰が来ようがこの数日を体験した私が驚くようなことは、そう多くないわ。

・・・特別な人ってのが、皇帝とかだったら驚くかもしれないわね。

仮に皇帝だとしても、それはない。
演舞披露なら、あれが洛陽に赴いて皇帝の前で然るべき場所で行うものだ。

そんなことを思い、私は驚くこと2刻前の状態になっていた。

結論から言えば、特別なお客様は、『現』皇帝劉宏と、その娘姉妹の劉協、劉弁の3人だった。
月や詠、澪香の3人もまさか陛下がこんな所に来るはずもないと思っていたのだろう。

3人とも、姿を見るや凍りついていた。
陛下やその娘達を見えた事があったのね。
一般の人間なら、そのお姿を拝見することさえ出来ないのに・・・

あれはなんてこともなく、いつも来るお客と同じように対応していた。

タチバナ「ようこそ、弥光塾へ。陛下、劉協様、劉弁様。わざわざのご足労をありがとうございます・・・」

そう言って礼をしている。

劉宏「久方ぶりだな、曹弥。いや、元々は朕が無理を言ったからじゃ。すまぬな。」

劉協「演舞見に来たぞ、先生～。」

劉弁「遊びに来たぞ－！」

劉宏「これ、協、弁！大人しくしていることが、今回連れてくるときにした約束じゃったはずじゃが？」

劉宏の後ろから出てきたと思ったら、タチバナにくっ付いてグルグル回ってた。

タチバナ「お二人とも、久しぶりですね。会えて嬉しいですよ。さあ、立ち話より席をご用意しております。どうぞ、こちらへ」

そう言って、2人と戯れながら部屋へと案内していった。

タチバナ「ああ、華琳さん。彼女達を早く溶かしてあげてください。あちらへ行ったらお茶や演舞の用意をしますから。」

華琳「えっ？ええ、わかったわ。」

・・・置いて行かれた。

どうやって3人を復活させようかしら？

3人を復活させ、武道場へと移動するとすでに、お茶や菓子が用意されていた。

タチバナはいつもの白い着物ではなく、黒を基調にした服装で赤い首掛けを巻いた格好でいた。

2人の太子は、『あいすきゃんでー』と言われるものを食べていた。幽州から持ち帰った氷に穴を空け、そこに果物の果汁を薄くしたものと棒を入れ、1日冷やしたものだ。

独創性は豊かだと思う。

氷をあの様に使うとは考えなかった。

劉宏は静かに目を閉じ待っていた。

タチバナ「さて、皆さん着きましたね。月さん達は此方に。華琳さんは劉宏様の側にいてください。」

彼はそう言うと武道場の中心に移動した。

タチバナ「楽器があるといいのですが、今日は舞だけでご容赦を。」

その言葉の後、場は一気に緊張感を増す。

彼は少しずつ、動き出す・・・

・・・説明をするにしても、言葉というのは不完全ね。

何時までも見ていられる、惹かれる、美しい・・・

一つ一つの動きに無駄がない

この世の光景ではないように感じた

陳腐だけど、これくらいしか説明が難しい。

月達は完全に見とれていた。太子2人も同じだ。

だが・・・劉宏は違った・・・

ただ、涙を流していた

あの舞を忘れないように

その心に、魂に刻むためのように

涙を流しながら、見続けていた

動きが止まった。

体を少し斜めに構え、右手をお腹の前ほどに出し、腰を曲げていた。

礼の格好だろう。

どうやら、演舞は終わったようだ。

拍手が起こった。

自然にそれはできた。

・・・本当に底が見えないわ。

もし彼があの赤壁で、私の横にいてくれたら・・・

意味のない考えね。

少し感傷的なっている。

素晴らしいものを見せてもらった。

今は月達5人と戯れている、あれを褒め称えよう。

人外認定と演舞の華琳（後書き）

滅茶苦茶だーーーーーー

コルトです。

やっぱり、一つに纏めようとするからダメなんですね。

て言うか、華琳さんはっちゃけてますね。あの人こんなんじゃないでしょ？

まあ、『覇王』の仮面が取れてのびのびとしていると思っていただければ。

次は幕間のつもりでしたが、６日目を終わらせてからにしたいので一回ズレます。

未定が予定とはよくいったもんだ。

んっ？予定は未定か？

どうでもいいですよ？

次は、華琳さん、劉宏、タチバナ３人の対話です。

劉宏と華琳

お茶会が続いていた。

演舞の熱が冷めないのか、子供5人（澪香含む）はタチバナとずっとおしゃべりしている。

劉宏は1人静かにお茶を飲んでいた。
私はその姿勢がだんだん気になりだした。
話をしようと声をかけると・・・

劉宏「すまぬな。曹弥、そろそろ・・・」
タチバナ「そうですね。いい時間になりますね。月さん、く～ちゃん、太子2人を暫くお願いしますね。」

と言うと、劉宏と2人部屋から出て行く。

タチバナ「あっ、華琳さんも来て下さい。来ないと今日の夕食によく漬けたキムチを出しますよ？」

そんなことしなくても、呼べば行くわよ・・・劉宏の様子も気になるし。

月はオロオロ、詠はギャーギャー、澪香はニヤニヤ、太子2人は？

？と、皆、様々な表情を浮かべていたが、私はそのままにして部屋をあとにした。

付いて行くと、そこはタチバナの自室。

タチバナは私に宛てがった部屋には頻繁に出入りするが、彼の部屋に私が入る事はなかった。

因みに、この屋敷には侵入しては絶対にならない部屋が2つある。

1つは、歌の部屋と看板のある部屋。・・・彼の友達の部屋らしい。

もう1つは、タチバナの研究室だ。

昔、使用人が何人か入り、全員数日、魂のない抜け殻状態になったそうだ。

その時の記憶は誰1人、覚えていなかったため、その部屋に何があったかはわからない。

・・・彼曰く、『植物の栽培と、生活用品の開発ですよ？』だそうだ。

本当に何かある部屋かしら？

話がそれた。

部屋に入ると、寝台と机と、椅子が3つ、後、彼が好んで使う、お茶淹れが置いてあるだけ。（お茶淹れは、てぃーかっぷとぽっととというらしい）

他は何もなかった。キレイなものだ。

机、椅子、てぃーかっぷとぽっとを運び入れただけ、普段、この部屋は使われていないのだろう。

生活感が全くない。・・・いつもどこで寝ているの？

そんなことを感じる部屋だ。

お茶の用意をしながら、椅子へと促す。

用意が終わり軽くお茶を飲むと、タチバナが話し出す。

タチバナ「普段から使わない部屋なので、落ち着かないかもしれませんが・・・」

劉宏「問題ない。曹弥、この者は信頼の置ける者か？まあ、お前が呼んだのだ。間違いはないだろうがな。」

タチバナ「信頼してますよ?私の計画には絶対に必要な方です。後1人いますが、彼はまだいません。もう間もなく来るでしょうが。」

劉宏「そうか。では、先に名乗ろう。・・・その前に言葉を崩そう。彼女も話しにくいだろう。」

劉宏「我は漢王朝、現皇帝劉宏。お飾りだがな。現に、供も連れずにここに来れる。」

華琳「私は、姓は曹、名は操、字は孟徳と申します。彼、曹弥光の補佐を任されている者です。改めて、初めまして、陛下。」

劉宏「そうか。あやつと同じ、か。計画が進むな。ああ、言葉は崩せ。先にも言ったが飾りは飾りだ。威厳や威光など、ない・・・」

悲しそうな悔しそうな顔をする。

タチバナ「そんな顔をしてはいけませんよ。あなただけの責任ではありません。時代が悪かった、と言うのはよくないですが、あなたはその体でよく保ちました。ここまでできたのです。もう少し頑張りましょう。」

劉宏「・・・陶兼が負けた・・・曹蒿も一線を退かざるをえない状態だ。十常寺を抑える者は誰もいない。私は悔しい!母が曹弥、お前を政務に就け、私の教育係としてちゃんとつけてくれれば・・・」

華琳「ちょっと待って!陛下の母って劉志、つまり桓帝よね?・・・

タチバナ、あなた、一体いくつよ!?」

タチバナ「ん～どうでしょう?永遠の17歳というのはどうですか?」

劉宏「それは無理があるだろう。少なくとも我より歳は上だ。」

タチバナ「でしたら、1000歳にして下さい。漢王朝より永く生きているということで・・・」

華琳「やはりバカなのね?あなたは人間辞めたの!?ああ、そういえば、『人の皮を被った何か』だったわね!!化け物と言うのもおこがましいわ!!」

本当に腹が立つ!!呼吸をするように冗談やアホな事を言う。

私をある意味、屈服させるほどの力を持っているのに・・・もう少し、本気になれないのかしら?

劉宏「曹弥の言うこと、やることを本気にすると疲れるぞ?バカでアホだが信頼も信用もできる。曹操、ついていってくれ。」

華琳「・・・まあ、陛下がそう言われるなら。有能なのは変わりないし。」

タチバナ「2人ともヒドいですね。真摯に対応してるのに・・・し『それ以上言わせないわよ!!』・・・そうですか。では、話を戻しましょう。」

突然、膨大で重い『氣』が部屋を侵食する。

タチバナ「劉宏様、いえ、灰霊、本題を言いなさい。演舞を見に来た、だけではないでしょう。もう生きられないや、もう無理などの弱気は聞きません。」

いつもの丁寧で落ち着いた軽い口調ではなく、丁寧だが覇気を含んだとても重い言葉だった。

劉宏「っ！！・・・その雰囲気でいつも対応すれば信用されるのに。」

タチバナ「この『氣』に耐えられれば、ね。普通では無理です。絶対に子供は耐えることはできません。必要な時に必要な分だけ纏いますよ。」

私もそうだった。
無意識に覇気を纏っていたから周りはついてこれなかった。
有能な者を選別するのにとても便利だったが・・・

劉宏は何とか話ができているが、私には無理だった・・・

『私と同じ？とんだ勘違いだったわ。何においても私を超えるのか・・・』

彼についていくのは正解だ。

いや、ついていきたい！

改めてそう思った。

タチバナ「ああ、突然すみません、華琳さん。あなたは慣れてなかったですね。今抑えますね。」

華琳「・・・いえ、大丈夫。あなたの補佐なのでしょ？今から慣れていくわ。」

劉宏「すごいな曹操。・・・本題を言おう。タチバナ、許昌を治め『嫌です♪』て・・・悲しくなるのだが・・・もう少し、考えてはくれないか？」

あまりにも簡単に拒否するので拍子抜けだ。

タチバナ「前にも言いましたが、今は地を治めるつもりはない、と。5年後です。5年後でしたら・・・許昌で構いません。そちらを治めます。その前に、月さんの董卓の根回しはどうなってますか？」

劉宏「ようやく、いつ統治してくれるか明言してくれたな。それだけでも来た甲斐がある。董卓の件は、曹弥と同じかその前にはできる。正直、お前は今すぐにでも太守に命ぜるのだがな。」

華琳「曹家の当主とはいえ、そんなに簡単になれるの？」

劉宏「曹弥の光は、我が贈ったものだ。天の光を放つもの。天は我、光は曹弥、我らの仲を示している。飾りとはいえ、これくらいはできる。」

２人は見つめ合い、微笑んでいた。

話し合いは終わった。

突然、劉弁が泣きながら部屋に入ってきたからだ。

タチバナと話したくて、堪らなくなり捜したが見つからず、泣いてしまったのだ。

さすがのタチバナも困った顔をしていたが、劉弁の必死な願いを聞き入れるため劉宏との話は終わった。

暫く話をしたり遊んだりしていたが時間が来たため、劉宏達は帰っていった。

今度、勉強を教えに行くと約束していたので太子２人は嬉しそうだった。

劉宏とはあの後、一言も言葉を発する事なく顔を合わせるだけだった。

今日も色々あった。
明日からの予定は不明だが、少なくとも5年後に許昌を統治する事はわかった。

タチバナの謎が少しわかったが、新たな謎もできた。
だが、彼について行けば、帰る方法もわかるかもしれないと、漠然だが確信めいたものはあった。

6日目終了

月達はどうしたかって？

部屋に入ると、月は顔を真っ赤にして倒れてるし、詠は隅でブツブツ言って座り込んでるし、澪香は壁にめり込んでるし・・・

・・・一体、何があったの？？

劉宏と華琳（後書き）

かなり詰め込んだ感が拭えません。

コルトです。

他の事しながら、書いたので変なところあるかもしれません。

・・・皇帝が、供も付けずに外に出るなんておかしいの極みですが。

突貫工事ですが6日目終了。
楽しく読まれたでしょうか？

ご指摘、感想お待ちしますm（＿＿）m

次は絶対幕間！！

キャラ紹介や状態説明など、本編より多く書くかもしれません。

１０分、小説にしたいけど・・・

では、また！

幕間のコルト

いらっしゃいませ、コルトです。
予定通り幕間でございます。

色々言いたい事あるんですけどね。
あんまり、こういうのやるとつまんないかな？とか思うんですがどうでしょう。

まあ、次は考えますよｍ（＿＿）ｍ

とりあえず、歴史背景から。

三国志の雰囲気も織り交ぜながらやろうと考えましたが、ぶち壊しました。
私評論家じゃないですし、知識も横山三国志と某１００人切りとか１０００人切っちゃう無双なゲームが基ですので。
この時代の雰囲気とか、何があったかはあまり知りません。
党コの禁とか賄賂政治とかこの辺りになってくるのかな？よくわかりません。

政治的背景について

先にも述べましたが、よくわかっていません！（おつむ弱いので・・・）
陶謙や曹蒿が一緒とかな～んか違う気がしますがあまり考えてませ

んでした。
華琳さん、自分の父親？の名前出てきたのに指摘なし！！・・・忘れてた！！
まあ、ここではモブキャラなので気にしない！
行政区分は出来るだけ合わせたいな、原作とか史実に。

文化について

思想は儒教が盛んでしたね。五常とか五倫とか。でも確か、孔子の教えに男尊女卑とか女尊男卑な考えってなかったような？
科学技術は完全にオーバーテクノロジーですよね？恋姫って。
ツッコミどころ満載ですけど、それでは面白くない。
なので、私もオーバーテクノロジーしますｍ（＿＿）ｍ・・・ある程度、時代には合わせます。

海外の様子について

タチバナ的には外から色々仕入れをさせたいのでちょっと考えますね。
五胡との兼ね合いも少し考えます。

オリキャラ・恋姫達について

出来るだけ恋姫は全員出せるよう努力を・・・
何分、人数が多い。なかなか大変ですね。
それに伴い、オリキャラは出たりしますが活躍する事はほぼなし。
華琳さん、半分オリキャラ化してるし。
タチバナさん、この物語のキーキャラだし。
劉協や劉弁ど～しよ？出ても出んでも大局は変わらないし。

名について

この小説、ケータイで書いてるので漢字変換少ない・・・
賈駆とか、荀イクとか、シ水関とか・・・
誤字だけど誤字じゃないんだ。
パソコンで打ったほうかいいのかな？

と色々書きましたが、要約すれば『独自解釈』です♪

何て素晴らしい言葉ですか。
８００字近くを、４文字で纏めることができるなんて！

・・・哀しい・・・

今日はこの辺りにします。
また、説明したい事とかあったら幕間使うかも・・・

今から下は、キャラプロフィールです。
見なくても本編には影響ありませんが、気になる方は戻るボタン的なものでお戻り下さい。

それではまた次回。次は、トモダチと姉妹と華琳をお送りしますｍ

（　）m

キャラプロフィール　ＮＯ．１

華琳

姓は曹、名は操、字は孟徳、真名は華琳

武器　大鎌『絶』（この世界でも存在し、タチバナが初日に渡した）

みんなの主人公、華琳さん。
謎の双子により自分の世界と、似て非なる世界に飛ばされる。現在タチバナの補佐として振り回され、日々奮闘中。自分の世界の記憶、経験により全能力上昇。

覇気が『なぜか』消えている。
そのため、月も詠も普通に接してる。
覇王の仮面が取れて若干はっちゃけ中
彼女の未来は明るいか？？

容姿　真・恋姫†無双と同じ（少し小さくなっている）

タチバナ

姓は曹、名は弥光、字は孟徳
名の光は皇帝『劉宏』より賜りしもの

武器　居合刀、鞭、護身剣

人でも化け物でもなく『人の皮を被った何か』（華琳命名）。
曹家現当主（代行は勝手に言ってる）。交友関係はとても広い。現在確認できるは、董卓、賈駆、華雄、劉宏、劉協、劉弁の先生。他にも多数いるが判明していない。

家庭菜園、発明が趣味。
お茶好き。
華琳さんを助けた紳士（変人）。
不明な点が多いが、華琳さんは信用だけしているらしい。
とある目的のため、華琳さんを巻き込む。

容姿
中の上くらい　目はとても細い
髪は金髪で、秋蘭さんの前髪をとっただけの感じ
私服は白い着物
戦闘時は某ゲームの大魔王様兼族長の服と赤いマフラー（月が作った）

月

姓は董、名は卓、字は仲穎、真名は月

武器　弓、護身剣（タチバナが持つものと同じ）

未来のメイドさん一号。
弥光塾出身により、能力は高い。
勉強と共に、お茶の淹れ方も学んでいる。

タチバナを慕う、物静かな儚い少女。
よく顔を真っ赤にして倒れてる。
原作より少し積極的な性格になっている。

タチバナの事になるとたまに黒化する。
知力、政治能力共にとても高い。（詠よりは高くないが）

容姿　華琳と同じ状態

詠

姓は賈、名は駆、字は文和、真名は詠

武器　レッグガード（タチバナよりもらった）

未来のメイドさん二号。
弥光塾出身のため、能力高め。
華琳さんの友人？一号。ツンツン同盟結成か？
足技が得意になっており、タチバナ限定ではなく実戦レベルで使えます。
足技についてはいつも月に指摘されている。
月を第一に行動する傾向にあるが、月はタチバナを優先して動きます。・・・詠かわいそう・・・
性格は少し柔らかくなっているが、言うことは厳しい
容姿　月や華琳と同じく少し幼い

澪香

姓は華、名は雄、字はなし、真名は澪香

武器　金剛爆斧

詠より月を第一に考えて行動する。
月の護衛役。
タチバナから毎日、精神統一をやるように義務付けられている。
それにより、頭を使うこと、冷静さを覚え、猪武者の称号は無くなっている。（でも突撃はする）

ある一言を言うと烈火の如く怒る。
普段は、月や詠のお姉さん的立場にいる。
容姿　へそ出しルックはご愛嬌。

双子

名は白と黒

華琳さんを別世界へ送った元凶。
人物、能力、目的一切不明。

以上。幕間終了

トモダチと姉妹と華琳

劉宏達が訪れた日から数日が経った。

毎度のように、朝はどこかへ行って（ちゃんと行き先は言うが）昼は月と詠に勉強を教え、夜は澪香と共に精神統一を行っていた。

私は部屋を掃除したり、洗濯したり、ご飯を作ったり・・・

つまり、家事をやっているのだ。

『覇王と呼ばれた者が何をしているのかしらね・・・』

最初は文句を言っていたが、月も詠も、さらに澪香も時間を作って家事をするので、一応、私も従った。

『まあ、雇い主の言うことだし。・・・雇われてるなら給金出るわよね？』

そんな事を考えていたが、ある日、

タチバナ「今日の昼頃に使用人達がこちらに来ます。」

何てことを言っていた。

どうやら、劉宏達の件があったため、こちらに使用人達を置いておきたくなかったそうだ。

タチバナ「昼まで陳留に用事があります。使用人達が来るまでには帰りますが、あちらの方が早ければ華琳さん、対応お願いします。」

華琳「はっ？お願いじゃないでしょう・・・私の事はあちらには伝わっているの？」

タチバナ「歌さんには伝えてますが、他の人にはまだですね。大丈夫ですよ？歌さん、皆さんに伝えていると思いますから。」

・・・不安だ。何故かとても不安に駆られる。

だから、聞いてみた。

詠「歌さんがどんな人かって？ああ、そうね・・・百聞は一見に如かず、よ。」

・・・

月「歌さんですか？・・・私の口からは何も・・・」

・・・・・・

澪香「はっはっは！とても大きく、とても強いぞ！？見た目はすぐわかるぞ？」

・・・・・・・・・なんか、澪香の言動で人間ではなさそうなのはわかるわね。

私のことを、使用『人』達は知らないことを理解した。

タチバナより先に、使用人達はやってきた。
案の定、私のことを知る人は誰一人おらず、月や詠が説明してくれた。

・・・それくらいは手紙なり、伝達でやっておいてほしかったわ。

使用人達は、多分、いつもの事なのだろう、すぐ私を受け入れ自分達の仕事へ向かって行った。

歌さんとやらの姿が見えなかったので聞いてみた所、夏侯姉妹と一緒に遅れてくるそうだ。

・・・とうとう、春蘭と秋蘭に会う時が来た。
どのような顔で2人を見ればいいのだろう？
少なくとも彼女達は私の事は知らないのだ。
複雑な想いを抱きながら、歌さんと言う者と、夏侯姉妹の到着を待っていた。

昼を過ぎてもタチバナは帰ってこなかった。
帰って来なくても問題はない。
昼食は、澪香が炒飯（彼女、これだけは得意らしい）を作ってくれたのでいいのだが・・・
問題は、春蘭と秋蘭だ。
不安だから近くにいてほしいと言うわけではないが、やはり、私を雇っている立場にある訳だから、ちゃんと説明をしてほしい。
・・・それが理由なのだ。それ以外ないからねっ！！

タチバナが帰って来ないか、外で待っていると遠くから声が聞こえて来た。

声の聞こえる方を見ると、砂埃をあげて人が2人、白っぽい何かに追われているのが確認できた。

・・・こっちに突っ込んでくるっ！！

??「だから、さっきから謝っているだろ！？いい加減機嫌を直してくれっ！！」

??「姉者の言うとおりだ！！頼むから私も一緒に追っかけるのは止めてくれっ！！」

??「おい、秋蘭！！！！！死ぬときはいつも一緒と言ってくれてるではないか！！！！！」

??「それとこれとは話が別だ！！っ！！そこを退いてくれっ！！！！ぶつかる！！！！！！！」

えっ？止まらないの??

途中で止まるだろうと言う、甘い考えをしていたため、行動が完全に遅れた。

『・・・無理ね。もう、間に合わない・・・』

爆音がしました。

使用人達はみんな、外へ出てきました。

状況を確認し、

「「「またか・・・」」」

という顔をしていた。

『この世界』の春蘭と秋蘭は、爆音と共にやってきました。

トモダチと姉妹と華琳（後書き）

コルトです。

体調崩しました・・・。
風邪などが流行る時期になってきました。
皆さんもお気を付け下さいm（＿＿）m

春秋名乗ると華琳

・・・月に包帯を巻いてもらっている。

姉妹2人は詠に薬を塗ってもらっている。

先ほど、2人を追っかけていた白く普通の虎より二回りほど大きいトラ?は澪香とじゃれあっている。

『澪香、つぶされてるけど生きてるわよね・・・』

これは気にしない方がいいだろう。

ある程度、治療が完了すると青い髪の、秋蘭から話をしてきた。

秋蘭?「さっきはすまなかったな。ここに来る途中、姉者が歌・・・あの白いのの尻尾を踏んでな。怒って追っかけられたのだ。」

春蘭?「何度も謝ったのに、機嫌を直さない歌が悪い!!わたしは謝らんぞ!」

秋蘭?「そうは言うがな、姉者。少なくとも、彼女にぶつかったのは我らだ。謝るのが筋だ。」

華琳「いや、こっちに突っ込んでくるのがわかっていたのに、もたもたして避けれなかった私にも非があるわ。気にしないでちょうだ

い。」

春蘭？「ほら、秋蘭！わたし達が悪かったのではない！謝らなくていいではないか！」

秋蘭？「姉者・・・タチバナ様に言いつけるぞ？まあ、歌が報告するだろうが・・・。聞き分けのない姉で申し訳ない。姉に代わって改めて謝罪する。本当にすまなかった！」

その言葉を聞いて、春蘭？は顔を真っ青にしていた。

春蘭？「っうん！！すまなかったな！！申し訳ないっ！！！！」

顔を真っ青にしながら、態度を変え、きっちり謝ってきた。

秋蘭？「それでこそ姉者だ。・・・タチバナ様から聞いてはいるが自己紹介しよう。私の名は夏侯淵、字を妙才と言う。タチバナ様の部下だ。」

春蘭？「うん？秋蘭、コイツがそうなのか？ならば名乗ろう！わたしは姓は夏侯、名は惇、字は元譲だ！よろしくなっ！！」

・・・とっても複雑な気分ね！『あの』春蘭にコイツ呼ばわりとは！！

華琳「・・・私は曹操、孟徳。タチバナの補佐を任された者よ。」

私の言葉を聞くや否や、春蘭はどこから取り出したか？大剣を私に向かって振りかぶってきた。

いきなりのことだったが、何とかその一撃を避けた。

華琳「いきなり何をするのっ！！」

夏侯惇「うるさいっ！！わたしの恩人の名を語るだけでなく、その恩人と私の主たるタチバナ様と同じ字を使い、あまつさえ真名を呼んだのだ！！万死に値する、そこに直れ！！」

大剣を振り回すため、周りの人間は抑える事ができない。

何とか避け続けたが、角に追い詰められた。

夏侯惇「ここまでよく避けた！だが、これで終わりだ！！地獄で詫びろっ！！！！」

言葉も早々に、振りかぶっていた大剣を私目掛けて振り下ろす！

自分を守るものは何もない

澪香はつぶされていて動けない

秋蘭は姉の行動を止めようとするが、行動を制する頃には大剣は私に振り下ろされている

月と詠はその後に続く

・・・案外、死ぬって簡単よね

そんな世界を体験してきた

自分が死にそうになったこともある

死を命じたこともある

・・・もう少し意味のある死に様がよかったわね

自分の部下と同じ人間に殺されるとは思ってもなかった

夏侯惇の大剣は私を切り裂いたように思えた

しかし実際はそんなことはなかった。

なぜなら、夏侯惇の振り下ろされてた手に大剣がないこと、少ししか見えないがその大剣を弄びながらお茶を飲んでいる彼が見えたから。

タチバナ「全く、一体何をしているのですか？春ちゃんにはいつも言っているでしょう？この大剣はやたらめったに振り回す物でないと。」

皆、声のする方に顔を向ける。

タチバナ「さて、歌さん？何故こんなに早く着いてるのですか。もう少し遅くここに着くように言っていたはずですよね？」

歌と呼ばれていたトラ？は、部屋の隅でガタガタ体を丸くしていた。

タチバナ「それと、春ちゃん?暫く抜刀は厳禁だと言ってましたよね、私は。」

誰も一言も話さない。夏侯惇さえも。

突然現れたタチバナと、部屋に渦巻く圧倒的な覇気のために・・・

そんな中、私は冷静に自分が助かったことと一つ思っていることがあった。

華琳『劉宏の時よりはるかに強い覇気。面白いッ!!本当に楽しませてくれる・・・』

赤くなったり青くなったり、忙しい夏侯惇を私は見ていた。

春秋名乗ると華琳（後書き）

コルトです。

いつも本小説を読んでいただきありがとうございますm（＿＿）m

後一回、夏侯姉妹の話しして次のステップに進もうと思います。

春の想いと秋の願いに華琳

夏侯惇と歌と呼ばれた白いトラを置いて、私、夏侯淵、月達の５人は部屋を出ていた。

月「・・・本当に久しぶりですね。あれだけ怒ってる先生。」

詠「仕方ないわよ・・・春蘭、抜刀禁止はキツく言われてたんだし。まあ、その理由くらい聞いてもいいんじゃない？とは思うけどね。」

夏侯淵「先に言われている。タチバナ様の真名を呼ばれても無闇に怒るな、とな。歌は完全にとばっちりだな。」

澪香「雷光墜ちるだろうか？・・・正直、あれだけは受けたくない・・・」

４人が話していると先程の部屋の方面から、轟音が鳴った。

４人「「「「墜ちた・・・」」」」

皆、遠い目をしていたが、月、詠、澪香はそれぞれ移動していった。

夏侯淵「曹操、と言ったな。少しいいか？」

華琳「ええ、タチバナも暫くは相手にならなそうだし・・・」

夏侯淵「なら、こっちに来てくれ。廊下だと話しにくい。」

少し微笑むと、ついて来いと促した。

ここは多分、夏侯淵の部屋だろう。
部屋へ着くとお茶の用意をしていた。

『この辺はタチバナと一緒ね。』

そんなことを思っていると用意が出来たようだ。
お茶を飲むように勧めてきたので、飲んでいると話をしてきた。

夏侯淵「姉者の代わりにちゃんと謝ろう。謝って済む問題でもないが、私にはそれくらいしかできん。・・・曹操、殿、先程は申し訳ありませんでした！」

椅子から立ち、深く背中を曲げて謝ってくる。

華琳「あなたが謝らなくても大丈夫よ。確かに、後少しで洒落にな

らないことになってたけど、その辺りも含めてタチバナがちゃんと彼女に言うでしょう？彼女も気持ちはどうであれ、後で謝罪はしてくるだろうし。」

夏侯淵「そう言ってもらえると助かるが、姉者は暫く無理だな。雷が墜ちたのだ。夜まで動けんだろう。」

夏侯淵はそう言って椅子に座り自身もお茶を飲む。

夏侯淵「・・・そうだな。これができた。私の真名を預けよう。名は伝えているからな、真名を秋蘭と言う。よろしく頼む。」

華琳「いいの？これでまた、夏侯惇に追いかけ回されるのは勘弁してほしいわよ？」

秋蘭は声に出して笑っていた。

秋蘭「大丈夫だ。あなたは信頼できる人とタチバナ様から聞いていた。あの方が言うのだ。真名を預けるに足る人物なのはわかる。・・・姉者はタチバナ様の事になると本当に前が見えなくなる。その事、頭から飛び出ていたのだろう。」

華琳「そう、なら私もあなたに預けるわ。我が真名は華琳。改めてよろしくね、秋蘭。」

秋蘭「よろしく、『華琳』。」

・・・やはり複雑ね。
春蘭に『こいつ』呼ばわり、秋蘭からは『華琳』と呼び捨てにされる。
気にならないと言えば嘘になるが、呼び方が違うことはあまり問題ではない。

『私の知らない春蘭と秋蘭に逢った事』

とても新鮮な気持ちと、私と一番長くいた2人が私を知らない、つまり『この世界』には私を誰も知らない事が理解できたから・・・

秋蘭「どうした？お茶が口に合わなかったか？」

・・・考えすぎていたわね。
今は『ここ』にいる。
元の世界に帰れるかは些細なことだ。
ここで私が出来る事をやろう！

華琳「いえ、おいしいわよ。秋蘭もお茶が好きなのかしら？タチバナもよくお茶を飲んでいるけど。」

秋蘭「私は、タチバナ様に上手にお茶を淹れたねと言われるように努力しているだけだ。姉者とタチバナ様はお茶が好きだな。最近は減ったが2人で一緒に飲んでいたよ。」

華琳「夏侯惇はタチバナが好きみたいね。・・・秋蘭、あなたもそうみたいだけどね。」

秋蘭「ふっ。私はどうかな？父親や兄に認められたい一心なのかもしれないな。姉者は身も心も捧げているよ。・・・いつも、空振りしてるが、な。タチバナ様に明言出来てないし。」

華琳「差し障りがなければそこまでになった経緯や、タチバナがどんな人物が教えてくれない？」

秋蘭「少し長くなるぞ？」

華琳「その事も含めてこの部屋に呼んだのでしょう。今日の予定は朝の内に終わらせてあるから。」

秋蘭「流石だな。タチバナ様が言われたように、とても優秀なのだな。そうだな・・・どこから話そうか？」

そう言って、自分達がタチバナについていく理由や、タチバナの事、今まで話に出てくるがどういう人物が判らなかったタチバナの『妹』の事を教えてくれた。

夏侯姉妹は元々、捨て子だったらしい。

その辺りの経緯は知らないらしいが、自分達が人買いに連れられて

いる所を、タチバナとその妹『曹孟徳』に助けられたのだ。
最初は、親身になってくれる2人が信じられなくヒドい事も言っていたらしい。
だが、ある時森に行くと今より二周り小さい白いトラ、歌に食べられそうになったらしい。
歌との出会いはここだそうだ。
歌からの攻撃から2人を守ってくれたタチバナ、歌を殺すのでなく、制し、自分達と同じように助けた所に感銘を受けたのだ、と。
その後、春蘭はタチバナにベッタリで片時も離れなかったそうだ。
登場の仕方、圧倒的な武力、相手を思いやる心に春蘭は惚れ込んだのだろうと秋蘭は思っているそうだ。
秋蘭「その後は、大体わかると思うが、2人でタチバナ様の塾に通い文武を磨いたのさ。一応、今も塾生なのだぞ？あの方的には、知りたい事、やりたい事がこの塾にあればいつまでも塾生なのだそうだ。」
華琳「あの白いトラとあなた達は姉妹みたいなものなのね。トモダチと言ってたから若干違うのかしら？」
秋蘭「ああ、歌は私達と姉妹だよ。あの時の謝罪も既にしてあるし、私達の事をちゃんと理解してくれている。・・・たまに人の言葉を理解しているような行動をするしな。」
華琳「・・・トラにしては大きいわよね・・・。あなた達の事はわかったわ。タチバナやその妹『曹孟徳』について教えてちょうだい。」

秋蘭「タチバナ様、か。正直な所あまり知らないんだ。強い、賢い、優しいがわかりやすいんだか・・・」

華琳「その辺はわかるわ。『人の皮を被った何か』なのだから！優しいと言えば優しいのでしょうね。甘いともとれるけど。」

秋蘭「はは、手厳しいな。・・・そうだな、元は劉宏様の教育係だったらしいが辞めて、フラフラしてた所を、曹孟徳様のお祖父様に曹家へ招かれたと言われていたな。」

華琳「曹家出身ではないの？」

秋蘭「曹は名乗っていたがな。養子になったと言われていたが・・・よくわからん。曹孟徳様はずっとお兄様と呼んでいたから、それでいいんだろう。」

・・・一体いくつよ？あいつ。見た目は２０前後だけど、明らかに相当年上よね・・・

秋蘭「他は、名にある『光』は教育係の時に賜ったくらいか。『見えるようで見えない、見えないがそこにある』が由来だが、まあ、あれはそうなのだろう。いつか見ることがあるだろう？あれは凄いの一言だ。」

底は見せてくれないわね、あいつは。

秋蘭「後は、見たままだ。子供好き、教える事が好き、菜園と発明が趣味、曹家の仕事をほっぽってお茶を飲む。そんな方だ。」

華琳「・・・曹家の仕事はない、と言ってたけど？」

秋蘭「『今』はない。塾と合わせてすべての予定を後回しにしているからな。後、数日だがそれが過ぎれば、塾が再開される、名士が面会に来る、太守から仕事が回ってくる、商人や武芸者は自分を売り込みに来るな。・・・塾の人数は１０人規模じゃないぞ？ここじゃ回りきらないから外にも出るぞ。」

・・・平穏な日々はもうすぐ終わるのね。そうですか。

秋蘭「後は何だったか？・・・ああ、曹孟徳様の事だな。」

華琳「私と同じ名なのでしょう？長くなってもいいから教えて？」

秋蘭「・・・明るく元気な、太陽みたいな人だった。先代曹家当主。あの方がいれば、劉宏様を助け、漢王朝はかつての栄華を取り戻せる、と言われた程の人だ。」

華琳「タチバナに負けず劣らず凄い人だったのね。」

秋蘭「タチバナ様は元々あまり外に出ない人だったからな。実際の所、外の評価は低かった。立花先生と言われれば有名だがな。水鏡先生や廬植先生、他の名のある文学者は皆、立花から学んだ、と言われたほどだ。」

秋蘭「だから、今は弥光塾と呼んでいる。細々とやりたいらしいがもう無理だな。水鏡先生は教え方を学びにたまに来るぞ？」
華琳「水鏡先生の先生、か。交友が広いわ。あと、立花と書いてタチバナと詠むのね。」

秋蘭「それは違う。確かにそう言われればそうなのだが、違うんだ。タチバナ様はあくまで『タチバナ』様なのだ。私も最初はそうかと思ったが曹孟徳様から違うと言われた。」

秋蘭はあわてて話をそらす。

秋蘭「曹孟徳様の事だったよな？本当に凄い人だった。幼少から天才児、麒麟児ともてはやされた。しかし、それに慢心せず『治世の能臣、乱世の大徳』と言われたほどだ。」

どうやら、この世界の私は『劉備玄徳』の性質も兼ねた化け物だったみたいね。

秋蘭「しかし、天は多くを与えないみたいだな。幼少より頭痛があったらしく、それが原因で・・・ああ、もう5年になるのか、亡くなられた。慕う人は多かった。私もその一人だしな。」

華琳「そう・・・いろいろありがとう。辛い話も聞かせてくれて。あなたの信頼は必ず、応えるようにするわ。」

秋蘭「そう言ってもらえると助かる。さあ、そろそろ姉者が復活する頃だ。謝罪を受けに行こう？」

そう言って、楽しそうに私を連れて部屋を出て行く。

こんな立ち位置も楽しいのかも、ね。

そんな風に思った。

・・・春蘭からは、真名と、とても丁寧な謝罪がきた。

真っ黒になっている春蘭からだけど。

秋蘭は顔を隠しながら笑っていた。

私は複雑な顔をしていたでしょうね・・・

春の想いと秋の願いに華琳（後書き）

理由付けが甘いかな～とか思います。どんなでしょう？

コルトです。

２つのルートを考え中。
どちらも戦闘の話なのですが・・・

うまく書けるかな？

来訪者と華琳

夏侯姉妹と真名を交換した日から、すでに数ヶ月が経っていた。

・・・何？今までより早くないかって？

忙し過ぎるのよ！！

休みが終わった途端、塾生はどんどん来るし、曹家のタチバナに名士は謁見をお願いするし、商人や武芸者が自分を売りに来る、許昌太守と陳留太守からは賊討伐や政務の要請が来るし、秋蘭がいったように本当に忙しかった。

太守は、自分達の仕事でしょ！？自分でやれっ！！って言いたいわ・・・

タチバナは、来訪者の対応は春蘭と秋蘭に任せるし、塾生達は月や詠に何人かお願いするし、大概の事は人に任せていた。

お茶を飲んでばかりではないが、私が観てないとすぐサボる。
さっきも休憩とか言って2刻（1時間）ほど帰って来なかった。
屋敷を探し回れば、外にある自分の菜園場の草抜きをしていた・・・。

当主って自覚全くないわね。

暫くタチバナに付きっきりで仕事をしていた。
この数ヶ月休みがあったかしら？
自分が国を治める時も大変だったが、こんなに忙しかったか。

立場の違いはあるだろうが、大半の原因は人外認定したこの男だろう。

本っ当に仕事しないわね。

いい加減、文句の一つも言ってやろうかしら？

そんな事を思いながら、目の前に歌と一緒にスヤスヤ寝ているであろう（目を包帯巻いているため表情がわからない）タチバナに『絶』の頭をぶつけてやろうとしていた。
タチバナ「・・・春ちゃんが対応するには難儀な方が来ましたね。
久々に私が対応しましょう。」

そう言って唐突に目を覚まし、私を驚かした。
・・・本当に寝ていたか疑問ね。

タチバナ「華琳さん、一緒に来て下さい。お客様です。私が対応しないと拗ねちゃう人なんですよ。」

華琳「自ら対応するなんて珍しいわね。その意欲をいつも持ってほしいのだけれど？」

タチバナ「有象無象の対応は私にとって意味がありません。人と会う、対応するも勉強です。春ちゃんと秋ちゃんには必要なことです。ついでに言うと私が仕事すると増えちゃいますよ？仕事量。」

・・・大小様々な名のある人間が彼に面会を願ったが何れも断ってきた。
有象無象も言い切った彼が会おうとする人物は誰なのだろう？

後、ふざけたことを言うので軽く頭を叩いておいた。

表に近付くにつれ、何人かの大きな声が聞こえてくる。

春蘭だろう。どこか聞き覚えがある声もあるが・・・

表に出ると、春蘭が噛みつかんばかりに相手に迫っている。
秋蘭はそれを抑えている。

澪香も来ており、相手を抑えている。

・・・相手は『江東の虎』の将、黄蓋だった。

黄蓋「元醸！いい加減、あれを出せ！！あれが体調を崩して出れない訳がない！！どうせ、歌と一緒に寝てるのだろうが！！」

春蘭「タチバナ様を、『あれ』だとっ！？ふざけるなっ！！貴様なんかを我が主と会わせるものかっ！！」

月「へぅ～・・・どうしよう、詠ちゃん？先生呼びに行く？」

詠「どうしようって・・・あいつ呼ぶしか・・・あっ、タチバナっ！！」

その場にいた誰もが、此方へ振り向く。

黄蓋「ほら、やっぱりサボってたんではないか！！久しぶりだな・・・曹光、殿。元気そうだな。」

タチバナ「久しぶりです、黄蓋さん。あなたも元気みたいですね。・・・春ちゃん、ありがとうございます。後はお任せ下さい。さあ皆さん、持ち場に戻って下さい。」

春蘭の頭を撫でながら、皆に指示を出す。
春蘭は幸せそうな顔をし、秋蘭を始めいつもの仲間は羨ましそうに春蘭を見ていた。

黄蓋を自分の部屋へ招き、いつもののを用意していた。

黄蓋「無理を言った。すまぬな。じゃが、お前も悪いのだぞ？堅殿の使者を何度も門前払いしていたのじゃからな。」

タチバナ「堅さんのお願いはいつも無茶でしょう？それに私が聞かなくても自分でできるでしょう・・・しかし、今回あなたが来ると言うことはそれなりに切迫してるのですね。」

黄蓋「ああ、その通りだ、が・・・この少女は誰だ？まさか、お前の子供か！！」

・・・顔が近いわ。
凄い形相で私を見る。

タチバナ「私の補佐をお願いしている方ですよ？とても優秀なので助かってます。」
安心？したのか、私から顔を離す。

華琳「私は助かってないわ。あなたも優秀なのだから、仕事してちょうだい。・・・江東の将、黄蓋殿ですね。私は曹、孟徳。彼の犠牲者です。」

黄蓋「はっはっは！！曹孟徳、か！！面白いッ！その歳でこれの犠牲者か、大変だな！」

大声で笑い続ける。

タチバナ「ヒドいですね、2人とも・・・やる気が無くなりました。今から一月は何もしません。黄蓋さん、帰って下さい。」

珍しくタチバナはへこんでいるみたいね。

黄蓋「すまぬ、すまぬ！悪かったから機嫌を直してくれッ！！」

黄蓋の謝罪を聞き、一応、やる気を起こしたみたい。

黄蓋「なら彼女にも聞いてもらうぞ？・・・江湖の河賊、錦帆賊と内密に同盟を組みたい。そのためにタチバナ、おぬしに要請したい。理由はある程度、知っておろう？」

華琳「あなたが劉表の下に行った理由の一つ、部下である黄祖とその周囲の調査に関わるのよね？」

タチバナ「何も教えてないのによくお分かりで。その通りです。孫堅さんと劉表、仲は悪くないのですが部下達からとても評価が悪いのですね。」
華琳「もしもの時の保険ね。でも、なぜタチバナに？内密にでも、やり方はいろいろあるでしょうに。」
黄蓋「同盟を要請する錦帆賊の頭領である『鈴の甘寧』から言われたのじゃ。『俺よりスゲー男を連れてきたら同盟を考えるッ！！』とな。」
華琳「なるほど。それでタチバナなのね。甘寧が凄いと思うかは別だけど、その辺の男より遥かにすごいわね。」
黄蓋「その辺の男をどれだけ集めても、おぬしの影さえ踏めぬがな。」
華琳「評価が高いわね・・・普段の仕事ぶりを見たらそうは思わないけど。どお？受けたら？どうせ、ここいたって仕事しないし。」
タチバナ「孫堅さんのお願い聞いたら他の人のも聞かざるを得ないじゃないですか！仕事を増やしたくないです！なので嫌ですm（｜｜）m」
ゴツンッ！！
タチバナ「・・・イタイデス、カリンサン。」
華琳「・・・当たり前よ。私の日頃の恨みも兼ねてるのだから。」

タチバナ「・・・そうですか。」

黄蓋「の、のう？タチバナ。堅殿の力だけでは今回はどうにもならん。甘寧もかなりの男なんじゃ。おぬしだけが頼りじゃ！頼む！！」

黄蓋は深く頭を下げる。特に不利益が発生するとはいえ思えないし、孫堅に借りが作れるなら、これは受けるべきと私は考えるが。

タチバナ「・・・はあ、仕方ないですね。黄蓋さんがここまで来て、お願いするんですから。わかりました、引き受けます。」

黄蓋「！！ッありがとう！！さすが儂が認めた男じゃ！！・・・ついでにどうじゃ？嫁を貰う件、そろそろ考えぬか？」

タチバナ「それとこれとは話が違いますね。誰の件かは聞きませんが、今の私に、婚姻の話はいりません。」

黄蓋「そう、か。では、また日を改めよう。ちなみにいつ行ってくれる？出来るだけ早い方がいいのじゃが・・・」

タチバナ「ん～3日後ですね。数日分の仕事はしないといけませんし、華琳さんも用意ができないでしょう？」

華琳「・・・？？は？？私も行くの？」

タチバナ「当たり前です。あなたが後押ししたんですよ？責任とってください。それにさっき言ったでしょう？私が仕事すると仕事量

増えちゃいますよ？って。」

とっても理不尽な事言われてる気がするわ。
まあ、帰ってからが怖いけど、しばらくは太守からの雑務や、曹家の仕事から逃れる事は出来るわね。

それに『江東の虎』孫堅や、錦帆賊の『鈴の甘寧』などの英雄達に会える事は私にとって、大きな意味がある。

・・・あれ？そういえば甘寧って女だったわよね？孫権に付いていたはず。

そこは今考えることではないだろう。
とりあえず、ちゃんとタチバナが仕事するし3日ほどあれば今ある仕事は何とかなるだろう。

そう思っていた時期も私にもありました。

来訪者と華琳（後書き）

話を追うごとに字数が増えていってる気がします。

コルトです。

２つのルートを考えましたが、孫呉にしました。

もう１つは馬騰さんルートです。

タチバナさん、よくお茶を飲んでいますが、この時代に『お茶を飲む』という文化ないんですよね。

お茶は高価なもので、『薬』としての意味で使われていました。

タチバナさんが飲んでいるのは、独自で栽培しているハーブティーです。薬の意味は全くありません。

では、また。

虎と鈴と華琳

甘かった。

タチバナが仕事をすれば、私の仕事量は減るもの、そう思っていた。

タチバナ「華琳さん。目が真っ赤ですよ？ウサギさんみたいでかわいいですが。」

華琳「誰のおかげでこうなってると思う？後、キレイとか、かわいいを気軽に言わないでちょうだい。」

彼は『優秀』過ぎるため、誰もが頼るのだ。

私がやっても1日かかる太守に頼まれた仕事も一時（2時間）かからず終わらす。

処理速度に気付いた太守はこれでもかといわんばかりに案件を持ってくる。

来訪者も夏侯姉妹で1日4～6人くらい対応するが、彼が対応するとわかると、数えたくないほど来訪してくる。

塾の方は、月や詠にも教えながら多くの子ども達に勉強を教えてい

る。

タチバナって2人いるんじゃないの？と思わされる量の仕事をこなす。

その分の雑務が私に返ってくる。

タチバナがすべき仕事は減ったが、私がする仕事は、それを凌駕するほど増えた。

・・・おかげでこの3日は一刻（３０分）仮眠をとっただけ。

その前もあんまり寝れてないから、もう何日も不眠状態ね。

いつもの瞬間移動のおかげで移動中に寝ることもできない。

・・・眠い・・・

黄蓋「いつもながら速すぎるな。儂は目が廻っているぞ？」

タチバナ「黄蓋さん、先に帰らすよりこっちの方が速いですから。・・・この辺りですか？」

黄蓋「ああ、この辺りのはずじゃ。堅殿が待っている。」

半分、ウトウトしている私を連れて孫堅の所へ行った。

・・・私が『殺してしまった英雄、孫策』の親である、孫堅。

彼女も英雄と呼ぶに相応しい風格を持つ者だった。
江東の虎と呼ばれ恐れられ、劉表との争いの中、死んでいった英雄。

直接会ったことはない。

だからこそ嬉しい。

こういう所は、あの双子やタチバナに感謝したい。

しかし、同時に不安になった。

『ここの孫堅も私の世界と同じように劉表に敗れ死んでしまうのか？』と。

私は孫堅と自己紹介を交わし、タチバナは依頼の内容を聞いていた。

ちょうど今日が、甘寧と会う約束の日だったそうだ。

・・・偶然よね？

黄蓋は知らされていなかったみたいだが。

とりあえず、孫堅は着いて行けないらしい。
黄蓋も、だ。
顔が知られすぎているそうだ。

タチバナは『曹弥光』や『曹光』と言う名は通っているが『曹弥』
や、ついでに顔は知られていないらしい。

うまく情報統制がとれているものだ。
そのために、

では、誰が立ち会いに着いてくるのだろう？

??「はーっはっはっはっー！！俺が甘寧だッ！！おめーが孫堅のやつ
が言ったスゲー男なのかッ！？」

・・・暑苦しい・・・眠気も覚めるわ・・・

タチバナ「スゲーかどうかはわかりませんがね。孫堅さんに頼まれたのは確かです。こちらが私の補佐の曹操さん。で、こちらが・・・」

??「私は母、孫文台の代わりを仰せつかった。名を孫権、字を仲謀と言う。以後、お見知りおきを。」

そう。
孫堅の代わりに孫策が来るかと思ったのだが、その妹、孫権が来たのだ。

歳は今の私の容姿と同じくらいだろう。
まだ幼いというのが印象だ。

甘寧「自分の代わりに娘を寄越すとは・・・やはりあいつもスゲー女だなッ！！」

彼の言い方が気に入らないのか、腰に帯びている剣に手をのばしている。

それをタチバナが隠しながら、

タチバナ「それで私は何をすればいいのですか？見ただけでは判断

をつけないのでしょう？」

甘寧「はっーはっはっー！！さすがだ！！よくわかってんじゃねーかッ！！」

タチバナ、地味に自分の名前言ってないわね・・・いいのかしら？

甘寧「俺達、錦帆と縄張り争いしている所があるッ！！そこをぶっ潰してくれ！！それが条件だッ！！」

タチバナ「殲滅が希望なのですか？」

一瞬、凄い殺気があったわね・・・タチバナから？

甘寧「いや、不殺だッ！！出来んだろ！？あんたならッ！！」

タチバナ「はあ、わかりました。その場所に案内して下さい。ついでに戦っている間、2人の護衛はよろしくお願いしますよ？」

甘寧「まかせろッ！！」

えっ？タチバナ、あなた1人で戦うの？敵の数とか全然聞いてないわよ・・・

？？

・・・まだ救出はない、か。

これで何日くらい経っただろうか。

それなりに訓練されている私だが、そろそろ限界が来そうだ。

あいつらは私を人質にすれば、彼らも動けないと思っているのだろう。

・・・悔しいな。

私にもう少し力があれば、と思う。

そんなことを考えていると、外から轟音が聞こえた。

華琳

・・・少し離れた所から彼を行動を見ているが、あれは何だろうか？

青い光が点々と天に昇って行くかと思えば、そこから真っ直ぐに光が江賊の船へと落ちる。

敵の船は６隻、４００人くらいの人数を有しているみたいだ。

船は既に2隻、今の方法で沈没している。
これも合わせて3隻、か。

バシャバシャしている人がかなりの数見えるから誰も今の段階で死んではいないわね。

『あれ』は本当に『何なの』でしょうね。

孫権もそうだが、甘寧もその部下も皆、ポカーンとしている。

頭痛いわ。いや、持病のじゃなくて。
彼が1人いたら、戦術も戦略もあったもんじゃないわ。
・・・あんなの2人もいらないけど。

華琳「・・・それより甘寧。聞きたい事があるのだけれど？」

甘寧「・・・っあ？何だ？」

華琳「人質がいるわね？あちらに。」

甘寧「ッ！！なぜそれを！？」

華琳「今までの情報を統合しただけよ？数日前から錦帆の動きが鈍くなった事、突然だったみたいね、自分より凄い男をって言い出したの。」

甘寧「それだけの情報じゃ、甘くないかいッ！？」

華琳「決定的なのはあなた、よ。無理してるでしょ？その暑苦しい喋り方。おそらく、人質になっているのが、本物の甘寧、ね。」

甘寧？「ッはは！！すげーじゃねーか。たったそれだけでそこまでの推理になるのかッ！！そうだ！！あの船には人質がいる！！・・・・曹弥様はわかっててやってんだろうが・・・」

華琳「あら？タチバナは自己紹介したかしら？しかも、曹光ではなく曹弥って・・・あなたは何者？」

甘寧？「『今』は俺が甘寧だ！！あっちにいるのは『次』に甘寧を名乗る者がいるッ！！俺の正体は、曹弥様が帰ってからだッ！！」

話が終わる頃には最後の船が沈没していく光景が見て取れた。

最初に彼が乗って行った船がゆっくりこちらにやってくる。

隣にはよく見えないが、少女だろう、一緒に乗っている。

彼女が私の知る『本物』の甘寧なのか？

甘寧と名乗っていた男は何者なのか？

タチバナが帰ってくれば色々わかるだろう。

そんな事を思っていた。

虎と鈴と華琳（後書き）

孫権さん、空気ですね・・・次はちゃんと出番ありますよ？

コルトです。

空中ジャンプから急落下。
これがやりたかっただけ。

あっ、石投げないで・・・

・・・今回のは、今まで以上に甘い気がします。
昔の船はどれくらい人が乗ったのでしょう？
大体、５０～６０人くらいかな～？とか勝手に想像。

ちょっと無理があるんじゃない？とか、それはいかんでしょう？とかあったら言って下さい。

直します。

ついでに、この間、質問がありましたが、これが答えです。
次で詳細が出ますが、ご納得されましたでしょうか？

それではまた次回。

名の継承と仕える主君と華琳

タチバナと少女は帰ってきた。

私達は甘寧に連れられ、彼らの隠れ里に入っていった。
彼の家に着くと、すぐさま、タチバナの前に拝礼をした。

甘寧？「偽りの依頼失礼しました！！俺は現在『甘寧』を名乗っていますが、本名は太史慈、字を子義と申す者！！あなたの御高名は聞き及んでいますッ！！」

太史慈・・・聞いたことはあるけど、あまり覚えのない名ね。

太史慈「こちらは、間もなく『甘寧』を襲名する甘興覇です！！彼女を助けて戴き本当に感謝しています！！」

タチバナ「予想通りでしたから。華琳さんから聞いていると思いますが、私もあなたの行動に違和感を感じていましたから。それで充分です。彼女が助かってよかった。」

甘興覇「私からも礼を言います。ありがとう。・・・だが、もう少し助け方を考えてくれないか？下手したら私ごと沈没していたのだぞ？」

タチバナ「それは大丈夫です。『氣』を使ってあなたの居場所はわかっていましたから。それに、あちらさんを混乱させ、戦う意志を

持たせないことが必要だったので。」

孫権「・・・あなた『人』よね？人の皮を被った何かではないかしら？」

タチバナ「孫権さん、誰かみたいな事言わないで下さい。私はにんげ『の皮を被った何か、よ！！』・・・カリンサン、ワタシノコトキライデスカ？」

華琳「さあ？どうかしら？少なくとも、今ここにいる人は、あんな事はできないでしょ。」

ニヤリと笑いながら言った。

華琳「それで、どうするの？依頼内容は少し変わったとは、当初の予定は錦帆賊との同盟だったのだけれどね。」

太史慈「それについては問題ないッ！！最初から孫家と同盟は組むつもりだった！！先代は劉表につくように話を進めていたが、黄祖に誑かされてる風に見えていた！！俺は劉表より孫堅、いや、孫家に光が見えるように思っているッ！！」

華琳「・・・暑苦しいから普通に喋ってくれないかしら？孫権も耳が痛そうよ？」

太史慈「あーそうか？気に入っていたが・・・まあいい。いずれにしろ、俺が決める事ではないんだ。次期『鈴の甘寧』、興覇が決める事だ。」

興覇「ちょっと待て！！私が！？お前が決める事だろう！？」

太史慈「俺は仕える主君にようやく会えた。ずっと前から決めていたことだ！次に会った時『甘寧』は興覇に譲り、その人の下に行く、と。これは、先代も今の仲間も知っている事だ。・・・言わない方が面白そうだからお前には言ってなかった！」

興覇と太史慈はじゃれ合っている。

・・・剣が舞っているけど。

うまく避けるわね・・・広い部屋でよかったわ。

タチバナ「孫権さん、あなたはどうですか。彼女と同盟を組みますか？」

孫権「えっ？私、ですか？母様や姉様ではなくて。」

タチバナ「そうです。あなたです。孫堅さんや孫策さんの代わりとは言え、孫家の代表としてあなたはここにいます。とても重いですし、難しいと思います。ですが、あなたが『ここ』にいる意味を考えて下さい。」

孫権「私が？決める？」

突然の事で混乱しているようだ。

当たり前だ。
私でも孫権の年代の時に、あのような事を唐突に言われればそうなる。

太史慈も興覇も動きを止め、孫権の様子を静かに見守っていた。

長い沈黙の後、彼女は口を開いた。

孫権「正直、私には返答しかねます。孫家の命運を握るかもしれない問題です。私は母様や姉様のようにできません！」

とても重いが、自分で判断をつけることが出来ない悔しい気持ちも感じ取れた。

タチバナ「・・・同盟と言う言葉が拙かったですね。私は単に彼女、『興覇』と同盟を結びますか？と聞いているのです。別に錦帆賊と孫家で同盟を組むかと聞いてはいないですよ。その辺の事は、孫堅さんや孫策さん、太史慈さんに任せなさい。」

孫権は、はっとしていた。

タチバナ「仲間として友として彼女と道を歩きたくはないですか？」

孫権「・・・私は孫仲謀。孫家の次代を担う者だ。今の私には何もない。だが！甘興覇！！私についてきてくれないか！？私はあなたと共に歩みたい！！」

赤壁で相対した彼女だ。

孫堅や孫策になろうと必死になっていた彼女ではない。

その姿は『孫権仲謀』その人だった。

甘興覇は彼女の前に歩み寄り、その前で礼をしている。

興覇「我が名は、甘興覇！真名を思春と言う！・・・今の私も何もない。これからあなたと共に作っていきたい。」

孫権「ありがとう・・・私の真名は、蓮華。これからよろしく、思春。」

興覇「よろしくお願いします、蓮華様。」

タチバナは嬉しそうに微笑んでいた。

私の世界でもこんなやり取りがあったのかしら？

少し感慨に浸っていた。

2人はそれぞれ、タチバナと私にも真名を預けていった。

太史慈は終始静かにしていたが、真名の交換が終わった頃を見計らい口を開いた。

太史慈「話は終わりましたね。それでは、改めて曹弥様！俺をあなたの部下にして戴きたい！！興覇が自分の道を見つけた以上、俺は不要ッ！！なら、俺は俺の道を進みたい！！あなたこそ、俺が待ち続けた主君です！！どうかッ！！」

タチバナ「・・・私は部下を持てるほどの権力も資金もありません。ですので『今』はいりません。」

その言葉を聞いて太史慈は落胆する。

・・・そりゃそうよね。

自分が主君と仰ぐものにいらないとか言われるのですから。

華琳「もう少し言い方があるでしょうに・・・太史慈？彼は『今』は必要ないと言ったわ。もう数年すれば、領主として土地を治める予定よ？それまで待ってちょうだい。」

タチバナ「流石は華琳さんです。私の言いたいことをちゃんと言ってく『ゴツンッ！！』・・・太史慈さん、いいですか？それまでは、興覇・・・思春さんを補佐して孫家を助けてあげて下さい。これから何があるかわかりません。孫家の当主、孫堅さんを守って下さい。」

たんこぶを作りながら、自分の言いたいことを言っていく。

・・・少しは真面目にやりなさい！

太史慈「はっ！！主命、必ずや成し遂げます！！ならまずは、興覇ッ！！お前を一人前に育てあげてやるッ！！低俗なやつらに捕まりやがって！！これは成し遂げるつもりだったが、さらに厳しくやってやるから覚悟しておけッ！！」

思春「ああっ！よろしく頼む！・・・それでは、蓮華様、タチバナ様、華琳殿、また。」

蓮華「ええ、思春！またね！」

思春は堅かったが、蓮華は年相応の別れ方をしていた。

こうして、孫堅の依頼は無事完了した・・・

黄蓋「なあタチバナ。内密に、と言ったはずだが・・・噂がたって

いるぞ？６つの光が江湖を照らした、と」

華琳・蓮華「「あっ・・・」」

タチバナ「大丈夫ですよ。江賊の一団がなくなっただけですから。」

孫堅「あんなのありえないでしょ・・・。あなた何したのよ？」

タチバナは２人からお説教をくらっていました。

孫家の依頼終了

名の継承と仕える主君と華琳（後書き）

ちょっと急な感じがしますが、孫家の依頼は終了です。

コルトです。

オリキャラ作る気なかったんですがね、自分のやりたい事のために必要になりました。

孫堅と太史慈は今後も出てくる予定です。

ですが、あんま多くは出しません。
頭の片隅にでも置いといて下さい。

次は、塾での1日をお送りします。

恋姫達が多数出演予定です。

・・・捌ききれるか？

それではまた。

帰っても忙しい華琳（前書き）

ちょっと文面が増えたので2回に分けました。

なので、言い訳（後書き）はまた次回。

帰っても忙しい華琳

孫家の依頼を終え、私達は弥光塾へと帰ってきた。

・・・大概、こっちに訪問者も来るし、何より塾の先生なのだからこっちの屋敷に居た方が効率がいいのよね？

未だに曹家の屋敷に行ったことがないのだけれど。

まあいいわ。

ここに帰ってくるのも大変だったし。

蓮華がタチバナから離れようとしないし、孫堅や黄蓋も何とか彼を孫家に留めようと様々な注文やお願いをしていた。

それを押しのけ、何とか帰ってこれた・・・

・・・疲れたわ・・・

あの中に、孫策や周瑜がいなくてよかったわ・・・

彼女らがいたらもっと大変な事になっていた気がする。

そんな事を考えていると、月と詠が出迎えてくれた。

月「おかえりなさい、先生。大変でしたね。」

詠「ふんっ！遅いわよ！あんたならもっと早く片付けられるでしょうに。」

月「詠ちゃん！！」

詠「わ、わかってるよ・・・おかえりなさい、先生・・・」

詠は恥ずかしそうに、月は満足そうに笑っていた。

タチバナ「ただいま帰りました。留守番ありがとうございます。・・・留守中何かありましたか？」

２人の頭を撫でながら聞いている。

詠「えっ！？あっああ、え～と、袁紹達が来ているわよ？洛陽の屋敷に行ったけどいなかったからこっちに来たんですって。」

あーそうか、彼女も何年か洛陽にいたわね。

時期としてはこのころか。

・・・あの五月蝿い高笑いを聞かなくちゃならないのね。

タチバナ「袁紹さんですか。教えを請いに来た感じではないですね。」

月「一緒にお茶を飲みながら話をしたいんですよ。あと、真名か呼び捨てで呼んであげないと拗ねちゃいますよ？」

苦笑いしながら言葉を綴る。

まあ、そんな所でしょうね。
ここの袁紹・・・麗羽がどんな人物かわからないが基本はかわらないだろう、麗羽だし。

とりあえず、袁紹の所へ行くことになった。

袁紹「お久しぶりです、曹光様。お元気そうで何よりですわ。」

タチバナ「袁紹さんも元気そうですね。今日はどうされました？教えを請いに・・・と言うわけではなさそうですが？」

袁紹「曹光様、呼び捨てで構いませんわ。そ、それか、ま、真名でお呼び下さい。」

・・・誰よ？あれ。
あれが、袁紹・・・麗羽だと言うの？
横に月がいるから聞いてみた所、タチバナの前ではいつもこんな感じらしい。
他の所では私の知ってる袁紹ね。

・・・べた惚れじゃない！？べた惚れじゃない！！

この男は好かれているわね。
確かに不思議な魅力があるけど、それにしても予想以上の好かれ方ね。

タチバナ「そうですか。では袁紹、お茶飲みますか？最近、改良した茶葉があるんですよ。」
袁紹「まあ、嬉しい！ありがとうございます。戴きますわ。曹光様、顔良さんと文醜さんもお呼びしても宜しいですか？」
タチバナ「構いませんよ？華琳さんもどうですか、一緒に飲みませんか？」
華琳「えっ？ええ、それじゃあ戴こうかしら？・・・月も逝きましょう？」

月「あ、あの華琳さん・・・字が違ってる気がするのですけど・・・」

華琳「気のせいよ。」

こうして、奇妙な袁紹とのお茶会が始まった。

賈駆（詠）

澪香「・・・よかったのか？お前もタチバナ様の近くに居たかったのではないか？」

詠「五月蝿いわねッ！！月も近くに居たいって言うし、華琳はタチバナの側から基本的に離れないし、あんまり人が多いのも迷惑でしょ！？澪香だってそうじゃない！月の護衛として近くにいなくていいの？」

澪香「タチバナ様がいるのに護衛は必要か？私の出番はないだろう。」

詠「そのタチバナが危ないかもよ？」

澪香「ありえない話をするな。皆がどれだけ、振り向かせようと努力していると思う？夏候姉妹の敗北回数だって知っているだろうが。あれは泣ける・・・なんだこれ？」

澪香が立ち止まり何かを見ている。
ボクが何かを聞こうとする前に澪香が喋った。

澪香「なあ、詠？これはネコか？人間か？」

子猫の首筋を掴む要領でそれをボクの前に突き出す。

詠「どう見ても人間でしょうがッ！！どこ見たらネコになるのよ！？」

澪香「この辺だ！」

詠「・・・被り物だけ見れば、ね。ちゃんと持ってあげなさい！ネコにしろ、人にしろ可哀想よ？」

ネコの被り物した少女を背中に預け、どうするか聞いてきた。

詠「どうするかって、そりゃ、あいつに聞くしかないでしょ？あいつに会いに来たんだろうし・・・大方、春蘭か歌に追われてここに逃げ込んだんでしょ。」

澪香「そうか。ならとっとと行くぞ？」

詠「あっと、ちょっと待ってよ！！」

ネコ耳少女を背負ってさっさと歩いていく澪香をボクは追いかけていた。

曹操（華琳）

・・・袁家の威光とか名族という言葉を使わない、権力を誇示しない、私の知っている袁紹とは全く違う存在だと感じた。

この袁紹なら少なくとも人は集まる。

反董卓連合の呼び掛けをする袁紹。

彼女はそれをするだろうか？

今の段階ではわからない。

だが、私の知る歴史とは違う道を進んでいる。

『この世界の曹孟徳、タチバナ』

今までの行動、言動から少なからずこの後に起こる戦乱、人の死を知っている。

彼は私と同じくどこか『未来』から来たのではないか？

年齢も出自も不明。劉宏から先王の代から宮廷にいたことはわかっている。

それより前だ。

生まれは？幼少期はどこにいた？その知、武はどうやって手に入れた？

・・・恐怖を感じた。

顔が暗くなっていたのだろう。

月「華琳さん、大丈夫ですか？体調が悪いですか？」

華琳「・・・大丈夫よ。ありがとう、月。気にしないで。」

ダメね・・・顔に出るようじゃ。

『覇王』曹孟徳はどこに行ったのかしら？

袁紹「・・・だったそうですの。どうお思いですか、曹光様？」

タチバナ「そうですね・・・誰か来ましたね。顔良さん、すみませんが其方の扉を開けてくれませんか？」

タチバナは私の様子に気付いているみたいね。
皆を他に意識を向けさせる。

タチバナ「すみません。気付かずに・・・今日は休みますか？」

華琳「大丈夫よ。明日は1日休ませてもらうから。お客でしょ？対応しましょう。」

タチバナ「わかりました、が、無理はしないで下さいね。華琳さんに倒れられたら、私は悲しいですから。・・・おや？華雄さん、どうかなさいました？」

私の言葉を聞いて、少し考える素振りを見せたが扉から現れた澪香を見てすぐに表情を変えた。

澪香「接客中に申し訳ありません。鍛錬を行おうと武道場へ行く途中、この子を見つけまして・・・」

タチバナ「ネコさん・・・ではないですね。あちらの寝台に寝かせましょう。く～ちゃん、手伝ってあげて下さい。」

詠は何時ものように『く～ちゃん』に反応し、何やら騒いでいるが、渋々澪香を手伝っていた。

タチバナ「すみません、袁紹さん。少し飛び込みの用事が出来ました。埋め合わせはしますので、今日の所はお引き取りを・・・」

袁紹「仕方ありませんわ。曹光様がそう言われるのでしたら・・・。必ずや、埋め合わせしてくださいまし！顔良さん、文醜さん、帰りますわよ。」

顔、文「「はい！！わかりました。」」

袁紹「それではまた後日。失礼しますわ。」

文醜「曹光の兄貴、またな！！次は稽古つけてくれよ！？」

顔良「ちょっと文ちゃん！！申し訳ありません、曹光様！！それでは失礼します！」

月が案内していった。

タチバナ「さて・・・多分、緊張していた所で歌さんに追われたのでしょう。極度に疲労して眠ってしまったという所ですか。これならすぐ起きるでしょう。」

華琳「氣でそんな事もわかるのかしら？」

タチバナ「そうですね、大体は。後は直感ですか。・・・寝起きにいいお茶を用意してきます。皆さん、こちらで待ってて下さい。」

そう言ってタチバナは退出していった。

・・・この子、桂花よね？

『王佐の才』荀文若。

私を慕い、黄巾の乱から赤壁、様々な戦に軍師として仕えた、私の可愛い部下。

夏候姉妹とは、また違った気持ちになるわね。

・・・ここの桂花はどんな子かしら？

このような出会いが楽しみになっている私がいた。

夏候淵（秋蘭）

秋蘭「姉者、歌が何かを追っかけていたが何があった？」

春蘭「歌が？わからん。誰か表にいたみたいだが、出てきたら居なかったのでな。」

では、歌はその来訪者を追っかけたのか・・・そんな事はしないはずだが、珍しいな。

秋蘭「今日は、タチバナ様が対応する来訪者が多いな。孫家の依頼を終えて帰ったばかりなのに・・・」

春蘭「タチバナ様は超人だ！！わたし達に出来ない事を平気でやれるお方だ！！」

秋蘭「それについていっている、華琳も凄いと思うぞ？私には出来そうにない。」

春蘭「わたしもそう思う！まだ、日は浅いが充分信頼の置けるやつだ。・・・あの方みたいだな。」

秋蘭「姉者・・・彼女に悪いぞ？あの方と華琳は違う。」

春蘭「それはわかっている！ちょっと思っただけ「「「失礼しますッ！！」」」け？誰だ？」

秋蘭「３人か、私が対応しよう。・・・お客人、こちらは弥光塾、曹家当主、曹弥光様の屋敷だ。何用で来られた？」

??「はいっ！！私達は・・・」

増える受講者と華琳

??（ネコ耳少女）

突然の事だった。

『トラ』よりは『熊』と言った方がいい生物に追っかけ回された。

せっかく、各地の塾で噂になり、『立花塾』を継ぐと言われる『弥光塾』に着いたのに・・・

私何か悪い事した？

何とか撒く事が出来たが疲れたから寝てしまったようだ。

目が覚めたら寝台に寝かされてるし、何人かと目が合った。

・・・誰よ？ここどこよ？

??「弥光先生はあなた？・・・こんなちびっ子ではないわよね。弥光先生はどこよ？あんた達に用はないわ。」

曹操（華琳）

春蘭の気持ちがよくわかる！

起きたかと思えば開口一番、

ネコ耳「弥光先生はあなた？・・・こんなちびっ子ではないわよね。弥光先生はどこよ？あんた達に用はないわ。」

とか言われれば誰だって怒るわ。
文句を言おうと口を開こうとしたが先に言われた。

詠「起きたと思えば開口一番それ！？ふざけんじゃないわよ！！あんたこそ誰よ！！来客の報もないんだから、普通なら不法侵入よ！！不・法・侵・入！！！！わかる！！？？」

ネコ耳「煩いわね。来訪の礼をとってたら熊みたいなのに追っかけ回されたんだから仕方ないでしょ？それとも何？あれが、かの有名な曹弥光の来客者への対応なのかしら？」

2人は睨み合って、今にも殴り合いの喧嘩をしそうな勢いだ。

・・・何かお陰で少し冷静になれたわ。

澪香は『ネコじゃなかったのか・・・』とか訳の分からない事を言っていた。

どうしようかしら？この状況。

タチバナ「予想通り、喧嘩してますね。・・・お加減は如何ですか？ネコ耳のお嬢様。」

詠「あっタチバナ！！こいつが悪いのよ？起きた瞬間、メチャクチャ言うんだもの！！」

ネコ耳「メチャクチャってあんたね！！・・・もういいわ。あんたが介抱してくれたの？男にしちゃ珍しく気遣いが出来るわね。」

頭から湯気を出して怒り狂う詠を澪香が抑えていた。

・・・頑張って！澪香！

タチバナ「く～ちゃん、あんまり怒ると可愛い顔が台無しです・・・さあ、こちらへ。寝起きに合う飲み物を用意しました。」

・・・詠は変わらずギャーギャー言ってるがほっておこう。

ネコ耳少女、桂花は彼の基本行動に従っていた。

ネコ耳「あっ何か変わった味がする。でも美味しい。」

タチバナ「ありがとうございます。私が個人的に栽培している葉を加工して作ったお茶です。万人の口に合うように日々研究していま

す。」

ネコ耳「ホントに変わった男ね。今まで会ったどんな男より珍しいわ・・・一応礼を言うわ、ありがとう。私は荀文若。弥光先生を訪ねて、屋敷の前で熊みたいな生物に追っかけられたの。」

華琳「歌ね。何をしているのかしら？」

タチバナ「多分、そのネコ耳が気に入ったんでしょう。後で謝らせますので、あんまり怒らないで下さいね。」

文若「あんたがそう言うなら許してもいいわ。で、弥光先生はどこにいるの？案内をお願いしたいのだけど・・・」

あ～弥光ってけっこう年上なのよね。

こいつ見てるとあんまり実感ないけれど。

詠「あんたの目の前よッ！！さっきからあんたが不敬な態度とってる彼が『弥光先生』その人よ！！」

文若「はっ！？な、訳ないじゃない？あの『治世の能臣』の兄よ？こんなに若い訳ないじゃない！」

華琳「威厳ないわね、タチバナ。やっぱり世間に顔出して、自分を知らせないとね。」

タチバナ「面倒事はキライですから。知る人ぞ知る！でいいんです・・・ちゃんと挨拶するべきですね。私はタチバナ。曹家当主だ『現

当主！！『い・・・曹家現当主、曹弥光、孟徳。あなたが探している人『人なの？』です・・・」

ネコ耳少女、荀文若は口をパクパクさせてるわね。
詠は勝ち誇った顔してるわね。

タチバナ「華琳さん、ヒドいですよ。ちゃんと名乗ろうとしてるのに・・・」

華琳「ちゃんと？代行とか人とかおかしいとこだ『えーーーーッ！！！！！！あんたが！！！！！』耳が・・・」

五月蝿いわよ、ネコ耳。
タチバナ以外、みんな耳塞いでいるわよ。

文若「えっ？えっ？嘘・・・冗談よね？どう見ても私と１０も違わないわよね？本当に？ホントにそうなの？」

もう大混乱ね。
まあ、気持ちはわからないでもないわ。

始めに今の情報でくれば普通そうなる。
今までの来客者、大体こんな感じで彼を見てたし。
最終的に信じてもらえない事も多数あったし。

澪香「嘘も何も、冗談を言う時でも、嘘をつく理由もなかろうに・・・信じられんか？」

文若「・・・確かにそうだけど、信じるのは・・・荀家の情報と違うじゃない！どういう事？これは大問題よッ！！」

自問自答し始めた。

そんな中、秋蘭がやってきた。

秋蘭「失礼します。大きな声が聞こえましたが大丈夫ですか？」

タチバナ「大丈夫ですよ、来客ですか？」

秋蘭「はい、タチバナ様に会って頂きたく参りました。」

秋蘭がわざわざ呼びに来ると言うことは有望な来客か、かなりの地位にいる者のどちらかか。

今回は前者ね。

誰が来たのだろう？

タチバナ「では行きましょうか？秋ちゃん、案内を。華琳さんはついて来て下さいね・・・文若さん。あなたも一緒にどうぞ？せっかくなので屋敷を案内しますよ？」

文若「・・・はっ！？えっ？ええ、せっかくだしお願いするわ。」

詠「まだ、不敬を働くかーーー！！許さないわよッ！！澪香！！放しなさい！！」

澪香「今のお前を放せると思うか？あと、真名を呼ぶな！知らぬ者の前で呼ぶなといつも言ってるだろう！」

詠と澪香のやりとりを見ながら私達は秋蘭のあとについていく。

武道場？客室じゃなくて？

中に入ると3人の少女が座っていた。

華琳『凪、沙和、真桜・・・』

私の可愛い部下、警備隊三羽烏。

まさか、こんなに早く3人に会うなんて・・・

タチバナ「お待たせしました。私がこの弥光塾の主、曹弥光、孟徳です。真名で呼んでもいいのですが・・・後ろの人達が睨んでます

から。」

??「うちは李典。えらい軽いにーちゃんやな～。年取ったおっちゃんかと思うとったんに。」

??「沙和は于禁なの～。結構格好いいお兄さんでビックリなの～。」

??「こらッ！！2人とも、無礼が過ぎるぞ！！申し訳ありません、曹光様！！」

タチバナ「構いませんよ？文若さんもそうですが素直な方達ですね。真面目なあなたのお名前は？」

??「はっ！姓は楽、名は進、字を文謙と言います！今日は、高名な曹弥光様にお願いがあり、私達3人参りました。」

タチバナ「いいですよ。受けましょう。」

楽進「はい！！では・・・って、え？」

華琳「内容くらい聞いてあげなさいよ。困惑してるじゃない。」

タチバナ「数ヶ月、ここで学びたいんですよね？構いません。学びたい事を教えます。文若さんは文を学ぶのですよね？」

文若「勝手に決めないでッ！！『勉強しないんですか？』・・・そうよ。そのために荀家に無理言ってきたんだから！」

タチバナ「なら、いいじゃないですか？月さん、く～ちゃん！部屋

を与えますので彼女達に場所とか聞いて下さいね。」

李典「いや～話のわかる人でよかった～。」

于禁「ホントなの～。ダメって言われたらどうしようかと思ったの～。」

ある2人はぴょんぴょん飛び跳ねて嬉しそうだ。
もう片方の2人はあっという間に進む話に困惑状態だ。

詠はとても嫌そうだったが月に諭され渋々4人を連れて武道場を後にした。

秋蘭「よろしいのですか？あの3人はまだしも、あの文若という少女は癖が強いですよ。」

華琳「そうね。極端に男嫌いみたいだし、女でもすぐケンカになるわよ？詠みたいに。」

タチバナ「私が4人共直接教えます。楽進さんは武術、李典さんは工学、文若さんは政治学全般、于禁さんは・・・武術と一般学ですかね。」

華琳「余計ケンカになりそうだけれど。まあ、あなたなりに考えがあるのでしょうけど・・・でもあなたがやらないといけない仕事量は減らさないわよ？」

タチバナ「程々にお願いします。・・・もう夕暮れですね。今日は

秋ちゃんが料理当番ですね。後で手伝いますので用意していて下さい。」

秋蘭「ありがとうございます。タチバナ様に作って戴けると姉者も塾生も喜びます。」

そう言って自分自身も嬉しいのだろう、軽い足取りで厨房へと向かっていった。

私も自分の部屋に帰ろうとした時、彼に呼び止められた。

タチバナ「華琳さん。」

華琳「何かしら？明日からの予定を組んで今日はもう休むわよ？」

タチバナ「それは構いませんよ。明日はお休みですね。ゆっくり休んで下さい。」

華琳「そうさせてもらうわよ。で？何か言いたいことがあるの？」

タチバナ「・・・官僚の腐敗、重税と飢餓、賊の台頭、後数年でこの国は大乱になります。」

華琳「そのための『この塾』でしょ？許昌の領主になった時何人かは仕官してほしいわね。」

タチバナ「華琳さんはついて来てくれますか？」

華琳「・・・もう少し仕事をしてほしいわね。倒れたらついて行き

ようがないわよ？」

タチバナ「そうですね。華琳さん、優しいですから甘えたくなるんですよ？もう少ししたら頑張りますから。」

その言葉以降、私に背を向けて黙っていた。

華琳「もういいかしら？もう少しじゃなくて明日から頑張ってほしいわね。夕食楽しみにしているから。」

・・・結局、何が聞きたかったのかしら？

何を考えているか基本わからないが、何か、意図があって聞いてきたのだろう。

私の行動は変わらない。

彼についていくのが最善で、一番楽しめそうだ。

・・・随分彼を信頼するようになったなと思った。

今日の夕食は『おむらいす』と言うものだった。

・・・相当な量を作らないといけないのに、あの短時間でよく作るわ。

三羽烏は初めて見る料理に興奮していた。

桂花は最初、色々やってたが満を期して食べると、幸せそうな顔をしていた。

今日も疲れたわね。

予定の編成と日記書いて寝よう。

増える受講者と華琳（後書き）

コルトです。

文章分けたんですがあんまり意味がなかった気がします。

華琳さん視点で基本進める本小説ですが、『人が増えると無理！！』なのがわかりました。

うん。

収集つかないや。

もう大変。

ちょっと文の構成とか考える時期ですね。

今回で魏勢が多く出ました。

蜀や呉の面々も出したいですが、

ワタシノブンサイジャムリアルヨ？

個人的に出したい人居ますがいつ出せるやら・・・

感想、要望あったら言って下さい。
『できるだけ』答えますm（＿＿）m

お休み華琳さん

今日は久しぶりの休みだ！

普段、タチバナについてばかりだが、今日は違うッ！！

何かとてつもない開放感が・・・

あれ？私、この世界来て以来、休みをとった覚えあったかしら？

まあ、いいわ。さて・・・

・・・何しようかしら？

悲しいけれど思いつかないわ。

開放感はあるが、それだけになっている。

ん～・・・普段、タチバナの事ばっかりになってるし、屋敷の人間を見て回るかな？

いつもの延長線上のような気がするが、まあいいだろう。

1．月と詠

基本的に彼女らは塾生に勉強を教えている先生だ。
この塾では優秀な者は自分の理解を深めるために先生となりお互いを高め合う方式をとっている。
正式な先生は、タチバナと使用人一号さん、二号さんの3人。
この方式をとっているため先生の人数が少なくとも何とかなる。
・・・こんな事はよく思い付くものね。
まあ、月や詠みたいな成果があるのだからいいんでしょう。
今は詠が先生で、月が補助しながら軍学をやっている。
ちゃんと先生やって頑張っているみたいね。

2．澪香

月の護衛役としてこの屋敷にいる彼女だが、あまり月の側にいなかったりする。
この屋敷は自分以上に問題に対して敏感な存在がいるため月の側に付きっきりじゃなくていいそうだ。
・・・護衛役意味ないわね。

一応、仕事はしているみたいだ。見回りもするし、鍛練と合わせて武術の講師もしている。
学んだ者が皆、突撃しかしなくなるのは困るのだけれど・・・
まあ、澪香は武力はあるからいい講師にはなるわね。

武道場に行ってみると澪香は数人の塾生と姿勢正しく正座をし、精神統一を行っている。
鍛練開始前に必ずやることだ。
この世界の華雄が、シ水関を守っていたら反董卓連合は勝てなかったでしょうね。
基本的に猪だが、冷静に物事を見る事が出来るようになっているから、一概に猪と言えないだろう。

邪魔をしては悪いので他に行こう。

3．春蘭、秋蘭

私と同じように様々な雑務をこなす彼女達。
来客対応から太守の依頼の分別、使用人達への指示から様々だ。

春蘭は残念ながら、雑務はできないみたいだが秋蘭に頼まれたことは上手に片づけている。

・・・今は春蘭いないみたいね。

秋蘭が来客対応と私の分の雑務をやっている。

秋蘭「どうした、華琳？今日は休みではなかったか？」

華琳「やることが思いつかなくてね。せっかくだから、屋敷の雰囲気を見てみようかと思ってね。」

秋蘭「そうか。・・・あなたはよくやるな。この仕事量、私がやってた時より多いぞ？」

華琳「タチバナが仕事しないからよ？太守の依頼も増えているし、仕方ないのかもしれないわね。」

秋蘭「華琳を信頼しているのだろう。その分、タチバナ様は他の事が出来るようになっている。有り難い事だ。」

華琳「菜園いじりと、歌と寝ている光景しか見てないのだけれどね。・・・春蘭は今日はここにいないの？」

秋蘭「タチバナ様とあの４人と一緒に修練場にいるぞ？いいものが見れると思うから行ってみるといい。」

秋蘭に言われたし、修練場に行きましょうか？

・・・修練場って行った事なかったわね。

4．歌

虎とは言い難い大きさのトラ『歌』は、塾生達とよく遊んだり、一緒に昼寝をしている。

最初は驚いたが、来訪者の案内役もやっている。

・・・人の言ってる事を理解しているし、本当にトラなのかしら？

一応、私やタチバナ、夏侯姉妹が呼ぶとどこにいてもやってくる。

案の定、呼んだらやってきた。

華琳「修練場に行きたいのだけれど、場所を教えてくれる？」

自分の背中に乗れと誘導してくる。

タチバナ曰く、歌は気に入った者しか背中に乗せないとのこと。

私は気に入られているのだろう。

私を背に乗せ、修練場へと向かっていった。

5．タチバナ

彼は基本的に怠け者だ。

自分に来ている仕事は、ほぼ私か夏候姉妹や月、詠に回している。

塾の先生でありながら、あまり自分で教えようとしない。

気になる者や、自分からタチバナの元に聞きに来る者は対応するが、塾生の独自性に任せている。

太守から来る依頼は、私と秋蘭に任せている始末だ。

あれがやっている事は、菜園いじりか、高名な来訪者が来るのでその対応、賊討伐の依頼くらいだ。

・・・私が見ている限りでは。

菜園いじりや歌と寝る、塾生といる時くらいしか彼は見ないのだ。

タチバナは私の様子をよく見に来るが、私が彼に会いに行くことはあまりない。

呼べば来るからだ。

実はタチバナの事は何も知らないな、と思った。

修練場に近づくにつれて澄んだ音が聞こえてくる。

歌から降り、その綺麗な音の方へと足を運ぶ。

タチバナと春蘭が戦っていた。

あの４人はその光景を静かに見ていた。

春蘭の剣は彼に当てようと上下左右無尽に動いている。
しかし、いずれも当たらない。
彼が左手で持っている短剣に軌道をすべて変えられている。

とても綺麗な軌道を描いていた。

２人で舞をしているみたいだ。

剣のぶつかり合いも楽器の様に澄んだ音色を奏でていた。

いつまでも見ていたい。

そんな感情が湧いてくる。

しかし、その舞も終わってしまった。
春蘭の息が荒く、汗も恐ろしいほど流れていた。

春蘭「も、もうし、わけ、あ、りませ、ん。・・・限界です。」

タチバナ「そうですね。これ以上は無理でしょう。頑張りましたね、お疲れさまでした。」

そう言って春蘭の頭を撫でている。

タチバナ「おや？華琳さん。休みはどうですか？」

華琳「・・・とても素晴らしいものを見せてもらったわ。今のは？」

春蘭「・・・護身術の一つだ！倒すことがすべてではないッ！！」

タチバナ「説明をするならもう少し解りやすく・・・まあいいでしょう。倒すのではなく、相手を制す、という考えから考案された技術です。」

華琳「あなたが考案したの？」

タチバナ「いいえ。西の方にある国から持ってきた技術です。誰でも使いやすいようにはいじってますが、ね。」

唐突に、今まで静かだった４人が声をあげた。

楽進「スゴいですッ！！！！」

李典「いや～驚いたわ！言葉もないな～！」

于禁「沙和達にはできない事なの！カッコいいの！」

文若「・・・はぁぁ・・・」

３羽烏は驚きの声をあげ、桂花は・・・何かうっとりした顔してるわ。

あの顔はよく見たわね。

タチバナ「ここまでできるようになるには、相当の苦労がいりますが、これの基礎は皆さんに教えます。そのために見せたのですから。」

楽進「私にもできるのですかッ！？」

タチバナ「可能です。月さんもく～ちゃんも基礎は出来ています。技術を体得するのではなく、精神を体得してください。」

凪はやる気一杯だが、沙和や真桜は自分達がちゃんとやれるか不安そうだ。

・・・桂花はうっとりしたままだ。

タチバナ「大変ですが、しばらくは朝と夕食後にここで学んでもらいます。皆さんの体調に合わせてやっていきます。今日はこれまでですが、何か質問は？」

今までうっとりしていた桂花が途端に真面目な顔をしてタチバナに話しかけた。

文若「私にできるか分かりませんが毎朝やらせていただきます。そしてこの場で改めまして・・・」

桂花は正式な礼をとった。

文若「曹光様、今までの非礼、真に申し訳ございません！私は姓を荀、名をイク、字を文若と申します。先ほどまでの行動、今の武を見まして、私が将来仕えるべき方はあなただと感じました。」

今までとは、態度が全く違っている。
春蘭は目を丸くしている。

文若「今はまだ未熟故、あなたから教えを請う事を許して頂き、経験を積み、いつかその末席に加えて頂きたくあります。忠誠の証に我が真名、桂花をお預けしたい。」

桂花がここまで言うなんて・・・
私は少し驚いた。

私の知る彼女なら、たとえ認めたからと言ってここまで態度が変わ

るとは思えなかったから。

タチバナは何と返答するだろう？

静かに桂花の言葉を聞き、彼は口を開いた。

お休み華琳さん（後書き）

携帯壊れちゃったんだ。

コルトです。

とりあえず、新機種に替えてアップしたんですが・・・

使いにくい！！！！！

慣れてないだけでしょうが。

暫く、更新速度は遅くなります。

・・・まあ元々不定期なんですがね。

次は桂花へのタチバナの返答と真名の交換とかして、話を進めようと思います。

いいかげん、原作に近づけないとね。

ではまた。

天の贈り物と華琳

漢王朝の衰退は急激に速まっていた。

劉宏達の来訪以来、賊討伐の依頼は増える一方、地方領主の重税により生活はより厳しくなっている町や村は多くなっている。

・・・やはり、この世界でも『黄巾の乱』は起こるだろう。

タチバナが領主として許昌を治める時期辺りに・・・

私の世界よりは少し早いが大体その辺りになるのではないかと思っている。

あの男が、ただ5年後などと理由もなしに言うはずがない。

どこまで先を見ているのだろう。

少なくとも、黄巾の乱があった後の事も見えていると思う。

反董卓連合の結成も見えているのではないかと感じている。

月への対応、袁紹とのやりとりを見る限り・・・

・・・今は出来ることをしよう。

少なくとも、目の前の『男』に教養と文学を教えなくては・・・

実は、三羽烏と桂花がタチバナの塾に来て数ヶ月が経った。

桂花の告白は、見事に振っていた・・・

誤解のないように言うが、真名は教えあっている。

三羽烏も同様に。

タチバナ曰く、

『私は貴女のような素晴らしい方に忠誠を誓って頂けるような者ではありません。貴女は自分の信じる道に忠誠を誓って下さい。そして経験を積み、その自分の信じる道に私がいたなら、その時、また会いに来て下さい。その時は歓迎しますよ？』

始めは、もうこの世の終わりみたいな顔をしていた桂花だったが、あとに続く言葉から『必ずあなたについてきますッ！！』と言って幸せな顔をしていた。

凪は同じく感銘を受けたのでしょう、

『私もいつかあなたについて行きたい！！今はあなたの下で学び、世界を見てきます！』

と言っていた。

沙和と真桜は困惑していたが彼から、今は考えなくていい、まだまだ先の事、と言われ落ち着いたみたいだ。

その後、皆で真名の交換をしてその場は解散となった。

・・・桂花は、私と春蘭に真名を預けるとき、とても苦々しい顔をしていた。

無性に腹が立つわ！今までで一番と考えてもいいくらい！

・・・彼女に何かしたかしらね、私？

まあ、いいわ。

後はタチバナが、４人に様々なことを教え、私は彼の分の仕事が増えていったと言う所かしら？

凪は『氣』の使い方や格闘術を中心に学び、真桜は工学を学び、桂花は軍学から経済学など幅広い分野の文学を学び、沙和は剣術とファッションについて学んでいった。

・・・沙和だけおかしいって？

仕方ないのよ。
元々、沙和はこの塾に来るのは乗り気ではなかったのだ。
凪、真桜が行くからついてきただけ、理由がなかったのだ。
そのため、タチバナがせっかく来たのだからと、双剣を使う彼女に剣術を教えながら、服や装飾などのファッション関係の、彼女が喜びそうな事を色々教えていたのだ。
・・・まあいいのだけれど！
その時間に仕事をしろとは言わないわよ？
沙和が可哀想だし。
彼女は喜んでいたから、よかったのでしょう。
そして、荀家や村の人々に言われた約束の期限が来たため、４人は名残惜しんだが帰って行った。
また逢えるといいわね。
・・・次は乱世でしょうけど。

それが1ヶ月前。

今は4日前に拾った目の前の男『北郷一刀』の教育係として、私が見ている。

どうしてこうなったのかしら？

元は、4日前の昼にタチバナが、昼食をとっていた私を捕まえた事が始まりだ。

タチバナ「華琳さん！食事中すみませんが、今すぐ出掛けるので用意して下さい！」

華琳「ッは！？ちょっと待って！！今日の昼食は、あなたの新作でしょう？批評するから、って歌！！引っ張らないで！！服が！！ってちょっとーーーーッ！！！！」

月と詠が見ている中、私はタチバナと歌に強引に連れ出された・・・

華琳「流石に怒るわよ？」

タチバナ「もう怒って・・・すみません、急を要しました。予定より早かったのです。」

タチバナと歌は頭にタンコブをつくっている。

華琳「で、急を要してどこに行くのかしら？下らない事なら1ヶ月、太守からの依頼は全部あなたに回すからね？」

私は歌に乗りながらタチバナに言う。

タチバナ「もう着きます・・・どうやらちょうどみたいです。」

タチバナは私の後ろの空を見上げながら言う。

華琳「一体何が・・・何？流れ星？こんな時間に？」

空を見ると光る物体を見つけた。
流れ星かと思ったが、だんだんこちらに近づいてくる！？
反射的に身を守ろうとしたが、タチバナが守ってくれた。

こういう所は信頼できるわね。

流れ星は近くに落ち、巨大な穴を作っていた。

華琳「・・・何が起こったの！？」

タチバナ「私の待ち人が来たんですよ・・・しかし早すぎるな。下手をすると、か・・と・」

何かブツブツ言いながらその穴の中心に向かっている。

誰かが倒れているのが確認できる。

見たことのない服装をした少年、とは言わない。

彼を知っている。

『私の世界』でも何度も見ている。

『北郷一刀』

彼が空から降ってきたのだ！

タチバナの待ち人とは彼の事だったのか！

様々な思考が巡ったが、とりあえず『北郷一刀』を介抱しようと近づく。

彼はうなされているようだ。

しきりに何かを言っている。

耳を傾けて聞いてみた。

北郷「・・・もう食べれません。お月様バーガー・・・」

・・・何を言っているのだ、この男は？

タチバナ「ここじゃ何もできません。一回屋敷に戻ります。」

華琳「賛成ね。とりあえず、あなたが背負うのよ？」

タチバナ「歌さんの背中に・・・いえ、ナンデモアリマセン。」

凪に『氣』の使い方聞いたけど便利ね。

一端、私たちは『北郷一刀』を連れ屋敷に戻った。

それにしても、彼、こんなに小さかったかしら？

服もぶかぶかだし。

天の贈り物と華琳（後書き）

何か見たことある光景だなあ。

コルトです。

様々な所で、二次創作が出来ている中、私もその一員としていますが、何か似た所というか、同じ所が多々あるように感じます。

もう少し独自性がほしいですね。

一応、気を付けてはいますが、気になるような所がありましたら、教えていただけると助かります。

ついでに前話の護身術は、カボチャばさみさんのを参考にしています。

・・・参考ではなく、引用、とな？

そうだとしたら、ゴメンナサイ。

まあ、護剣は色んなゲームに出てるし問題ないでしょう・・・たぶん。

それではまた次回。
次は、彼の話です。

過去と未来と華琳

『北郷一刀』をつれて屋敷に戻った。
私が運ばれた書庫の寝室に、同じように寝かされている。
タチバナは、彼の目が覚める頃にまた来ると言い、私に後を任せると部屋から出ていった。

『北郷一刀』

私の世界では、管輅の予言により、天の御使いとして呉に舞い降りた。
そして、孫家と劉備一党による天下二分の世界を創った功労者の1人となった。

・・・私の元に降りてきていたら世界は変わったかしら？

少し感傷的になった。

今は、タチバナの下に私はいる。
彼がどんな存在だろうと関係ない。
目が覚めるまで待ってみようと思った。

そういえば、今の間にある仕事は誰がやるのかしら？

北郷一刀

目が覚めると、全く知らない所にいた。

さっきまで学校に行くために通学路を走っていたはずなんだけどな～。

何か身体が動かしにくいが、起こしてみる。

1人の少女がいた。

今まで見た事がないような、とても綺麗で人形みたいな少女。

本を読んでいるようだ。

声をかけてみよう。

そう思った。

曹操（華琳）

タチバナ「時間通り、目を覚ましましたね。」

本を読むのに集中しすぎた。

『北郷一刀』が目を覚ました事に気付かなかった。

・・・タチバナ、あなたいつ来たのよ？

流石に、あなたが入ってくるのは気付くわよね・・・

タチバナ「身体は動かせますか？問題なければこちらへ。寝起きにいいお茶を用意してますよ？」

北郷「あっ、はい。ありがとうございます。身体は問題ないですから、戴きます。」

そう言って寝台から、いつもの用意をしている机に向かってくる。

私の時とやることは同じね。

タチバナ「孟徳さんもこちらへ。せっかくなので一緒に飲みましょう？」

・・・字で呼ばれるのは久しぶりね。
何か意図があるのかしら？

『北郷一刀』は今の言葉に疑問があったのか、動きが止まったが椅子に何とか座った。

タチバナ「まずは、気を落ち着かせる為にお茶をお飲み下さい。聞きたいことはお答えしますから♪」

・・・楽しそうね。
本当にお茶好きよね。
自分でもよく飲むし、人にも勧めるし。
よく私はつき合わされるし。

ゆっくりお茶を飲んでいる男2人を見ていた。

北郷「・・・美味しいですね。オレンジの色合い、マスカットフレーバーと言われる独特な香り、ミルクティーではなくストレートで淹れている所をみると、インドのダージリンですね。種類が多いので一概にそうとは言えないでしょうが。」

・・・何を言っているの？

唐突にこんなことを言っているので私は混乱している。

タチバナ「いえ、これは私が独自に栽培している葉なのですがね。ダージリン・・・いいですね。この茶はダージリンにしましょう。」

『北郷一刀』は自分が言ったことなのに私と同じく何を言っているのか分かっていないみたいだ。

タチバナ「まあ、お茶の話は今度ゆっくりしましょう。あなたなら解ってくれそうなので。さて、改めて名乗りましょう。私はタチバナ。この屋敷の主です。」

北郷「あ、えと、俺・・・じゃないな、自分は北郷一刀。聖フランチェスカ学園2年、助けてもらったんだよ、な？ありがとう。助かったよ。」

・・・なるほど。

さっぱりね。

まあ、名前は、北郷一刀で間違いはなかった。
あとは彼がどこから来たのか、だけど・・・天の御使いと言われるように違う世界から来たようね。

私が同じ様な経験をしているのだもの。

私よりはるか未来から来ている可能性もある。

彼の反応はどうかしら？
タチバナを見てみる。

タチバナ「なるほど・・・あなたは今、おいくつですか？」

北郷「えっ？１７です。」

私の知っている北郷一刀はそれくらいだったかしらね。

しかし、今の彼はどう見ても・・・

タチバナ「落ち着いて聞いて下さいね？・・・はい鏡です。」

北郷は鏡を見る。

北郷「何じゃこりゃーーーーーッ！！！！」

・・・五月蝿いわね。
どこかで似たような事あったわよね？

北郷「あれ？俺１７歳だよね？なんでこんなに小さくなってるの？さらにここどこよ？孟徳ってあれか？三國志の世界なのかここ？でも曹操って男だったような？何かもうわけが『五月蝿いッ！！』イタイデス・・・」

華琳「五月蝿いのが悪いのよ。気持ちを落ち着けるために、タチバナがお茶を用意したのよ？・・・突然の事は解るけれど、少し冷静になりなさい。」

私の言葉で落ち着いたのか、少しずつ疑問を投げかけてきた。

北郷「すみません。取り乱しました。タチバナさん、ここはどこなんですか？」

タチバナ「どこ？あなたの聞きたいことは分かります。ですが、説明は難しい。一つ言えるのは、あなたの知っている世界ではない、と言うことですか。」

北郷「そう、ですか・・・。では、今は『漢王朝』、劉宏が皇帝ですか？」

タチバナ「その通りです。一応皇帝なので呼び捨ては不味いですよ？」

北郷「す、すみません・・・あと、そちらの女の子は『孟徳』と呼ばれていましたが、姓は曹、名を操と言いませんか？」

華琳「その通りよ。よく知っているわね。ついでに言うと、この男は曹家の当主よ。」

北郷「え？曹操さんが当主でない？」

タチバナ「不本意ながらそうなのです。当主なんかしたくはないのですが・・・アノ、刃ヲコチラニムケナイデクダサイ。」

華琳「真面目にやりなさい。で、北郷と言ったかしら？これで満足かしら？他に聞きたいことはある？」

大体予測した疑問だったため、特に何かあるわけではない。
彼は少なくとも、私より未来から来たのだろうと感じていたから。
私の名を知っていても驚きはない。

・・・彼の知識の中に『曹弥孟徳』は存在するかは聞きたいところだが。

北郷「あと、お・・・自分はどうなるのですか？はっきり言って行くところがありません。少しの間だけでもこちらに置いてもらえないでしょうか？」

タチバナ「イタイタイ・・・ああ、構いませんよ？あなたが満足するまでいてもらって構いません。ですが、こちらにいるわけですから、何かお仕事してもらいますよ？」

北郷「こんな身体ですけど出来ますか？」

タチバナ「今は力仕事は必要ありません。・・・そうですね、孟徳さん、しばらく彼の面倒を見て下さい。」

華琳「はっ？何でよ？あなたが面倒みれるでしょ？」

タチバナ「やっぱり年齢は近い方が、馴染みやすいと思うのですよ。」

華琳「彼は１７歳と言っていたわよ？あなたの方が近いでしょ？」

タチバナ「まあ、永遠の１７歳ですがね。孟徳さんも、年齢の割にとても大人びているじゃないですか？今の仕事、私が引き受けますから！」

華琳「元々、あなたの仕事なのだけれど、ね・・・まあいいわ。承ったわ。ちゃんと仕事しなさいよ？」

タチバナ「わかりました。それではあとをよろしくお願いします。北郷君、彼女の言うことはよく聞いて下さい。何かあれば聞きに来てくれていいですから。」

そう言って彼は退室していった。

北郷一刀と私が書庫に取り残される。

華琳「あえて自己紹介はしないけれどいいわよね？とりあえず、今のこの世界の事と、この屋敷の事を説明するわ。」

北郷「ありがとう。曹操、さんでいいのかな？俺のことは一刀と呼んでくれていいから。」

華琳「構わないわ。ああ、後、先程の男の事だけど『タチバナ』と軽々しく呼んではダメよ？彼はいいって言うけど、周りが許さないから。」

北郷「どう言うこと？」

そうか・・・真名について知らないのか。
基本的な教養なんかも教えないといけないのか・・・
前途多難だなと思った。

過去と未来と華琳（後書き）

この小説はどこに行こうとしているのだ？

コルトです。

北郷一刀君が現れた！

彼はこの物語のキーマンです。

活躍するかは別ですが。

一刀君ハーレムはありません。

見ていて分かるようにタチバナハーレムもないです。

好意を持つのは多々ありますが、その先は考えていません。

何かあれば意見等言って下さい。

次は一刀君目線で物語を書きます。

たまには、華琳さんの活躍ぶりを書かないと・・・

それではまた次回。

初めての訓練と北郷

俺が三國志の世界に来て数日が経った。
この世界は知識として知っている三國志とはどうやら違うようだ。
有名な武将が皆、女性になっていること、曹操『華琳』の近くに董卓や買駆がいること、その曹操が塾に行くのではなく塾で事務員みたいな事をしている。

そしてなにより、曹操が曹家の当主ではないこと。

これには驚いた！

一応、先代が『曹操』だったらしいが、少なくとも今は『曹弥』と言う男が当主の座にいる。

『曹弥』と言う者は何者なのだろうか？
一応、曹洪という武将は三國志では存在する、が字も違うし、何より本当の名は『弥』だった。

『曹弥』という武将は聞いたこともない。
しかも、曹操より上の立場にいることが気になる。

周りの人にそれとなくどんな人物か聞くと、あんな感じ、とか、彼になら従う、とか、優しい先生等、俺の聞きたいこととは違う答えが返ってくる。

曹操、華琳さんにも聞いてみた。

華琳「はっ？タチバナ？人の皮を被った何か、よ。他に言いようがないわ。」

と、取り付く島もない状態。

いずれにしろ、俺は彼について行くしか、この世界で生きる術がない。

この世界が何なのか？は暫く保留にしよう。

今日は曹弥さんから、初めて武術を習う日だ。

まだ、若いとはいえ、あの有名な夏候惇、春蘭が武術において触れたことがないと言うほどの存在だ。

華琳さんからは、『まあ、頑張りなさい』と同情の目で見られた。

月や詠、華雄から羨ましい目で見られていた。

・・・まあいいや。

とりあえず武術を習おう。
これでも、剣道で少しは身体は出来ているはずだから何とかなる、かなぁ？

実践的なものでないし、身体が出来ていると言っても人よりはってくらいだし・・・不安だ。

タチバナ「いらっしゃい、北郷君・・・大丈夫ですよ。最初なんで軽くにしますから。」

武道場に着くと、華琳、月、詠、華雄、春蘭、秋蘭、武術を習っている塾生達がいた。

春蘭「北郷！！無様な姿を見せたら叩き切ってやるからなッ！！」

わお・・・初めての訓練なのにヒドい言いよう・・・秋蘭さん、その時は止めてくださいね。

月「へぅぅ・・・先生の剣術が見れる♪」

まあそうですよね♪

俺の心配なんてしないですよね。

澪華「まあ、頑張れ。タチバナ様と1対1で訓練できるのはなかなかないぞ？」

ありがとう、華雄さん。
俺の味方はあなただけみたいです。
他の人々は、彼の剣技が見れるとのことで嬉しそうだ。

華琳「あんまり待たすのはどうかと思うわよ？死にはしないだろうから、とっとと逝きなさい！」

あの？カリンサン。字が違う気がしますが？

タチバナ「あなたに合わせるので大丈夫ですよ？」

北郷「疑問型で言わないで下さい！！・・・お願いします。曹弥さん。」

タチバナ「はい。お願いします。礼は大事です。皆さんも見習って下さいね・・・では・・・」

一瞬にして、周囲に緊張が走る。

まだ、かじった程度の技術でもわかる。

『勝てる相手ではない！！』

強かったじいちゃんに影さえ踏ませない位、圧倒的差があるとわかる。

タチバナ「これでも『氣』は発していません。あなたでもわかるくらいの力にしかなっていません。」

俺は下段の構えで木刀を持つ。

じいちゃんの真似事だ。

曹弥さんに向かっていった。

・・・空が青い・・・

ボッコボコにされました。
叩かれた場所がないくらいに叩かれました。
華琳さんに手当してもらってます。
とても有り難いですが、イタイデス・・・

華琳「これで終わりね・・・せめて木刀にくらい当てなさい。春蘭に斬られるわよ？」

北郷「むちゃを言わないで下さい！！春蘭でさえ曹弥さんにまともに当てる事も出来ないのに・・・」

華琳「まあ、あれは速すぎるわ。あれで、皆の参考になるわけがないわ。」

彼は木刀を納刀した形で持ち、多分、居合いのように俺を打っていたのだろう。
ただ、静かにその場に立っているだけで木刀を振っている様には見えないみたいだ。
俺は叩かれていただけでさっぱりわからなかったが、華琳さんや春蘭達も見えていなかったと言っていた・・・月以外は。

月は目がとてもいいそうだ。
彼の神速と言っていい速さの斬撃が彼女だけ見えているのだ。

体が追いつかないため、対応出来ない。
が、見ることは出来るため、いつも彼の剣術を見るのが楽しみなのだそうだ。
剣の軌道が滑らかで、軌道が光って見えて綺麗なのだと言っていた。

今は、塾生に剣の使い方を教えている。
併せて、夏候姉妹と華雄を相手に手合わせしていた。
人に見せるため、普通の速度で木刀を振るっている。
確かに木刀の軌道はとても綺麗で、月が見るのが楽しみになるのがわかる気がする。

北郷「何年、剣に生きればあれだけ出来るようになるのかなぁ？」

華琳「少なくともあなたがこの先、剣にだけ生きれば１００年後はできるのではないかしら？」

北郷「普通に生きたんじゃ無理ですよね。１００年も人間生きれませんから・・・」

華琳「もう少ししごかれてきたら？１００年の中の一刻くらいは縮まるでしょうよ。」

北郷「いてて・・・そうだね、そうしますよ！」

叩かれた痛みに声にならない悲鳴をあげ、もう一度、曹弥さんに向かっていく。

春蘭達は驚いていたが、曹弥さんは嬉しそうだ。

少しでもこの世界で生きていられるように、曹弥さんに木刀を当てることが出来るように、一歩ずつ進もう。

・・・『黄巾の乱』が起こるまでに少しでも！

曹操（華琳）

タチバナはおそらく、北郷一刀を将として育て上げるつもりなのだろう。

私から、学を教わり、自ら武を教える。

領主として自分が乱世に身をおく事がわかっているから。

少しずつ、その用意をしてるのがわかる。

塾に通った子供達の多くも彼が領主になれば、自ら仕官に来るだろう。

私はどうするか

決まっている

彼について行くのは楽しそうだ

彼はどんな道を進もうとするかしら？

覇道？王道？

・・・私を楽しませてほしいと思っている。

初めての訓練と北郷（後書き）

なぜか見たことがある展開・・・

コルトです。

何書こうか迷いました。

結果、どこかで見たような展開になってしまいました。

やっぱり華琳さんで進めた方がやりやすいです。

これはダメだと思ったら指摘下さいm（＿＿）m

次は依頼編です。

・・・また話が進まない・・・

簀巻きのタチバナと華琳

タチバナは今、縄でグルグルの簀巻きにされ馬の上にいる。

少し前から、よく聞こえる高笑いが聞こえ、私の横では、大剣を持った少女が話しかけてきており、タチバナの乗っている馬を扱いながら謝り続ける少女、周囲は大所帯で金ぴかの鎧を着た兵士達がいた。

タチバナ「なぜ、私はこんな格好でいるのでしょうか？」

華琳「さぁ？私はあなたが連れて行かれるのについてきただけだからよくわからないわ。」

理由は知っているが、知らん振りをする。
彼、タチバナがちゃんと話をしないのが悪いのだし。

顔良「すみませんッ！！ごめんなさい！！許して下さいッ！！」

タチバナ「いえ・・・もう埒があかないので、謝らないで下さい。怒っていませんし・・・」

文醜「なぁ、アニキ。冀州着いたら、手合わせしてくれよ？」

タチバナ「とりあえず、この簀巻きを何とかしてほしいですが・・・」

華琳「解いたら逃げるでしょ？今回は、ちゃんと依頼なのでしょう？最後までちゃんとやりなさい。」

タチバナ「・・・まあいいですが。麗羽さんがこんなに強引に行動するとは思いませんでした。」

私はすると思いましたが？

まあ、こうなったのは数日前の事。

タチバナ「明日から冀州に、ですか。おめでとうございます！大変だと思いますが頑張って下さいね？」

麗羽「ありがとうございます、曹光様・・・それでですね、あなた様にお願いがございまして。」

タチバナ「どうしました？仕事以外なら何でも聞きますよ。」

麗羽「とても言いにくいのですが、そうなのですわ。陛下から承った統治の件、残念ながらわたくしには不安がございます。その旨を伝えると、陛下から曹光様を頼れと言われました。」

劉宏・・・余計な事を！！

麗羽「以前、来訪の際、埋め合わせをする、と曹光様は言われました・・・数日でいいのです！！どうか、この袁本初の側にいてくださいましッ！！」

顔良「私からもお願いします！曹光様に来ていただければ、皆、気力が揚がります！」

文醜「あたいはアニキと手合わせできれば何でもいいよ～。」

文醜・・・場所をわきまえて言いなさい。

タチバナ「ん～どうしましょうか？華琳さん。」

華琳「私に聞かないで・・・まあ、数日なら問題ないでしょう。『なぜか』太守の依頼がないから、仕事の心配はほぼないわ。」

大方、劉宏が手を回しているのでしょう。
うまい具合に依頼が全くこないのだから。

麗羽「・・・また明日、出発前にお伺いしますのでその時にご返答を。斗詩さん！猪々子さん！帰りますわよ！」

顔・文「はっ！！失礼します、曹光様ッ！！」

3人はあっさり帰って行った。
・・・あんまりいい雰囲気ではないわね。
一応、今ある仕事を数日分は終わらせておく、か。

タチバナ「ふう・・・では、歌さんッ！！一緒にお昼寝を・・・氣ヲハナタナイデクダサイ、カリンサン。」
華琳「さあ、仕事をしましょうか？太守からの依頼はないとはいえ、やることは山ほどあるわよ？一刀は字が書けないから役に立たないの。あなたがやれば私が歌と昼寝ができるわ。」

ズルズルとタチバナの首根っこを掴み引きずっていく。
・・・どうなるのかしらね？明日は。

と言うのがあり次の朝には、文醜と顔良がやってきて、話もそこそこにタチバナをグルグル巻きにして屋敷から連れ出していった。
屋敷の皆は突然の事で、どうすればいいのか困惑していたが、数日で帰るという私の言葉を聞き落ち着いていた。

秋蘭「昨日の件か・・・やはりこうなったか。こっちの事は任せてもらおう、華琳！タチバナ様を頼むぞ？」

月「やはり出掛けられるのですか？私もついて行きたいけれど・・・華琳さんッ！！先生をよろしくお願いします！！」

詠「春蘭と澪華にはうまく言っておくから・・・気を付けなさいよ。」

一刀「俺はどうすれば・・・えっ？鍛練してろ？解った！！少しでも曹弥さんに追いつくため頑張るよ！」

あらかじめ、皆に伝えていてよかったわ。
簀巻きで誘拐されるのは想定してなかったけれど、強引な方法は採るだろうと思っていたから。

私は彼女らに追いつくために馬を走らせた・・・

このやりとりが数日前。
明日には冀州の麗羽が赴任する地に着く。

冀州は思っていた以上にヒドい有様だった。
『黄巾の乱』がここから起こるのは仕方がないのかもしれない。
私の世界も『麗羽』のおかげで、冀州はヒドい所だったが・・・
これは『必然』なのだろうと思った。

一刀から少しだけ聞いたが『黄巾の乱』は過去に起こっていると言っていた。
彼の歴史が私達の物かはわからないが少なくとも、それはあるものと考えられる。

ここからどのようになるかはわからない。
が、出来る限りの準備はしておこうと思う。

華琳「・・・まあ、彼は大体用意しているのでしょうけど。」

文醜「え?華琳、何か言ったか?」

華琳「何も言ってないわ・・・さぁ、もうすぐ着くわね。」

麗羽「申し訳ありませんわ、華琳さん!色々、やっていただき感謝しますわッ!」

顔良「華琳様、本当にありがとうございますッ!私だけではどうにも・・・」

タチバナ「あの~皆さん。そろそろ縄を解いてもらえませんか?この格好でも動けますが、そろそろ普通に動きたいのですが・・・」

・・・麗羽がある程度落ち着いたら色々回るようタチバナに言っとこうかしら?
それと、この地についても少し調べないと・・・

幽州だが北に上れば、劉備の故郷だったかしら？
それと超子龍は常山の出だから会おうと思えば会えるわね。
この辺りも英傑は多数いるわね。
会えるといいな。

・・・名前は忘れたけれど、幽州を統治する太守がいたわね。
彼女はいるのかしら？

??

??「麗羽が？それは聞いているがどうした？」
文官「どうやら、あの『曹弥光』も一緒のようで。兵士の士気はとても高く、袁紹殿もしきりに曹光様と言っているようで・・・」
??「なんだとッ！！『治世の能臣』の兄じゃないか！！すごいの連れてきたな・・・会ってみたいな。」
文官「お知恵を借りたいですな。度々、幽州内で見たと報告があり

ましたがいずれも空振りでしたから。」

??「洛陽にいたときは一回も会えなかったしな。ここで縁を結んでおけば、何かの時に助けになるよな?」

文官「それは間違いありませぬ。袁紹殿の赴任祝いにかこつけて会いに行きましょう。」

??「そうする・・・すぐに支度しろッ!!目的は曹弥光、その人だ!!」

文官「かしこまりました。すぐ用意をします。」

どんな男なんだろう。

『治世の能臣』の兄だからけっこうおっさんなんだろう・・・

まあ、年は関係ない!!

印象を強くするために何かしたほうがいいかな?

普通、普通言われるし、影薄いし・・・

・・・考えても無駄か!

ちゃっちゃと用意しよう。

簀巻きのタチバナと華琳（後書き）

コルトです。

馬騰さんのほうでもよかったんだ。
馬超や馬岱を出したかったんだけどね。

でも、自分、普通の人も出したかったんだ。
それに劉備とか趙雲もだせるかな？とか考えて、ね。

馬家、好きな人ゴメンね。

私、ハム子さん好きなんです。

ｌｏｖｅじゃないよ？ｌｉｋｅよ？

一番好きなのはわかるでしょ？

次は普通の人の依頼です。
ぶっちゃけ、袁紹の依頼ってほぼ終わってるんだ。

町娘の依頼に華琳

麗羽の依頼は本当に近くにいてほしかっただけみたいね。
ここまでの移動時、私が指示を出したりしたけど、今は何も言われない。
政務の手伝いとかに駆り出されるかと思ったけど、タチバナと一緒にダージリンを飲む時間が多かった。
・・・ちなみにタチバナは一回帰ってダージリンを持ってきたのだ。
本当に好きなのね。

タチバナ「さて・・・そろそろ本当にやることもないですし、帰りますか？」

華琳「そうね。あまり、あちらを留守には出来ないわね。麗羽にその旨伝えに行き『曹光のアニキ！！』ましょう？」

突然、扉を勢いよく開けて猪々子がタチバナを呼ぶ。

タチバナ「元気がいいですね、文醜さん。どうしました？」

猪々子「姫様が呼んでるんだ。ちょっと来てくれないか？」

そう言いながら、タチバナの腕を引っ張っていく。
私は2人の行動を見ながら、お茶を飲み続ける。

猪々子「華琳も行くのッ！！」

華琳「ちょっと猪々子！？引っ張らないで！！」

同じく私も太守の間に連れて行かれた。

麗羽のいる太守の間に入ると、麗羽、斗詩の他に、赤毛の普通の町娘みたいな子がいた。

赤毛「何か会って早々、ヒドいこと思われてる気がする。」

麗羽「本来なら白蓮さんみたいな町娘が会うことさえ不可能な方ですわよ？わたくしのお願いで来ていただけたのですから感謝してほしいですわ！」

まあ、よくそんなことが言えるわ。

タチバナ聞いている・・・あれ？猪々子が掴んでいたはずなのに、どこにいったのかしら？

赤毛「なあ麗羽？この子がそうなのか？どう見ても男には見えない

し、おじさんにも見えないぞ？」

猪々子「あれ？腕掴んでたはずなのにどこ行ったんだ？」

タチバナ「初めは私を掴んでいましたが、華琳さんを呼ぶときに私の腕を放したでしょう？そのままおいて行かれたんですよ？」

ああ、そういえばタチバナ、すでにその時からいなかったわ。仕方なく、後ろからついてきたのだろう。遅れて、追いついてきた。

斗詩「ちょっと文ちゃん？大切なお客様なんだから、丁重に呼ぶように言ったじゃない！」

猪々子は申し訳なさそうにタチバナを見ていた。

タチバナ「麗羽さん。曹弥光参上しました。ご用件は何でしょうか？」

麗羽「申し訳ありません、曹光様。本来ならわたくし自ら、お呼びしないといけなかったのですが・・・」

タチバナ「お客様です、か・・・貴女はここの領主です。畏まらずにして下さい。貴女の頼みなら、ちゃんと聞きますから。」

華琳「聞くだけでなく行動もしなさい『あ、あの？』よ？」

ああ、赤毛の町娘を置いてけぼりにしていたわね。
誰だったかしら？
見たことあるから覚えてないわけではないのがけれど・・・

赤毛「あ、あなたが、あの『曹弥光』なのですか？」

タチバナ「どの『曹弥光』か知りませんが、その名前は私だけと思っていますが？」

赤毛「いや、扱いが妙にぞんざいだし、おっさんじゃなくてとても若いし、『治世の能臣』の兄とは思えなくて・・・」

タチバナ「曹操孟徳の兄でしたら、私がそうです・・・ああ、彼女も『曹操孟徳』ですが、全くの別人ですから。」

その言葉を聞き、赤毛の少女は顔を真っ青にしてひざまずいた。

赤毛「大変失礼な事を言いましたッ！！私は、公孫贊、伯珪！幽州群の太守を任されている者！本日は、友人、袁本初が冀州に赴任した祝いと思い参上しました。」

タチバナ「かしこまらなくていいですよ？私は塾の先生ってだけで、そこまで偉くないですから。」

華琳「一応、曹家の当主でもあるのだけれど？」

タチバナ「まあそうですが・・・公孫贊さん。顔をあげて下さい。綺麗な顔が台無しになります。」

また、そう言うことを平気で言う。
いつか刺されるわよ？

月とか詠とかから。

伯珪「き、綺麗ですか？えへへ♪あんまり言われた事ないから嬉しいです。」

あ～あ、麗羽の機嫌がとても悪くなっていくわね。
周囲が寒くなってきた。

タチバナ「麗羽さんは品のある美しさがありますが、貴女は、広い優しさのある美しさが見えますね。」

・・・私が刺してやろうかしら。
何か腹が立つのよね。
麗羽と公孫贊は気持ちの悪い笑みを浮かべていた。

タチバナ「それで、公孫贊さんは『白蓮と呼んで下さいッ！！』・・・真名ですよね、それ。この場は伯珪さんとお呼びします。麗羽さんの祝いとは別の用件がありますね。私に何か用ですか？」

伯珪「！！なぜそれを！！」

華琳「友人だからと言って、こんなに早くに祝いには来ないでしょう？大方、こちらにくる途中にタチバナがいることを知ったのでしょう？縁を作っておきたかったのはすぐ分かるわよ？」

伯珪「曹弥光の横にいるのだから、相当の智者なのだろうな・・・私の近くにはあまり智者がいないから羨ましいよ。」

猪々子「そっか～。あたいは頭よくないからそんなこと思ってたなんて考えもしなかったよ。」

斗詩「文ちゃんはもう少し頭使おうよ？私もそんなによくないけれど・・・」

2人でどんよりし始めた。

・・・知らないわよ、私は。

麗羽「それで？白蓮さん。曹光様に何用なのかしら？」

伯珪「曹弥光様！！どうか、私の治める地、幽州に来て下さい！！私にその大いなる知恵をお与え下さいッ！！」

タチバナ「どうしましょうか、華琳さん？実際、そろそろ屋敷に帰ろうと言うことで話は出来ていましたが・・・」

華琳「いずれにしろ一回、屋敷に帰った方がいいわ。あちらの仕事

状況も確認しないと。」

麗羽「曹光様・・・もうお帰りになられるのですか？」

タチバナ「ええ。ですが、すぐ戻ってきますよ？幽州にはよく行きますが、行政機関についてはあまり見ていないので。と言うわけで伯珪さん、半日、ここで待っていて下さい。」

伯珪「はい！！って、え？半日？洛陽はそんな時間で帰ってこられな・・・」

タチバナは私を掴んでさっさと部屋から出て行った。
普通そう思うわよね。
しかし『人の皮を被った何か』であるタチバナに常識は通じない。

一時もしない内に屋敷に帰ると、依頼や仕事の状況を確認し、塾生に冀州のお土産を渡したり・・・いつ買ったのかは不明・・・秋蘭と月、詠にまた暫く屋敷を離れることを伝え、私と一刀を連れ、麗羽の城に戻っていった。

一刀「あの～曹弥さん。突然帰ってきたと思ったら今度はどこに行くんですか？」

華琳「幽州に行くわ・・・その前に覚悟しておきなさいよ？」

一刀「え？なにうぉーーーーーーッ！！」

一刀は初めて体験するわね・・・生きていればいいけど。

このやりとりは半日で終わり、町娘のみならず、麗羽も猪々子、斗詩も驚きを隠せなかった。

猪々子「なあ、姫様？この人？別に連れ出さなくてもお願いすればいつでも来てくれんじゃね？」

伯珪「私がおかしいのか？本当に半日で帰ってきたのか？確かに曹操の他に誰か連れてきてるし・・・でもどうやって？」

斗詩「あの～大丈夫ですか？生きてますよね？この人。」

麗羽「素晴らしいですわッ！！曹光様！！本当に半日で冀州のここから洛陽の屋敷まで往復できるなんて♪」

一刀「・・・」

タチバナ「『氣』を自分でちゃんと使えるようになれば誰でも出来ますよ？」

華琳「いや、出来ないから！あなたと人間を一緒にしないで！」

誰が誰と話しているのか・・・

もうこの場を納めることのできる人は誰もいなかった。

町娘の依頼に華琳（後書き）

安定した投稿をしたいものです。

コルトです。

華琳さん視点だと書きやすい・・・

自分に文才がないだけですが、ね。

次は普通の人の依頼です。

一話で終わると思います。

そろそろ、原作に持って行かないと・・・

伯珪と想いと華琳

伯珪「ソウコウサマ、ホントウニアリガトウゴザイマス・・・」

私達は麗羽達と別れ、町娘の統治する幽州の城に来た。

3人を持ってよくあの速さでここまで来れるわね。

一刀、死んでいるわよ？

タチバナ「鍛練の量、増やした方がいいですかね？この程度でこれでは、この先、大変ですよね。」

華琳「増やすかどうかは別として、殺したら、意味がないわよ？」

タチバナ「それもそうですね・・・鍛練の内容をかえましょうか。それで、伯珪さん、私は何をすればいいのですか？」

伯珪「エッ？あ、はい。こちらへどうぞ。まずは皆に紹介します。」

元の調子に戻った町娘は私達の先頭に立ち城を案内する。

・・・一刀、置いていくわよ？

太守の間に着くと、武官、文官に私達を紹介していく。

有能な者がいないと言われていたが、そんなことはなく有能な者は多い、と感じた。

問題は、そこで終わっている、と言うこと。
確かに、彼女、公孫贊伯珪は優秀で、周りの者も有能な者で囲んでいる。
よく言えば『万能』、悪く言えば『器用貧乏』なのだ。
春蘭みたいに武に絶対の強さを持っている者や、桂花や稟、風の様に文に特化している者もいない。

故に、普通なのだ。
成功も失敗も大きくない。

華琳「だから、普通と言われるのかしら？」

伯珪「声に出てるぞ～！いい加減、普通とか町娘とか言わないでくれ～！泣くぞ～！」

タチバナ「そうですよ？普通がどうしました？本当の意味で天才は彼女ですよ？」

伯珪「曹光様まで・・・え？どういうことですか？」

タチバナ「英雄、英傑と呼ばれる者は多くいますね。華琳さんもその一人です。ですが、万能の士は多くはいないのです。なぜかわかりますか？」

一刀「スキルの特化ですね！わかります。」

タチバナ「スキルとは何かわかりませんが・・・特化、という言葉から能力なのでしょう。そうです。数々の英雄達は武か文など、ど

れかの能力に特化している傾向にあります。私の部下の春蘭や塾生のく～ちゃん、月がその例ですね。」

華琳「春蘭は武、詠は文、月は・・・魅力、かしら？」

タチバナ「そうですね。いずれも特化していますが逆の能力、文や武、上に立つ者の能力としてみればどうでしょう？」

春蘭は・・・言うまでもないわね。
詠は多少、武も出来るがせいぜい一般武官止まりね。
月は、確かに人を引きつける力はとてもあると思う。が、それが上に立つ者としていいかと言われればそうではない。
やはり、冷酷に、とまではいかないが人を扱うには魅力だけでは難しい。

・・・月をどこかの領主にするという話があったわね。
やはり、それは間違いではない、か。

タチバナ「いないのですよ。万能に、武も文も、人を扱う能力もある人材というのは・・・華琳さんも万能ですが、凡才、非才にはちょっと厳しい所ありますから。」

・・・言うわね。
細かな所だけれどよく、人を見ている。
確かにその通り。
私は有能な者は愛するが、能力のない者を扱おうとは思わない・・・
今まではそうだった。

伯珪「私はそうだと？」

タチバナ「私はそう感じています。あなたは稀少です。どんな局面でも安定した力を発揮できる貴女なら安心できます。」

伯珪「えへへ～♪何か嬉しいな・・・曹光様からそこまで言われると」

華琳「あら？なら私は必要ないと言うことね。それじゃあね、楽しかったわ。」

冗談のつもりで、その場を出ようとした。
ちょっとタチバナを苛めて遊ぼうかと思ったのだけれど・・・

腕を思いっきり捕まれて、私の顔は彼の顔に後少しで重なりそうなくらい近いところにあった。

タチバナ「今、私の側にいるのは彼女ではない！貴女だ！！私には貴女が必要だ！貴女も私が必要なはずだ！今、側を離れないでほしい！！」

びっくりした！！
まさかこんなことを言われるなんて！
そして彼の瞳を初めて見た！

『全てを灼き尽さんとする紅』
『全てを飲み込まんとする黒』

眼の色が違っていた！

あ”ーもうッ！！
もう何が何だか解らないわ！！

華琳「・・・冗談よ。痛いから、腕。」

何とかそれだけ言えた。

タチバナ「すみません、華琳さん。少し感情が高ぶりました・・・」

それだけ言って腕を放してくれた。

正直、ドキドキしたし、嬉しかった。

本心を語らない彼から、初めて本気の彼が見えた気がした。

『私が必要、か』

その言葉は私を幸せにする十分な言葉だった。

・・・ちょっと待って！！
私は彼の事が好きなの！？

いやいやいやいや！！

私に仕事を押しつけて、すぐどこかに行くし、誰にでも可愛いとか綺麗とか言うし、わけのわからない発明で屋敷を大混乱させる、問題ばかりある曹家の当主。
でも大事な所はちゃんとやるし、子供が大好きでいつも構っている、周りの人間を気遣う優しさ、仮に文武がなくても皆、彼について行きたいと思う雰囲気。

彼に惚れているのか？

いや、多分、手の掛かる弟とか子供とかそんな感じだろう、多分！
そう思いこむようにしよう！！

とりあえず、私が思考の海に沈んでいる間に話がついたらしい。
伯珪の政務を少し手伝うことにしたそうだ。
私は伯珪と一緒に政務を手伝うように伝え、一刀とタチバナは兵士の訓練を見に行った。

タチバナが言うように彼女の采配にはあまり欠点は見られない。
所々、気になる点はあるが失敗してもさほど被害はないだろう。
すぐに立て直せるだろうと思う。
『この世界での私』より少し年は上と言うくらいで、これほど出来るのは彼女がとても優秀なのが伺える。
しかし、彼女は同じ塾に通っていた少女の方が皆からの評価は高く、自分はあまり評価されなかったそうだ。
これが彼女に影を落とし、自分が平凡な存在と思わせているみたいだ。

これは時間が解決するしかない。
誰かに言われたとしても自分が信じれなければ意味がない。
しばらくは様子を見ることにする。

タチバナから指摘されたことは、農業開発の重要性、騎馬隊の編成、鮮卑族や烏桓族とは出来る限り友好を保つように言っていた。
一番下が重要で、これが成されれば後の2つの難度も変わると言っていた。
種は蒔いたから後はうまくやりなさいと、丁寧に用意をしていたみたいだ。

よほど気に入ったのね。
自分の真名も気にせず呼んでいいと言っていた。

まあ、私も少し気になる子だからいいのだけれど・・・

なぜか腹が立つ！！
終始、一刀を叩いたり、つねったりしていた。

一刀「なあ、華琳？俺、君に何か悪い事したかなぁ？」

華琳「胸に手を当てて考えてみなさい。そうすればわかるかもね。」

伯珪と想いと華琳（後書き）

自分の能力のゲンカイデス・・・

コルトです。

ボキャブラリーの低さで言いたいことをうまく書けないこのもどかしさ・・・

誰か助けて！！

次から一気に話進みます。

あんまりダラダラやってもと思うので！

進ませていく中で拠点的な話は作れますから。

拝命する件に華琳

麗羽や白蓮からの依頼から既に数年が経とうとしていた。
考えてみるとあっという間ね。
あれから、袁家や馬家、おまけに劉家からも依頼が舞い込むようになり、忙しさは頂点を極めていた。
中にはタチバナではなく、私宛の依頼もあり、自らそこへ出掛ける事もしばしばあった。
大体、白蓮からだったけれど。

・・・ここ最近は、賊の出没が多く、たくさんいた塾生も今は、近場の洛陽からしか来なくなっていた。
もう間もなく『黄巾の乱』は起きる。
世の乱れは大きく、最早、いつ爆発してもおかしくないくらいに。
塾生が減ったのは、賊の台頭だけでなく、世の情勢を鑑みた結果なのだろう。

タチバナは寂しそうだったがそうも言っていられないだろう。
そろそろ、領主として土地を統治するのだから。

そうそう、月と詠、澪華は私達が幽州から帰って数ヶ月後に涼州へと帰っている。
彼女らは并州の牧としての統治を任されたのだ。
タチバナと劉宏の手回しによりようやく叶ったみたいだ。
まあいずれにしろ、かなり前に彼女らはいなくなっている。
月は離れたくなかったみたいで、無理矢理タチバナも連れて行こう

としていた。
詠は自分も同じ思いだったみたいで、月を説得しようにもうまくはいかない。
澪華がとても頑張って月を説得した。
タチバナも今度は私から会いに行きます、と言って説得をしていた。
統治はうまくいっているみたいで、たまに報告がてら張遼、霞がやってくる。
私達を気に入ったらしく、よく酒盛りや、武の鍛練をしにくる。
・・・一応、将軍の地位にいるのだからあんまり出てきてはダメでしょう。

霞「何言うてるん？恋、呂布より強い奴がいるんねんで。試したくなるのしゃ～ないやん？」

とか言っていた。
天下の呂布より強い、か。
それはそうか。
呂布は化け物と言われるくらい強いが人間ですものね。
タチバナは人ではないから仕方ないわね。

・・・話がそれたわね。

月達がいなくなったため塾の先生はタチバナがやるようになった。
私も駆り出されるようになったが、その時期から塾生の数も減っていたため何とかなった。

夏候姉妹はあまり変わりはなかった。
・・・春蘭が、私の知る春蘭に近付いたと言うことくらいか。

彼女はかわりがないのだろうと思った。
一刀を歌と一緒にいつも追い回し、タチバナに怒られる日々が続いていた。
秋蘭は変わらず、私と同じようにタチバナの補佐をしている。

一刀は一端の武官として使える力量になった。
文は私から、武はタチバナからと英才教育と言っていいほどの待遇だったのだから、そうならない方がおかしいが。
相変わらず、謎の言語を使うがタチバナは気に入っているらしく、色々な話をしていた。
文字の読み書きもできるため、統治を任されたら文武官として頑張ってもらうとしよう。

一刀「あの～。何か死亡フラグがたった気がするんだけど・・・」

気のせいよ。

それと周辺地域に変化が訪れた。
劉表と孫堅の争いが起こった。
賊討伐時に劉表の部下が誤って孫堅軍に攻撃を仕掛けたのだ。
それを機に戦闘が続く事になった。

しかし、それはあまり長く続かなかった。

劉表の将、黄祖が孫堅を討ったのだ。
それを機に孫堅軍は敗北し、江東は統治者がいない状態に陥った。
これを重く見た、朝廷は袁術を送り江東の治安の安定化を図った。

タチバナに任せればいいものを。

これにより、孫家は袁術の宿将として孫家の安寧を図ったのだ。

というのが表向き。

孫堅は死んでいない。

錦帆賊の甘寧『太史慈』が孫堅を守ったのだ。

右腕を失うという代償はあるが・・・

太史慈も顔が分からないくらいの火傷を負っているが、タチバナから仮面を貰い、改めて配下にしてもらえるように願った。

孫堅も最早、死人ではあるが近くに置いてほしいと願い、色々考えてタチバナは2人を引き取ることに決めた。

私の世界、さらに一刀の世界でも考えられなかった事が起こった。

孫堅の生存と太史慈と言う男の仕官。

前者はどちらの世界でも死亡している事、後者は曹孟徳の下に仕官している事、と言うものだ。

既に色々違った世界なのだからあまり気にしない方がいいのだろう。

とまあ、時間が過ぎれば色々な事があるわね。

私の知らない英傑達にも会えた。

それは嬉しかったわ。
しかし、劉備の配下達、関羽や張飛、諸葛亮には遂に会えなかった・・・
馬超や馬岱には会えたけれど、ね。
劉備には会えなくとも、誰かには会いたかったわ。

と心の中で思っている。

ここは劉宏の御前。
私と一刀、秋蘭は膝をつき頭を垂らしている。
以前は対等な位置で話をしたが、今は玉座に座っている劉宏。

・・・本来はこれが普通なのよね。

タチバナは劉宏と同じ視線で話をしている、が。

宦官1「曹弥孟徳ッ!!陛下の御前なるぞ!!頭が高いぞッ!!」

タチバナ「私と陛下は対等な立場。陛下より賜りし『光』と言う名。これが何を意味するのか。あなたこそ、何を勘違いされているのですか？」

宦官2「貴様はいつもそうだッ!!政治に口を挟まないから甘く見ていたものを!!」

自分達がその陛下を蔑ろにしているのによく言うわ。

劉宏「よい。曹弥に非はない。非公式ながら、彼と朕は同じ『天』を司る者。問題はない。」

宦官1「しかし陛下。周りの者の目というものがあります。そのような事はこの場では許されるものではありますまい。」

タチバナ「・・・いいでしょう。これ以上は話は進みません。この場はあなた方の言葉を聞きましょう。」

そう言って私の横で膝をついていた。

劉宏「すまぬな、曹弥。」

宦官2「陛下!!謝る必要はございませぬ!本来の在るべき姿でございます!陛下にこそ、非はあらず!」

・・・あ〜五月蝿い!!

早く終わらないかしら。

劉宏「さて、本題にはいろう。以前からの要請、ようやく受けてくれるのだな?」

タチバナ「私としては不本意ですが、最近の治安状況、日々悪くな

っています。政治には口を出さないと決めていた私ですがどうにもそんなことは言ってられない状況になりました。以前からの要請である領主の件、拝命する所存にあります。」

宦官3「貴様はぬけぬけとッ！！陛下を愚弄するか！！」

タチバナ「愚弄？事実を述べたまでなのですが・・・私は陛下を愚弄した覚えは一度としてなのですが・・・」

これは何ッ！？
覇気？殺気？怒気？
様々な『氣』が周囲に広がり、私でも恐怖を感じざるを得ない！
一刀はここでこんな氣を出されると思ってなかったようでびっくりし、秋蘭は・・・自分も少し頭にきていたみたいで、次への反応が少し遅れてしまったみたいだ。

秋蘭「タチバナ様！！戯れが過ぎますッ！！」

タチバナ「失礼を・・・最近、感情が抑えられなくなりまして。皆様、申し訳ありません。」

宦官達は皆、腰を抜かしている。
護衛兵も恐怖で、すくみ上がっている。

華琳「・・・情けない・・・」

誰にも聞こえないくらいの声で言ったつもりだが、タチバナは聞いていたみたいだ。
こちらを見て、少し微笑んでいた。

劉宏「妙才の言う通りだぞ、曹弥。戯れが過ぎる・・・まあ、この場での発言にしては些か問題があると思うぞ？」

タチバナ「重ねて申し上げます。真に申し訳ありませんでした。」

劉宏はニヤリと笑いながら、タチバナを諫めている。
あの氣の前で平然としていられる。
この人がなぜ、周りの傀儡になってしまったのか分からない。

宦官達は未だ動けずにいたが、劉宏から言葉が続く。

劉宏「話をもどすぞ？貴殿の言葉、確かに聞いた。なれば曹弥光孟徳に告げる！エン州、陳留国に赴き、その地を統治せよッ！！これは勅命である！！」

タチバナ「御意！！不肖、曹弥、陛下より賜りし命、見事に勤め上げてみせましょう！」

劉宏「以上で謁見を終了とする！皆、持ち場に戻れ！！」

劉宏の言葉から、ようやく動けるようになった者達は自分達の持ち場に帰っていった。

私達も帰ろうと移動していたが、とある人の声が聞こえた。

??「曹光様。こっちこっち。」

華琳「いつかに聞いた声ね。タチバナ、私達は帰るわよ?」

タチバナ「いえ、華琳さんは来て下さい。秋ちゃんと北郷君は戻って、今の事を告げて下さい。正式に決まりましたので用意も早いと思いますが、ね。」

秋蘭「かしこまりました。前から話はしてありますから、諸々の準備はほぼ出来ています。」

一刀「あとは、塾の方ですね。何かあっという間だったなぁ。」

華琳「塾の教えが身についてないわね。知りたいこと、学びたいことがあれば何時までも塾生、よ。あなただけ、あそこに残る?」

タチバナ「華琳さんには勝てませんね、北郷君。さて、あの子を待たせるのも悪いので、後お願いします。」

そう言って、声の聞こえる方に向かっていく。

私は見失わないように、早足でタチバナについて行く。

着いたのは、とある一室。

中に入ると、先程まで話していた劉宏と少女2人が待っていた。

拝命する件に華琳（後書き）

いつも本小説を見ていただきありがとうございますm（＿＿）m

コルトです。

前の話は好き嫌い分かれると思いますね。
ハーレム的なのは考えてませんが、それに近い状況にはなるのかな。
どう思います？

とりあえず、今回、一気に時間を巻きました。
話的に出来そうなの、馬家と董卓の赴任の話くらいですもの。
あれ？意外にやってもよかったか？

次は太子2人の決意と、劉宏の話です。
・・・オリキャラが増えるのは、モウムリデス・・・ワタシのアタマが。

劉宏の願いと2人の決意に華琳

劉宏「こうやって話をするのは、お前の屋敷で演舞を見た時以来だな。」

タチバナ「玉座ではよく会いましたが、ね。諸侯から文句が挙がっていましたよ？私ばかり優遇する、と。」

劉宏「仕方あるまい。本当の意味で信頼できるのは曹弥、お前だけなのだから。」

劉協「そうだぞ、先生。どいつもまともに話が出来ん。私欲にまみれ、傀儡皇帝を隠さぬようになっていたのじゃから。」

劉弁「そうそう。一番安心して話が出来るのは先生と華琳くらいだもん。」

タチバナ「おや？いつの間に真名を？仮にも次期皇帝の身ですよ。軽々しく真名の交換はいけませんよ？」

劉弁「いいんだもん！私より、協の方が皇帝には相応しいから問題ないもん！」

タチバナ「教え方を間違えたのでしょうか？華琳さんもダメではないですか。真名を教えていい方ではないことは分かっていたでしょう？」

華琳「『この5人の時は真名を呼んでいい』と言う縛りをつけて交換したのだから問題ないわ、多分。」

劉宏「曹弥、お前も人の事は言えんだろう。一応、私と同等の位置にいるのだろう？なれば誰彼構わず、真名を呼ばせるのも問題があろう。」

弁・協「「先生の負け～（です。）。」」

タチバナ「ん～仕方ありませんか？私の負けを宣言しましょう・・・では、劉宏様。ここに呼んだ訳は？」

いつもの雰囲気とは違い『覇気』のこもった言葉遣いで用件を聞く。

劉宏「・・・我の仕事は終わった。もう思い残す事はない、と言いたいが、この2人の事だ。」

タチバナ「もう、保ちませんか？」

劉宏「ああ・・・お前が煎じてくれる薬も最早、効かん。先日、宦官達の前で倒れてしまった。」

そうか、元々身体の悪かったのだ。
あまり公の場に出てこなかったのはそのためだったわ。
失念していた。
あまりにも元気そうだったから。

劉宏「我がもう保たぬ事を奴らは知った。次はこの子達を傀儡にせ

んと動き出している。お前を領主に任命すること。これだけは我の手で成したかった・・・」

タチバナ「薬の減り方が早いこと、濃度を上げても効果がないこと・・・すまない、灰霊。分かっていたのに何の手もうてなかった。」

タチバナが本当に悔しそうに頭を下げている。
妹の事も聞いていたが自分の無力さを噛みしめているのだろう。

劉宏「曹弥・・・いや、立花。お前はよくやってくれた。お前がいなければ、我は世界を知らず、ただ奴らの傀儡として何も知らず死んでいただろう。これも歴史の・・・」

一瞬にして劉宏の側により言葉を遮った。

タチバナ「弱気になりすぎているぞ、灰霊。まだ、こんな所で死ぬ気になるな。俺の目的の結果を見るのだろう？」

劉宏「そうだったな・・・しかし、本来の口調が戻っているぞ？お前こそ弱気になっているのではないか？」

２人でニヤリと笑いあっている。

何？劉宏は何を言おうとしたの？

歴史の・・・？

タチバナの言っている目的とどう関係があるの？

私は彼からその目的について何も聞いていない。

興味はあった。

だが、彼からその言葉を聞きたいから、ずっと聞かないでいた。

華琳「・・・タチバナ。目的って何？」

遂に聞いてしまった。

私を信頼していると彼は言う。

ならば、その目的とやらも話してくれてもいいと思う。

でも、催促するみたいでイヤだったから今まで聞かなかった。

タチバナ「・・・今、話さないといけないか？」

華琳「私を信頼しているのでしょう？いえ、違うわね。私『も』あなたを信頼している。今の言葉で少し安心したわ。話すつもりはあるとわかったから。」

タチバナ「俺の・・・いえ、私の下に来たのがあなたで本当によかった、といつも思います。今はその時ではないので話しません・・・ちゃんと話しますよ？」

華琳「今はそれで十分・・・で、話がそれたわね。劉宏、２人をどうしたいの？」

今まで静かだった太子は、自分達の事とわかるとビクッと身体が動く。

劉宏「・・・良き理解者だな。我にとってのお前みたいな者、か。まあ、いい。話と言うのはこの子達を匿っ『お断りします！』て、言うと思ったよ。」

劉弁「えーーッ！！何で！！ここは『わかりました。あなたの最後の命、全うしましょう』とか言うところじゃないの！？」

劉協「親を勝手に殺すな、弁！！理由は分かりますが、どうか父上の話を最後まで聞いて下さい、先生。」

タチバナ「そうですね。劉協様の言う通り『弁は～！？』・・・劉弁様は話を聞いて下さい。劉宏様、続きを。」

劉宏「あ、ああ。先にも言ったが私にはもう後がない。２人をこの腐敗した場所に置いておきたくない。妻達や、何進には悪いが彼女らも最早信じられん・・・親バカで申し訳ないが曹弥、お前しか信じられんのだ。２人を助けてほしい。」

今の劉宏は皇帝ではなく、１人の父親になっているわね。
でも、ちょっと甘いのじゃないかしら？

華琳「自分には力がない。周りは信じられない。だから、タチバナにお願いする？少し考えが甘いのではないかしら？」

劉宏「王としての責務を放棄させようとしている事は重々承知。だが、王に『された』のでは責務は継げない！自分が王に『なる』でなければ王ではない！！今のままでは、責任のない王になる・・・私と同じように。それが2人の運命か？それで今の世を変えれるか？」

華琳「言いたい事は解るわ。だけど・・・」

タチバナが私の言葉を遮った。
どちらの言い分も分かっている、そんな眼をしている。

タチバナ「2人はそれでいいのですか？自分達の過去をすべて捨て、先の見えない荒野に出ることが。自分達の祖先が築いた物を自分達は壊すという重さを分かっていますか？」

劉協「父上は病気の身体を酷使して、私たちの未来の為今まで尽力してくれました。私も微力ながらこの国も未来のため、自分達の未来のため、出来ることをしてきたつもりです。」

劉弁「だけどね、ダメだったの。まだ、幼いからとか養生して下さいとか言って、この国のために何かしようとするわたし達を除け者にするの。悔しいよ？祖先の築いた物が壊されるのは。それをさせているわたしの無力さが。」

劉宏「2人は凄いよ。我よりこの国を見ている・・・お前の教え子である我はこんな体たらくだったが、この子達は違う！自分達が何をするべきか、その先の責任をちゃんと見据えている！！頼む！！お前の目的に邪魔なら切り捨てていい！！我の本当の最後の願いだ！！！！」

私の思っている以上に考えているのね。
タチバナの教え子というのは相当なものなのね。
普段はまさに子供な劉弁でさえ、この国を考えて自分から行動していた。
この子達が次の皇帝なら、と考えたがそんなに甘くない。
最早、漢王朝は老いたる龍なのだ。
龍とて老いれば先は、ない。
それを分かっているからこその言葉。

・・・甘いのは私ね。
こんな子達をここで失うの惜しいと思っている。

タチバナ「突然、太子がいなくなれば朝廷は大混乱ですよ？まず、私が疑われます。」

劉協「先生が言われていた様に、昔から仮面を付けて過ごしていました。母上の前でも、どんなときでも。」

劉弁「先生と華琳と会うときだけだよ～？仮面をはずしているのは。」

華琳「そういえば、いつ会っても仮面を付けていたわね。まさか、こんな時のため？」

タチバナ「可愛い素顔を他の人に見せないようにと言う事しか言っていませんでしたが、本来はそうです。この意味をちゃんと理解できていなければ捨て置くつもりでしたが、ね」

劉宏「影は昔から用意してある。このような理由で使う事になるとは思ってもいなかったが・・・」

華琳「既に準備はできている、と。ならこの問答はあまり意味がなかったわね。」

タチバナ「いえ、先の華琳さんの言う通り、考えが甘い事には変わりありません。自分達の覚悟をもう一度見直す必要がありました・・・ですが、もう大丈夫です。」

劉宏「ありがとう、曹弥。我は肩の荷が降りた気分だ。」

タチバナ「まだ終わりではありませんよ？これからが大切なのですから。」

劉宏「そうだな・・・だが、我が死ねばそこで漢も終わりだという事は決まったな。」

華琳「そうね。さてどうするの？すぐ出るの？」

劉弁「ちょっと用意するから数日待ってね～。先生も陳留行くの数日かかるでしょ？」

華琳「そうね。塾の方も後3日はあるし、引っ越しの用意もある程度やっているとはいえ、もう数日かかるだろうし・・・そういえば、許昌ではなく陳留なのね。当初と違うわね。」

劉宏「そこは先にあった劉表と孫堅の問題がある。曹弥がどちらにも加担しなかったのはよかったが、一応気にする者がいてな。冀州や并州には袁紹や董卓が居ろう？彼女らはお前が近くに居た方がよかろうと思ってな。」

まあ色々考える帝ですこと。

確かに、先の孫堅の問題は気にはなっていた。

劉表に加担すれば孫家は黙っておらず、孫堅に加担すれば今回の州牧の件はなかった事になっていただろう。

孫家の依頼で名が邪魔をしたように、今回は『曹弥孟徳』がどちらに加担することも許されなかった。

劉表からはなかったが、孫家からは加勢の要請が来ていた。

以前、甘寧との交渉に一緒にきた孫権が使者としてやってきていた。

タチバナは、この問題は朝廷への反乱として捉える事ができてしまうこと、それにより自分の名が邪魔をして動けないことを彼女に伝えていた。

孫権は感情としては納得していなかったが、頭では理解したらしく、そのまま帰っていたのだ。

結果は、先の通り。

孫家は敗れ、統治していた地域は別の者が管理することになり、劉表は朝廷への反乱ではないことを示すため謹慎処分を受けた。

孫家からはだいぶ恨まれているでしょうね。

劉表は彼が出てこなかったことにホッとしているかもね。

タチバナ「最終的に統治を任されたのですからどこでも同じです。次のためにそこで力をつけます。」

華琳「あなたにはしっかり仕事して貰わないとね。」

劉協「先生、これから頼みます。」

劉弁「頼むぞ～。」

タチバナ「これからのことは改めて考えます。とりあえず今日の所は帰ります・・・皆が待っていますから。」

劉宏「そうか・・・次は何時会えるか分からんな。また会えるといいが、な。」

タチバナ「次に会うときは、目的の第一段階が済むときですよ。」

劉宏「そうだな。なら、またな、と言っておこう。」

タチバナ「数日後に2人を迎えにきます。それまでに用意を終わらせておいてくださいね。」

劉宏「明日来ても問題ないようにしておくよ。」

タチバナ「では、また会おう、灰霊！」

劉宏「ああ！」

３人に挨拶をし、その場を去っていった。
帰り際に彼は、とても小さな声で言葉を出した。

タチバナ「また、か・・・灰霊、私はあなたを救えなかったよ・・・
それでも信じてくれるのか・・・歴史の変革の為に・・・」
華琳「風が気持ちいいわね。たまにはゆっくり帰りましょうか？」

私は聞こえない振りをして彼の前を歩く。

あんなに自信のない彼を見たくなかったから
彼を助けたいのに助けれない自分に腹がたったから
ちゃんと話してよ？
歴史に関わる、あなたの目的を

数日後、赴任地に向かう曹家の面々の中に、２人の少女の姿があっ

た。

劉宏の願いと2人の決意に華琳（後書き）

書きたいことがうまく纏まらなかった、本日の話。

コルトです。

タチバナの言う『目的』少し出しました。
本来、書く気はなかったのですが何か書く流れに・・・

これにより少し修正を入れないといけませんね。

実際に書き出すと、想定してなかった事があったり、予定は未定になったり色々ありますね。

気になる点があれば、指摘してほしいですm（＿＿）m

次に、引っ越しのゴタゴタを書いた後『領主・黄巾の乱』に移りたいと思います。

それでは。

引っ越し準備は大変だと思う華琳さん

劉宏との謁見を終え、次の日から引っ越しの準備に本格的に乗り出した。

元々、近い内に領主になる事を伝えていたため大体の片付けは済んでいる。

・・・だが、問題が発生した。

華琳「研究室片づけてないですって？」

タチバナ「え？え～とです、ね？あっ、止めて下さい！鎌の先でつつかれるのは冗談じゃ済みませんからッ！！」

華琳「冗談じゃ済まないのはこちらよ！？あなた、自分が一番、このような状況になるの知っていて未だに何もしていないってどういう事よ！！」

使用人１「曹操様、もっと言ってあげて下さい！」

使用人２「そうですよ！曹弥様、私達が言っても聞いてくれないんですから！！」

・・・はあ。

使用人からも文句を言われるなんて。

今まで何をしていたのよ？

秋蘭「まあ、ここの部屋はずっと使っているからな。本家の部屋は一切使わず、ここだけは昔からあるのだから。」

華琳「本家の片付けは終わっているの？」

一刀「終わらせたよ。あっちは持って行くものほとんどないし・・・こっちの屋敷の方が本家っぽいよ？」

秋蘭「タチバナ様がこの屋敷にばかりいるのだから仕方あるまい？さて、タチバナ様。あとはここだけみたいですよ？歌の部屋も先ほど片づけましたから。」

歌の部屋は毛でいっぱいだった。

立ち入り禁止の理由は、毛で屋敷が大変な事になるからであったのだ。

確かにあの辺一体は、毛の布団がいくつも出来るぐらいの状態になっている・・・今も春蘭と数人の使用人が片付けをしている。

華琳「さあ、もうここには誰もいなくなるのだから、ここも片付けるわよ？意識不明者を大量に作らないためにもちゃんとしなさいよ？」

タチバナ「・・・わかりました。でしたら、今、洛陽に名医と言われる『華陀』が居ますから、ここに呼んで下さい。私は真面目に整理をしますからその間に呼んで下さい。」

この人外は・・・
まあ、いいわ。
片付けると言ったのだし、それを信じましょう。
それにしても『華陀』か・・・

華琳「一刀！呼んできて！」

一刀「えッ！？華陀ってどんな人よ？」

タチバナ「『五斗米道の人～』って呼んでたら出てきますよ？華琳さん、知ってるんじゃないですか？」

華琳「・・・知らないわよ、そんな男。」

タチバナ「なぜ、華琳さんは華陀が男だと？ここで名医の『華陀』と言えば誰でも女性を想像するのに。」

秋蘭「私も初めて知った。今は男が華陀になっているのですね。」

しまった！！
私の世界の華陀は男だったから、こちらの世界の華陀も男と勘違いしていた！
・・・それにしても『名』は世襲なのね、ここの華陀は。

タチバナ「と言うことで華琳さん。いってらっしゃい～。」

華琳「華陀呼んだら、あなたの秘密の部屋を大掃除してあげるから

ねッ！！」

仕方なく、私は一刀と共に洛陽に赴いた。
・・・歌に乗れば早く着くしね。

一刀「華陀って人、どこにいるんだろうね。」
華琳「・・・宿でもあたりましょうか。」

どこにいるかくらい教えてくれても良かったと思うけれど・・・

一刀「あっ、そういえば、五斗米道の人って言えば出てくるって言ってたっけ。」
華琳「そんなことも言ってたわね。呼んでみたら？少し離れて見ているから。」
一刀「何で離れるの？まあ、いいか。『五斗米道の人ー、どこですかー！！』」

本当にやったのね。
一刀はかなり感覚のズレている男だし、恥ずかしくはないのでしょう。

こんなので出て・・・何か聞こえるわね。
何やら声がするが、一応その方向へ顔を向けてみる。
燃えているような赤い髪、暑苦しそうな元気のよさ、ここの『華陀』も私の知っているような人物なのね。

一刀「元気いいなぁ。あの、あなたが『ゴットヴェイドォーだッ！！』えっ？何て？」
華陀？「五斗米道ではないッ！！ゴットヴェイドォーなんだッ！！」

この世界でも同じ事を言うのね。
一刀から離れていてよかった。
一刀は少し考えながら次の言葉を放った。

一刀「カッコイイ・・・すまない！！ゴットヴェイドォーなんだね！！」

えっ？一回聞いただけで今の言えるの？

華陀？「君で2人目だ！一回でその言葉を言えたのは！」

2人はニヤリと笑うと、ガッチリ握手をしていた。

・・・もう何なのかしら？

華琳「で、あなたは華陀で間違いないの？」

華陀？「そうだ。俺は華陀！ゴットヴェイドォーの継承者だ！！俺に何か用なのか？」

一刀「曹弥さんから頼まれて、君を呼びに来たんだ。俺は、北郷一刀。よろしく！」

華陀「我が友、曹弥の遣いか！俺を呼ぶと言うことは出来たんだな！？」

華琳「何の事か分からないけれど、あなたがいないと部屋を片付けられないみたいなのよ。」

華陀「ん？片付けるのか？必要ないだろう。」

華琳「・・・どういう事よ？」

華陀「あの部屋は着脱式だから、あのまま持って運べるだろう？曹弥ならすんなり持っていけるしな。ああ、部屋に人を入れるのか・・・計画に支障はないのか？」

一刀「計画？ああ、曹弥さんがたまに言う目的のことか。華陀は知っているの？」

華陀「計画を知っているのは、灰霊・・・霊帝劉宏、俺、先代華陀、歌、妹『曹操』だな。その辺は彼に聞いた方がいい。すぐとは言わ

ないが君達には言うはずだから。」

華陀も彼の目的を知っているのか。
しかし、今ので彼の目的を知っているのは曹家にはいない事が分かったわね。
・・・歌はちょっと違うからよしとしよう。

華陀とのやりとりで呼んだ理由が違うことがわかり、とりあえず、屋敷に戻ることにした。

・・・タチバナほどではないが、この華陀も瞬間移動が出来るみたいだ。
一刀はそれを見ながら『俺もあれくらい出来るようになりたいな』とか言っていた。
一刀・・・人間辞めたいの？

華陀「久しいな！曹弥！ようやく、薬学書出来たのか！？」

タチバナ「あなたは何時でも元気ですね。久しぶりです。もうずいぶん前から出来ていますよ？先代から聞いてなかったのですか？」

華陀「何だとッ！！くッ！！あの人は俺に後を継がせたと思えばすぐ何処かへ行ってしまってな。今は行方知れずなんだ・・・」

タチバナ「あ～あの人らしいといえばそうですね・・・とりあえず

中に入りますか。皆が入れるように術の解除を。」

華陀「そうだな！・・・部屋の片付けをするのか？」

華琳「私達が入れるようになったらすぐやるからね！！」

タチバナ「ちゃんと説明していなかったのですが『部屋の着脱式は聞いてるわ！』そうですか。正直、片付けする必要ないですよ？」

そんな事を言いながら、華陀と共に部屋に掛かっている術を解いていく。

タチバナ「何故なら・・・」

術の解除が終わったようで、タチバナは部屋へ入るように促す。

タチバナ「華琳さんと北郷君が、華陀を呼んでいる内に終わらせましたから。」

正直、発明屋の部屋は散らかりっぱなしの印象があったのだが・・・真桜の実験室がそうだったから。

しかし、今見ている部屋はそんなことはなかった。

机の上は、謎の工具があるが、本棚は綺麗に整理されており、床もまだ使われていないような白で覆われており、私達が掃除をして片

付ける場所は一つとしてなかった。

華琳「・・・ちゃんと出来るなら最初からそう言いなさいよ？」

タチバナ「華琳さんの怒る姿がみたかっ、イタイイタイ、鎌の頭で叩かないで下さい！！」

秋蘭「それにしても、見たこともない物や植物が多々ありますね・・・これは何ですか？」

一刀「・・・これは！」

華陀「曹弥！！薬学書はどこにあるッ！？」

タチバナ「秋、ちゃんが見、ている物は、試作の、農具です。イタイ・・・華陀、あなたの、さがしも、のは、右のほんだ、なにあります・・・カリンサン、ゴメンナサイ、ソロソロユルシテクダサイ・・・」

華琳「まだ、叩き足りないけれど、話が進まないからここで辞めておきましょう。」

タチバナ「許して頂きアリガトウゴザイマス・・・北郷君、何か気になるものでも？」

一刀が一つの本を一心不乱に読んでいる。
横から見てみるが何が書いてあるかさっぱりだ。
一応、所々、私の知る文字らしきものは見える。

一刀「・・・曹弥さん。この本、どこで手に入れたんですか？」

タチバナ「それは、私が塾を始めた起源でもあります。それを読めるようになったのはつい最近なのですよ。」

一刀「俺の世界の本ですよ・・・しかも、三國志の事が書いてある・・・」

余程の事が書いてあったのだろう。
彼の顔は真っ青になっている。

タチバナ「読んで勉強しますか？後、それが解読出来るなら少しお願いしたいですね。少し読めるようになりましたがまだまだなので、ね。」

一刀「はい。俺に読ませて下さい・・・しかし、黄・・の乱・・・先が・・」

自分の世界に入り込んだわね。
だんだん、声が小さくなり本を読むのに没頭しだした。
かすかに聞こえたのは『自分の世界の歴史と違う』と言うものだった。
タチバナはその姿を楽しそうに見るだけで何も言わない。

・・・もしかして、これを見せたかったの？

わかりやすいように机の上にあったのだし。

華陀「曹弥！！この、医術書はなんだ！？新しい鍼治療の事が書いてあるぞ！！これ、貰えないか？」

秋蘭「タチバナ様。この部隊の編成方法はタチバナ様が考えたのですか？今は無理ですがいずれやってみたいものです。」

春蘭「たちばなさま～！！こんな所に居たのですか？歌の毛玉何とかなりませんか！？増殖しているかの如く、増え続けるのですが・・・」

孫堅「ああ、いたいた、タチバナ。太史慈が探しているぞ？何か日程の変更が・・・なんか面白そうな所だな！おお！！これ、手か？これ何に使うんだー？」

だんだん、人が集まりだして収拾がつかなくなってきたわね。
この研究室の引っ越し準備、どうしようかしら？
本当に、タチバナ1人で持ち運びできるのかしら？
来る人、来る人、目的を忘れてタチバナの研究室を物色していく。
立ち入り禁止にしていたのにいいのかしら？

もうどうでもいいやと思ってしまっている自分がいた。

当然、この日の引っ越し準備は一時中断となり、予定を大きく変更する事になった。

こんなので領主として国を統治できるのかしら？

華琳がこの世界に来て5年が経過

引っ越し準備は大変だと思う華琳さん（後書き）

かなり駆け足で書いたので話の結びが変ですね。

コルトです。

これをもって第1部を終了とします。
もうちょっとまとめはしっかりしないといけないと思いましたが・・・
・

まあ、いいか。

次から、第2部として『領主・黄巾の乱』に入っていきます。
ようやく、原作に持ってこれた？
でも、原作より大幅に違ってきてるよね、色々。

ちょっと構想も変更しながら作っていきます。
数日、かかると思います。

その間に幕間をいれるつもりですが。
と言っても人物紹介？みたいなものになると思いますが。

人物紹介！

本小説を読んでいただきありがとうございます。
コルトです。

前回の明言通り、人物紹介になります。

まあ、おさらいみたいなもので、キャラの確認も兼ねて見て下さいm（＿＿）m

人物紹介

夏候惇（春蘭）

姓は夏候、名は惇、字は元譲、真名は春蘭

武器　大剣（タチバナ手製・よく斬れて丈夫）

華琳さんの立ち位置にいるタチバナを尊敬し、想いを寄せている少女。
原作同様、愛すべきおバカさん。
塾には通っていたが、知の方はあまり学ばなかったようだ。
その分、武に関しては既に相当なもので塾生のトップ（華雄も含め）。

元々は捨て子で、人買いに連れられているところをタチバナと妹『曹操』に助けられる。
そのため、妹である秋蘭を溺愛している。
夏候氏は、子供がいなかったため彼女達を養子として迎えた。

夏候淵（秋蘭）

姓は夏候、名は淵、字は妙才、真名は秋蘭

武器　蒼弓（タチバナ手製・とにかく丈夫）

春蘭同様、タチバナの部下として雑務をこなす才女。
タチバナを尊敬はしているが好意を寄せているかは不明。
華琳が補佐としてタチバナに就いて以来、仕事の量が減ったことを喜んでいる。

精神鍛練として、弓術を習う。
実力は、黄忠、黄蓋に負けないレベルに、すでにいる。

姉同様、捨て子であったが助けられる。
救ってもらった恩に報いるため、タチバナの雑務を健気に日々こなす。

歌（トラ）

白い毛並みの普通の虎より二周りほど大きな虎？
タチバナ達と夏候姉妹の仲を結びつけた切っ掛けを作った存在。
元々は、群れから追い出され空腹だったところを夏候姉妹を見つけ襲いかかっただけなのだが・・・
体が大きいため乗り物として華琳や一刀が使っている。
背中には信頼した者しか乗せないが、塾生はほぼ背中に乗せる（月のみ何故か乗せない）
人の言葉を理解している節がある。
タチバナとよく昼寝をしている。

北郷一刀

姓は北郷、名は一刀、真名はないが一刀がそれにあたる

武器　ランス

原作主人公。
本来、黄巾の乱前に外史に降り立つのだが、ここではそれより前に

飛んできた。
タチバナの待ち人として重要な位置にいるのだが、本人は自覚なし。
タチバナや華琳の支援があったとしても、短期間で将としての能力を開花させた、ある意味天才。
タチバナを恩人と言うより友達として見ており、よく話をしている。
華琳さんのストレス発散対象として、日々、理不尽な攻撃を受ける。

黄蓋（祭）

姓は黄、名は蓋、字は公覆、真名は祭

孫堅の代から仕える宿将。
性格は天真爛漫で酒好きであるが、周りに気を配れる為、信頼は厚い。
夏候姉妹よりタチバナの事を知っている。
何かと嫁を貰えと言うが、誰を貰えとは明言しない。
孫堅の事についてタチバナが何か知っていると思っており、孫策や周瑜をいさめている。

甘寧（思春）

姓を甘、名を寧、字は興覇、真名は思春

錦帆賊の頭領として、先代、太史慈より『甘寧』を襲名した。
先々代の孫であり、錦帆賊内ではアイドル的存在だった。

孫権と出会い、自分の生涯尽くすべき主君と仰いだが、孫権自身は『友』として共に在りたいと願った。

タチバナには様々な想いを持っている。
孫堅の件で、タチバナの評価は下がることはなく、むしろ上がっており、裏で孫堅を救っているのではないかと考えている。

孫権（蓮華）

姓は孫、名は権、字は仲謀、真名は蓮華

甘寧との交渉時にタチバナと共に行った少女。

思春との出会いを作り、自分自身の考えでと言う切っ掛けを与えたタチバナに恋心を抱いている。

実は、孫堅への支援要請は彼女の考えから出ており、何としても来

てほしかったと言う思いがあった。
恨んではいないが、何故何もしなかったかの真意を聞いてみたいとは考えているようだ。

とりあえず、ここでいったん終わり。

荀イクや三羽烏、オリキャラに関してはまた次回にでも書こうと思います。

ご意見、ご感想お待ちしますm（＿＿）m

人物紹介！（後書き）

コルトです。

原作に出ているキャラクターの性格なんかは基本的に変わらないです。

うまく再現できるかは別として・・・

能力については上下があると思っていて下さい。

ではまた。

領主と華琳

一刀「曹弥さん？さっき、人事部の方に歩いて行ったのは見たけど？」

秋蘭「タチバナ様なら、任官者の名簿を持って練兵所の方に行ったぞ？」

春蘭「タチバナ様は執務室に帰ったぞ！？華琳に怒られるからここに来たのは内緒と言われたがな！！」

・・・領主として、もう少し考えて動いてほしいわね。
いつものことながら、言っても無駄という事も知りながらも思いは募る。

劉宏より統治の任を貰い、数日前から領主として動き出した訳だが『あれ』は何をしているのかしら？

私達は今、エン州の牧として陳留におり政を進めている。
赴任と同時に税政状況の洗い出しと人事関係の調査に乗り出し、不正を働いていた役人を一掃し、政務の清浄化を図った。

朝廷から近かった事もあるのだろうが、ほとんどの役人が賄賂や民から搾取を繰り返し私腹を肥やしていた。
洛陽にいたころから、依頼と称して政務を回し続け、挙げ句、自分達は民の税を無駄に使用していた事が実際に解るとやりきれなくな

るわ。
タチバナは分かっていながら、色々な依頼を受けてきたのかと思ったが、その心意は解らなかった。

とりあえず、今、言えることはタチバナ・・・お願いだから処理した資料の片付け手伝ってッ！！

不正役人を一掃して政務の清浄化が出来たのはいいのだが、半分近くの役人が処罰されているため別の意味で政務に支障が出ていた。
タチバナの処理能力のお陰で、一時的な混乱にあったがすでにそれは解消されている。

が、彼の処理が速すぎて今度はそれを各部署に送ったり、仕分けの作業が遅れている状況にあった。

華琳「あれがちゃんと処理した書簡を分ければこんな事にはならないのよ・・・」

私がやっても一日では終わりそうもない量を、ポンポンやっていくが書簡の種類が纏まっていないので、それを部門事に分けて送らないといけない。

せっかく彼が、さっさと処理した物を滞らせたら意味がない！
彼には悪いがもう少し仕事をしてもらう！

能力があるのだから仕方ないわよね！？

彼の執務室に着いた。

走り回って結局ここに帰ってくるのだから、今までの苦労はなんだったのよ・・・この時間を仕分けの作業に使いたかった・・・

扉を開くと、タチバナの他に2人の少女が和気藹々と話をしていた。

タチバナ「おや？華琳さん、どこに行ってたんですか？探していたんですよ？」

華琳「・・・私もあなたを探していたのよ？さあ！！この天井に届いている山の書簡をかたづ・け・・？あれ、ない？」

タチバナ「ああ、さっき2人に手伝ってもらって持って行きましたよ？ちゃんと分けていたのに華琳さん、ばらしてしまうのですから、また分けるの大変だったのですよ。」

華琳「いや、部署ごとに分けなさいよ・・・あれじゃあ、持って行くの大変じゃない！」

曹丕「全部纏めて持って行く方が大変だよ～？あれは元々、一日ごとの仕事として分けてたんだよ？せんせ・・・兄上は処理が速いから3日分をさっさと終わらせたんだよ～。」

曹植「華琳の言いたい事は解るのじゃがな、人が居らんのじゃから仕事は効率よくまわさんと、な。忙殺されて、頭が回らんかったのじゃろう？」

華琳「弁と協の言葉をあなたから聞いていれば、私は無駄な労力使わなかったわよ？タチバナ・・・」

タチバナ「華琳さんなら言わなくても・・・イタイデス！スミマセン、チャント説明しなかったワタシが悪いのです・・・あと、ダメですよ？劉弁と劉協はここにはいません。彼女達は私のむす・・・イタイ！２人とも止めて！！・・・義妹なのですから。」

はあ、私の苦労は水の泡だが仕事が減ったのは助かる。
後この２人も彼の補佐になったから私にかかる負担も減ったのだった。

言うまでもなく、２人は『霊帝の娘、劉弁と劉協』だ。
彼女達は劉弁は曹丕、子桓、真名を白桜に、劉協は曹植、子建、真名を黒陽と名を変え、タチバナの娘・・・ではなく義理の妹として日々を過ごしている。
名や字はタチバナが考えて、真名は依然と変わらないが、私とタチバナにしか伝えていない。
２人は頑なに『妹なの！！』と言って聞かなかった事から、タチバナが折れ、今の状態になっている。

・・・まあ、いいんだけれどね。
一刀は『後継者争い勃発か！？』とか言っていたが、元々そういう立場にいたから。

ついでに、太史慈と孫堅も名を変えている。
それについてはまた後日にしよう。

華琳「それで？私をさがしていた理由は？これのために探していたのではないのでしょう。」

気持ちを切り替えるために私を探した理由を聞いてみた。

タチバナ「区画の整理と治安維持を北郷君と華琳さんに頼みたいのです。北郷君の知識は面白いですし、華琳さんは知識が深いので２人なら私より、いい物を作ってくれるかな～と。」

華琳「あなたの知識には勝てないわよ？まあ、いいわ。仕事もだいぶ減ったことが分かったし、それなら引き受けましょう？一刀は聞いてるの？」

タチバナ「さっき会ったときに言いましたから、後でここに来ると思います。私は軍関係の編成をしますので、また出ます・・・白桜はついてきて下さい。黒陽はさっきの役人と任官者の名簿に印をつけました。その人達の調査を・・・間違いなく黒なので。」

白桜「わ～い！兄上と一緒だ～！」

黒陽「仕方ないの。姉上じゃ、調査は無理じゃし。」

白桜「頭使うの苦手♪でも必要ならやるよ？」

黒陽「同じように学んできているのに・・・」

タチバナ「得手不得手ありますから。では、よろしくお願いします。華琳さんは夕食後、研究室に来て下さい。」

そう言って、いつものようにさっさと部屋から出ていく。
白桜は慌ててついて行き、溜息をつきながら黒陽も自分の仕事をしにいった。

タチバナと一緒にいたため癖がうつり、お茶を飲みながら一刀を待とうと思っていた。

領主と華琳（後書き）

コルトです。

何を書いてるかわかりません！！
頭がパンクしてます！
少しずつ書いて整理しよう・・・

片割れと北郷と華琳

しばらく待っていると一刀が執務室にやってきた。

一刀「あれ？曹弥さん、いないの？区画整理と治安維持でお願いがあるとか言ってたけど・・・」

華琳「私とあなたに任せるらしいわ。2人ならいいもの作ってくれそうと言ってたわよ。」

一刀「あ～昨日の話からそうしたのか。まあ、いいか。じゃあ、ちょっと街を見て回ろうよ？」

華琳「そうね、では行きましょうか。」

私は手早く用意をして部屋から出る。
一刀もタチバナ手製の『らんす』と言ったかしら？槍みたいな物を持って私に続いてくる。

税率を変えたからと言ってすぐにそれが反映される訳ではない。
まあ、来た当初よりは人通りもあるわね。
商人も歩いているし、しばらくすれば活気も出てくるだろう。

華琳「区画の整理より先に、治安の向上をしないといけないわね。」

一刀「その辺りはすでに行ってるよ？徐晃さんがそういうの得意らしいから。」

徐晃とは、太史慈の新しい名前だ。
字を公明と言い、これもタチバナがつけた名だ。
真名は元々ないため、元の字の『子義』を真名としている。
孫堅を助けるときに、顔に大火傷を負い誰だか分からないくらいになっていたが、タチバナから仮面と名を貰い改めて忠誠を誓っている。

火傷により、声がうまく出なくなり少し無口になっている。

華琳「あれがやったらその辺の暴漢と変わりない気がするわね。」

一刀「それは言い過ぎ・・・とも言えないか。体格いいし、仮面と声のお陰で恐ろしく怖い人になってるしね。でも、実際に治安良くなってるよ？曹弥さんと同じように赴任してすぐ、悪党の巣窟潰したし。」

華琳「あれはあからさま過ぎたわ。ここの役人は無能だと露呈しているようなものだったじゃない・・・あれのお陰で曹弥孟徳は『知』だけではない、というのは民にも役人にも分かったのでしょうけどね。」

一刀「『曹孟徳』の名は一気に有名になったね。」

華琳「顔が知られてないだけよ。名は彼の妹からなのだから。」

一刀「そういえば、何で『曹弥光』じゃなくて『曹孟徳』で名を出しているんだろう？」

華琳「『孟徳』と言う字は曹家を継ぐときに与えられるものだそうよ？『弥光』だけでは弱いと思ったんじゃない？」

一刀「う～ん・・・何か違うような・・・まあいいや！さっさと治安状況の確認と、区画整理のために情報を手に入れよう？」

そう言って一刀は前を歩き出す。

・・・『曹孟徳』の名を大々的に出すのは『曹弥光』の名を世から消し去るためだと思う。

今の状態だと『曹』と言えば『弥光』がつくだろう。

それを『孟徳』にしたいのだと考える。

わざわざそんなことをする理由はわからないが、私の名前を変えさせず、そのまま呼ばせている所に繋がってくるのではないかと思う。

先の通り、太史慈も劉協、劉弁も理由はあったにせよ名前を変えさせている。

私の名前は彼の妹と同じにも関わらず、そのままにしている。

何か訳があるのだろう。

彼の目的を早く聞いてみたいと思っていた。

しばらく、考え事をしながら歩いていると歌がやってきて、私の服を引っ張ってきた。

華琳「ちょっと、歌!?この服は気に入ってるのだから引っ張らないでちょうだい!!」

一刀「ああ、それ曹弥さんが作ってくれたや、ぐはッ!!!!!」

右手で思いっ切り一刀を殴りとばした。

華琳「わかったからッ!!何かあったのね?行きましょう!」

一刀をほったらかしにして城へと急いだ・・・

北郷一刀

一刀「イってーーッ!!華琳ってあんなに力強かったっけ?」

ちょっと疑問に思ったが、曹弥さんの近くにいるんだから強くて当

たり前か。

一刀「にしてもなぁ・・・華琳も曹弥さんに惚れてるよねぇ？こんな事、目の前で言ったら殺されちゃうよ・・・」

とか何とか、独り言を呟く。
歌に華琳連れてかれたから、とりあえず1人で見回りしよう。

一刀「あれ？これ何だろう？」

？？「にいちゃん、目の付け所が違うなぁ。それなぁ、ウチが発明した、全自動カゴ編み装置や！！」

一刀「へー面白いね！！造るの大変だったんじゃない？」

？？「いや～大変だったけどな、ちょっと前にこういうの教えてくれたに～ちゃんおってな。作成期間ずっと早くなってん！」

一刀「俺も絡繰り好きだけど、色んな所にいるんだな～絡繰り技師って。」

？？「まあ、実際に動かしてみる方がええやろ？こっちの取っ手を持って、にいちゃん？」

言われるまま、絡繰りの取っ手を回すとカゴが出来てくる。

カゴの側面が出来てきた！！

一刀「おお、すげー！！・・・でも、底とかどうすんの？」

？？「それが問題なんよ・・・その辺は手動でな、やっぱり『全自動』って名前付いてるんやからかっこつかんのよ・・・」

一刀「う～ん、強度は？」

？？「それも問題なんよ。絡繰り教えてくれたに～ちゃんとこ聞こう思ってここ来る前に行ったんやけどな、そこに居らんかったしなぁ・・・」

一刀「ふ～ん、どっか引っ越したのかなあ？」

？？「多分な。それなりに地位の高い人だったから、良いとこに行ったんやろうなあ～。」

一刀「そっか～、残念だね。俺の上司も絡繰り好きだから聞きに言ってもいいかな～とか思ったけどあの人忙しいから・・・」

？？「なら、しゃ～ないな。また今度、暇な時に教えて～な？」

一刀「わかった。俺は北郷一刀！よろしく！」

？？「ウチは李典・・・話のついでやけど、カゴ買わん？」

一刀「ああ、買ってくよ？ちょうど欲しかったし・・・ん～李典か、どっかで聞いたような。」

李典「そうなん？まあええわ。おおきにな、にいちゃん。ウチは3つ離れた村に住んどるんよ。その、上司さんが暇だったら村に来てもらえるよう言うてみて。」

一刀「わかった。今度聞いてみるよ。またな、李典！」

そう言って俺は仕事に戻った。
ん～李典って曹弥さんの塾で工学を学んだって子だったような？
華琳に聞いてみるか。

華琳

華琳「で？タチバナ。申し開きはあるかしら？」

タチバナ「いえ！！やりすぎました！！加減を間違えました、ゆるし、イタイイタイ！！刺さってます！！刺さってます！！！！」
華琳「どう加減を間違えれば、部隊を全滅できるのかしら？」

白桜「一刀君と同じ、訓練させちゃったの。みんな、新兵なのにね！」

編成していたはずの部隊を、タチバナが何を思ったのか、一刀と同

じ訓練をさせたのだ。
一刀の時は付きっきりで修行させたからできたわけで、普通の人ならまず、死んでもおかしくないのよ？

一応、数刻で皆は目を覚まし、軍を辞めるという者も1人もいなかった。
・・・タチバナと白桜、2人だけにしてはダメね・・・
タチバナの奇行を止める者がいないわ。

片割れと北郷と華琳（後書き）

意外に投稿に時間がかかった。

コルトです。

ようやく原作の辺りにいるかなー？とか思ってたり。

そろそろ、あの子達も登場か？

次は、日常を書くつもり。

予定は未定。

資金と真字と華琳

タチバナの補佐についてから数年が経っているが解らないことが多くある。
タチバナや彼の目的については言わずもだが、曹家の方で気になっている事がある。

『資金』はどこから来ているのだろう？

秋蘭「華琳も疑問を持っていたか・・・私もな、ずっと疑問になってはいたのだ。いつもはぐらかされて終わっていたのだが。」

華琳「秋蘭でも知らないの？塾で儲けていたようには見えなかったしね。」

秋蘭「塾生からはお金とかそう言うのは取っていない。カンパという事で、食料や物資の援助を貰ってはいるが、こちらから資金の提供を願ったことはないぞ？」

華琳「依頼の報酬も意外に安いし、曹家もそこまで資産を持っている訳ではない。では、この資産はどこから出てるのかしら？」

先日、たまたま経理部に用事があり、少しその中身を見せてもらった。
先日の役人大粛清により資産没収をやったため、かなりの余裕が出来たなと思っていたが・・・

華琳「この、曹家からの出資金って何よ・・・この領地の予算１０年分以上あるじゃない・・・」

秋蘭「・・・資産関係は見せてもらったことはなかったが、まさかこれほどとは。」

どこから捻出されているのよ？
劉宏からかと最初は思ったが、あれがそれを受け取るとは思えない。
それに伴って他の人間から貰うような事はしないだろう。

商売でもしているのかしら？

秋蘭「それが一番可能性があるのだが・・・何を売るのだ？曹家で作っている物などタチバナ様の・・・あっ、あれがある！！」

華琳「私もそう思うわ。たぶんそれでしょう。タチバナ捕まえるわよ！！」

共通の理解をし、タチバナを探しに行く。
資金はあって困るものではないけれど、どんなものを使っているかは分かっていないとね。

タチバナ「あ～知られてしまいましたか・・・秋ちゃんは仕方ないとして、華琳さんはできるだけ経理を見せないようにしていたのですが・・・」

華琳「どう考えても無理でしょう？それは・・・何故、私には見せたくないのかしら？」

タチバナ「理由は簡単です。私の趣味の範囲なので、誰にもケチをつけられたく、イタイです！！」

秋蘭「華琳がケチをつけるかは別として、出資の額が大きすぎます。いずれ、誰かに文句言われていましたよ？」

華琳「資産はあって困るものではないけれど、使途不明のものは使えないわよ？さあ、どうせ『お茶』を売って稼いでいるのでしょう？答えなさい！」

一刀「曹弥さん、頼まれていたも、の？ってどしたの2人とも。」

華琳「曹家の資産がおかしいから問い詰めてるの！！」

一刀「やっぱり華琳と秋蘭には言っておいた方がいいって言ったのに・・・」

秋蘭「北郷は知っていたのか？」

一刀「うん。曹弥さん、よく出掛けるからさ、ついて行ったりするんだよね。あの高速移動、慣れると楽しいよ？」

あれをよく慣れたわね、一刀。
あなたを尊敬するわ。

一刀「商売するときは変装するんだよ。庶民には安く、商人や豪族からは高く売るけど、皆買っていくんだよ？元手ほとんどないし、税金も免除みたいなもの、お金貯まる貯まる♪」

華琳「それだけでこんなに資産ができるものなの？」

私は一刀に経理部から持ってきた資料を見せながら聞いてみた。
どう考えてもそれだけでここまでの資産ができる訳がないから。

一刀「うわーすげー！！区画整理の予算、もう少し増やしていいですか？」

タチバナ「資金については気にしなくていいと言ってあったじゃありませんか。」

一刀「いえ、これでも予算オーバーしそうだったから・・・ああ、ごめん華琳。俺が一緒にやり出してできた金額じゃないね。前からやってたし、それくらいにはなるんじゃないの？」

タチバナ「まあ、私の育てた葉は薬にもなるらしく華陀・・・ああ、先代のね、彼女がよく買ってくれてましたし。五斗米道『ゴットヴェイドォーじゃないんですか！？』流派が違うのですよ？元は一緒

ですが治療の方法が違うので・・・話がズレました。結構な頻度で本家が薬を買いますからかなりのお金になりました。」

一応は、真っ当な資産な訳ね。
変なことして稼いでいるのではなくてよかった。

秋蘭「そうなら、ちゃんと言ってくれてもよかったではないですか。タチバナ様のやることに文句は言いませんよ？」

華琳「私は言うわよ？こんな事しているなら、私達の仕事を少しでも減らせるようなやり方で、仕事しなさい、と。」

一刀「あ～実を言うとね、俺達の給金、ここから出ているんだよ？」

はっ？どういう事よ？

一刀「ここまで見てるなら分かると思うけど、本当の意味での曹家の資産って実はないんだよね。塾での収入はほぼ無いし、依頼も数はあっても相当安い対価でやってたでしょ？まあ、これのお陰で数が増えていたんだけど・・・前の曹操さんが持ってた資産は全部、各地の村に与えたから曹弥さんが使えた資産は全くなかったんだよ。」

華琳「じゃあ何？こういう資金の不安を見せないためにタチバナ１人で考えてきたの？」

一刀「俺も偶々だったんだよ。この状態知ったの。依頼の対価増やしたら？とか言ったんだけど・・・」

タチバナ「結果として、依頼した太守が一番徳をしますが、その中で助かる命があります。はっきり言って偽善です！ですが、その助かる命は子供なのですよ。その子供は学び、未来を築きます・・・領主を拒み続けた私が言うのもおかしな話ですがね。」

まるで私が悪者じゃない・・・
そんなつもりで言ったのではないのだけれど。

華琳「領主の件は理由があったのでしょう・・・別にそれについてはとやかく言うつもりはないわよ。でもね・・・」

私は少し怒気のこもった声で次の言葉を紡ぐ。

華琳「あなた、私を信頼しているのでしょう！？何で相談しなかったのよ？そっちについて文句を言わせてもらうわよ！！」

タチバナ「華琳さん、ここに来たときには問題なくなってたと言うのが理由ですね。後、先にも言いましたが趣味の一環なんですよ、これは。ですが、やはりちゃんと言うべきでした。申し訳ありません、『華琳』。」

華琳「これからはこそこそ、隠れてやらない事ね。私にはちゃんと言いなさいよ？」

何かすっきりした！
タチバナが包み隠さずちゃんと話してくれたのが嬉しかった、のかな？

そういえば『さん』付けしないで私の名を呼んだのは初めてよね？

華琳「そ・れ・と！！そこの2人！！気持ちの悪い笑い方をしないでッ！！何よ！？文句があるわけ！？」

秋蘭「いや・・・特にあるわけ、ではないのだ・が・・・」

一刀「私には隠し事しないでって何か恋する少女だとお、も”ぁッ！！！！」

一刀を鎌の頭で思いっ切り窓の外へ吹き飛ばす！

秋蘭？
あなたはどうされたいのかしら？

タチバナ「やはり私の補佐は華琳、貴女ですね。私は貴女のことが大好きですよ？」

華琳「うるさいッ！！あなたも吹き飛びなさいッ！！！！」

私は絶を構え、タチバナ目掛けて思いっ切り振りかぶった。
抵抗する暇を与えず、一刀同様窓の外へ吹き飛んでいく。

秋蘭「さて・・・経理部にこの資料を返しに行くか。」

秋蘭はさっさとこの場から立ち去った。
いつか、復讐してあげるからね。

タチバナ「相変わらず、乱暴な人ですね。」

今、吹き飛ばしたばかりのタチバナは怪我もなく私の横でいつものように澄んだ顔をしていた。

華琳「あなたがふざけた事を言うからよ？」

タチバナ「本音を言っただけなのですが、ああ、もう止めて下さい！次は怪我しますから！」

絶を振りかぶる用意をしたが止められた。

タチバナ「私の目的はまだ言えませんが、貴女には私の真名を預けます。」

華琳「タチバナが真名ではないの？」

タチバナ「それは間違いありません。読み方は、ね。私が預けると言ったのは文字の方です。絶つ花と書いて『絶花』です。『ゼッカ』と詠んでもかまいません。この名は、妹が死んだときに封印した名です。この名を知るのは今や華琳、貴女だけです。灰霊、劉宏は『立つ花』と書いて呼びますからね。」

華琳「春蘭や秋蘭、華陀も知らないのかしら？」

タチバナ「彼女らは、立花『リッカ』を封印していると思っているのでしょう。絶花『ゼッカ』が本当です・・・まあ『タチバナ』と言うのが色んな意味を持っていますから、そう思われてるのでしょう。」

華琳「妹の為に封印したのでしょう？いいのかしら？それで呼んでも。」

タチバナ「出来れば、２人の時以外は呼ばないで下さい。その名を知られるのはよくないのですよ、色々と、ね。華琳、私は貴女を言葉だけでなく本当に信頼しています。貴女の思いに応えることが出来るのはこれだけだと思っています。いつか教えようと考えていましたが、ちょうどいい機会に巡り合わせました。」

華琳「私もあなたの信頼に応えるわ。その真名、確かに預かったわ。」

タチバナ「ありがとうございます・・・それでですね、早速ですが華琳にお願いしたいことが。」

華琳「手のひら返して何よ？」

タチバナ「領主になったので今までみたいに外に出ることが出来ない。と言うわけで・・・」

よくもまあ、こんな事を考えるものだわ。
まあ、やってもいいんじゃない？
今まで似たような事してきているのだし。

・・・それにしても、今や私しか知らない、か。
あはは♪

資金と真字と華琳（後書き）

華琳さんが華琳さんじゃないッ！！
ベツノナニカダ！！

コルトです。

どうしよう。
手、つけられないくらいにおかしくなってる気が・・・
ちょっと違うことしようとか考えて結果がこれですか？
いけませんねぇ～。

真字についてはこれ以降、ほとんど触れないと思います。
あんまり理由ないしね。

次回は、恋姫を増やします。
タイミングとしてはちょうどいいかな。

ネコ耳、再びと華琳

そういえば、この時期よね。
先日、一刀から李典と街中で会ったという事を聞いていた。
でも、彼女が来たのはそれより前だったと記憶しているが・・・
今更だが、自分の世界と違うということをこの様な場面になると考えてしまう。

桂花「お久しぶりに御座います、曹光様。ようやく、あなたの元にやって来れました。」

タチバナ「様々な経験をしてきましたね、桂花さん。とても魅力的な女性になりましたね。」

一応、後ろから小突く。

華琳「久しいわね、荀イク。最近まで袁紹の元にいたという報告があったけれど？」

桂花「ふん、曹光様の言うとおり自分の信じる道の為に経験を積んできたのよ。いつの日か、曹光様の下に馳せ参じるという道のためにね。」

秋蘭「お前ほどの者を、よく袁紹が手放したな。」

桂花「さっきも言ったけど経験を積むためにいたのよ？ちゃんとその辺りは考えて行動してるわ。それに、曹光様の下に行くと言ったらすごい嫌な顔されたけど『曹光様を手助けするなら、とても不愉快ですが文句はいいませんわ！！』とか言ってたわよ？」

麗羽・・・自分が一番行きたかったのでしょうね。
袁家の当主ですもの。
そういうところには自覚があるのね。

タチバナ「そうですか・・・貴女の道の先に私がいたのですね？」

桂花「あなたに言われた事は一字一句覚えています。ですが、私が忠誠を誓ったのはあなたなのですッ！！どうか、私を末席に加えていただきたく・・・」

一刀「曹弥さん。文官として有能なんでしょ？即戦力は必要だよ。正直、そろそろ仕事回らなくなるよ？曹弥さんの負担が増えるのはあんまりよくないと思うし・・・昨日、結局寝てないでしょ？」

華琳「タチバナ？どういう事？昨日は寝なさい、と言ったわよね？その前も2日ほど寝てなかったわよね？」

タチバナ「うう、仕方ないんですよ・・・春ちゃんが珍しく軍の編成をしていて、それについて困ってましたから。分かりました！貴女ほどの人が来てくれたのです。拒む理由がありません。ですが、ただの文官では意味がありません・・・今回の遠征で貴女の地位を考えます。」

桂花「ありがとうございますッ！！曹光様の為に寝る間も惜しんで働きます！！」

タチバナ「いえ、ちゃんと寝て下さい。休みは必要ですから。」

華琳「あなたが言うことではないけれど・・・彼女も連れていくのね？」

タチバナ「はい。桂花さん、早速ですが食料管理をお願いしたい。これが今回の遠征で使う資料です。秋ちゃん、彼女の案内を！他の皆さんは、各自の用意をして下さい。」

『『御意』』

玉座にいる者、皆、タチバナの声を聞き、自分たちの仕事に戻る。私はいつも通り、タチバナ聞く事があるためその場に残った。

華琳「今回の遠征、あなたは出ないのね。」

タチバナ「はい。桂花さんが来るのは予想の範囲でしたから。彼女が使えることを周りに見せたいと思います。今回は華琳、貴女に任せます。」

華琳「私、春蘭、秋蘭、一刀、そして荀イク。３０００ほどの賊に対応する人数じゃないわよ？一刀、置いて行きましょうか？」

タチバナ「実践で補佐を付けず、彼１人で部隊を動かすのは初めてです。ここで慣れてもらいます。基本的には北郷君を動かすように

して下さい。」

華琳「分かったわ・・・食料管理によって彼女に指揮権を渡すわよ？」

タチバナ「はい。よろしくお願いします・・・私は少し休みますよ？出発の前には出てきますから。」

華琳「ちゃんと休みなさいよ？あなたが倒れると皆、困るわ。」

タチバナ「前は仕事しろ！！って言うばかりだったのに。」

華琳「ちゃんと自分のやるべき事をやっている者には相応の対応はするわよ？・・・最近のあなたはやりすぎよ。自分の身体を大事にしなさい。」

タチバナ「これくらいならまだ問題ありません。一ヶ月は寝なくても大丈夫ですよ？」

華琳「バカ言ってないでとっとと寝なさい！！後は任せなさい！」

タチバナ「優しいですね・・・ではまた後で。」

そう言って玉座を後にする。

・・・タチバナが寝てたり、休んでいる姿を最近見ていない。
前は、ことある事に歌と一緒に寝ている姿を見てきたが領主となってからは見たことがない。
彼はどんな小さな案件も自分で確認してから私達に回すため、処理

が速くてもそれを超える量がやってくる。
賊討伐があれば、すべて彼が部隊を率いて鎮圧してくる。
今回は彼が出ないことを知り、少し安心した。
ここ最近の彼は仕事のしすぎと思っていたから。

何か問題が発生したのか？
彼の言う『目的』に変更があったのか？
色々考えるが答えが出ない。
私が出来るのは、彼が倒れないように見張るくらいかしら？

とりあえず。今回の遠征を無事終わらせようと思った。

タチバナ「ふむ・・・私の渡した資料では足りませんか？今までと違い、遠征を行うのでそれなりに食料は必要かと思いましたが・・・」

私の時と同じように、食料をちょうど半分くらいの量しか用意をしなかった、桂花。

桂花「はい。問題ありません。私が管理するならそれで十分です。」

タチバナ「食べる量を減らす、と言うのは問題外です。何か理由がありますね？」

桂花「恐れながら・・・今回の遠征、私を軍師としてお使い下さい！」

一刀「いや、曹弥さんが軍師みた、もがッ！！」

桂花「曹光様は私に只の文官では意味がないと仰いました。あなた自身も、あなたの側に曹操・・・華琳という知者がいるのは分かっています。ですが！！私はあなたの作る道を側で見てみたい！！そのために、今回の遠征で私の力を他の者に見せつける必要があります！！仕官早々、巡った好機、逃すわけには参りません！！」

秋蘭「そのためのこれ、か。しかし、勝算はあるのか？」

桂花「問題ないわ。一つは、食料を減らすことで行軍速度は上がるわ。」

春蘭「ん？行軍速度が上がれば、食料は半分でいいのか？」

桂花「そんなわけないでしょう？食料が半分になって行軍速度が倍になる訳じゃないのだから・・・二つは、こちらは曹光様が鍛えた精強な軍隊、あちらは訓練のくの字もない賊。軍事行動も予定より大幅に減らせるわ。」

一刀「鍛えたの曹弥さんだけじゃないけど・・・だけど、相手はこちらの倍以上いるんだよ？今回、曹弥さんも出ないし、行動時間は減らないと思うけどなぁ？」

桂花「ただ闇雲に当たれば、時間もかかるし、被害も出るわ・・・そのための軍師なんじゃない！？曹光様より貰った資料から、相手の状況も確認できたわ。既に必勝の策はあり！！」

誇らしく胸をはり、問題はないという。
まあ、元々、私も今回の食料は半分でいいと思っていたし・・・

華琳「タチバナ？どうするの？」

タチバナ「華琳、貴女自信が言ってたじゃないですか・・・桂花さん。貴女が言うように今回の相手は雑魚です。食料が途中でなくなり兵士に食料が回りませんでした、失敗し兵士を失いましたはありません。貴女が言うように『必勝』なのです。それは解りますね。」

はっきりと頷いている。

タチバナ「成功すれば軍師、失敗すれば死あるのみ、です。それでも問題はありませんか？」

桂花「元より我が命は曹光様の物！！如何様にお使い下さい！！」

タチバナ「そう、ですか・・・では、華琳！！すぐに出発しろッ！！春蘭、秋蘭、一刀は華琳と桂花の命令を第一に行動せよッ！！」

夏候・一刀「「「はッ！！仰せのままに！！」」」

桂花「曹光様！！ありがとうございますッ！！必ずや、あなたのご期待に添えるよう奮闘してまいります！！」

華琳「じゃあ、行くわよ・・・総員、行軍開始ッ！！」

私達は彼に見送られ、軍事行動に出て行った。

タチバナ「・・・さて、罰ゲームでしたっけ？は何にしましょうか？資料に書き忘れていたんですよね。遠征地周辺の村に『大食らいだがとても力強く優しい少女』がいると言うことを♪」

一刀「それにしても君スゴいね！塾生と言えど、皆、1からの出発なのに、もう華琳や春蘭達と同じ所にいる！」

桂花「・・・あんた誰よ？馴れ馴れしいわね。私に話しかけていい男は曹光様だけよ？」

一刀「手厳しいです・・・俺は北郷一刀！よろしく！」

桂花「あんたの名前なんか知りたくもないわ！！汚らわしいから近

寄らないでッ！！」

秋蘭「前と変わらず、相当な男嫌いだな。北郷、気力ズタズタにならないか？」

華琳「まあ、一刀なら大体、大丈夫でしょ？でも、助け船を出しますか。」

一刀は気にせず話しかけ、桂花はギャーギャー騒いでいた。

華琳「一刀、行軍中にあんまり女の子に手を出すのは戴けないわよ？それと、桂花？ギャーギャー騒ぐのはいいけど、タチバナ騒がしいのあんまり好きではないから嫌われるわよ？」

桂花「五月蝿いわねッ！！分かっているわよ！？あんたも馴れ馴れしいわよね！言っておくけどあんたは私の敵なんだからね！！覚えておきなさいよ！？」

敵って・・・

少し傷つくわね。

今まではあまり気にしなかったけど、桂花ってかなりトゲのある言葉発するのよね。

秋蘭「私も嫉妬するくらいタチバナ様の近くにいるからな、華琳は。」

ニヤリと笑いながら、油を投下する秋蘭。
恨むわよ？

桂花「ゼーッタイ！！今回の遠征任務、完璧にこなしてやるんだからッ！！そして、お褒めの言葉を貰うのよ！」

とても騒がしくしていたが、今回の任務の成功を妄想しだしてうっとりしている。

一刀「そういえば、曹弥さんって奥さん、正室とか側室とかいないの？全く話にならなかったけど・・・」

空気を読まず、一刀は今まで誰も話題にしなかった事を言った。
その言葉は周囲を凍りつかせ、近くで私達の話を聞いていた兵士達も言葉を止めた・・・

春蘭「・・・北郷・・・貴様は言ってはならんことを言った・・・」

一刀「えっ？」

秋蘭「すまんが、私は助けんぞ？」

一刀「えっ？えっ！？」

桂花「あんた、地獄を見たかったの？どれだけ変態なのよ。」

兵士1「北郷様・・・生きて帰ってきて下さい。」

一刀「いや、疑問に思っただけじゃん！！そんなに不味いことなの？」

華琳「今まで何を見てきたの、一刀。周りの子達がどれだけ彼を振り向かせようと頑張ったか知ってるの？春蘭の奮闘ぶりを聞きたいわけ・・・」

春蘭「北郷、味方を助けるため賊の刃に倒れた事にしておいてやる！！ここで、死ねぃ！！」

一刀「わっ！！ちょ、ゴメン！！謝ります！！浅はかな言葉を綴って申し訳ありません、春蘭様ッ！！君の大剣はヤバいんだって！！！！」

春蘭「わたしだってなぁ、色々考えたんだぞ！？あの方に振り向いてほしくて、恥を忍んで色んな人の所へ相談にも回ったんだぞ！！それを知っていてそんな事を聞くのか！！！！」

もう止められないわね。

一刀・・・骨は拾ってあげるから。

一刀と春蘭は命がけの鬼ごっこを始め、周りの者はそれを気にせず行軍を続けていく。

華琳「まあ、正室はいないでしょうね・・・人の事は言えないけれど、跡継ぎどうするのかしら？」

秋蘭「それまでに姉者が頑張るだろう・・・意外に、私がなっていたりしてな。」

桂花は、自分が正室になっている妄想でもしているのかしら？
終始、顔を赤らめて、上の空だった。

軍事行動なのに、緊張感ないわね。
タチバナがいるときも緊張感の欠片もなかったが・・・いいのかしら、こんなので。

色々あって数日後、私達は少女と出会う。
私の親衛隊として、そして春蘭の部下としていた少女と。

ネコ耳、再びと華琳（後書き）

コルトです。

だんだん、投稿速度が遅くなっております。
文章長くなってるし・・・
１０分くらいの小説めざしはどうした？

無理矢理感は毎度の事ですが、今回、それが目立つ。
まじめに修正入れようかな？

次は軍事行動かな？
うまく書けるといいけれど～

少女の決意と仲間と華琳

??「ボクが村のみんなを守るんだ!!官軍なんか、みんなから税金ばかりとって苦しめるだけなのにッ!!」

一刀「くッ!!一撃が重いッ!!」

行軍を開始して数日後、数十人の賊を相手に1人で戦う少女を発見した。
私はよく知っている少女で、出会い方も同じような感じだった。
賊を撃退し少女の安否を確認するが、官軍と確認すると賊に振るっていた武器を今度は私達に向けてきた。
今回は、春蘭ではなく一刀が私に向かってきた武器を受け止める。

一刀はランスと言われる、騎馬用に使われる槍のような物を武器として使う。
突進力に優れており、タチバナの特訓により瞬間移動の縮小版『瞬歩』を体得しているため、力の弱い一刀でも一撃で、大岩に風穴を空けるほどの威力を持っている。

だが、自分が助けた少女であり、自分達が助けるべき民から謂われのない言葉を受け、一刀は少し混乱しているようだ。
次の行動を考えあぐねている。
他の者も、どうするべきか考えているのだろう。
・・・やはり、タチバナのいない今、以前と同じように私が止めるべきか?

??「ボクたちを守ることもしない官軍なんか帰れッ!!ここはボクたちの村なんだ!!だからボクたちが自分達で守るんだ!!」

一刀「これ以上、防戦するわけには・・・気絶させとめる、か?」

華琳「双方、武器を納めよッ!!!!この戦闘に意味は、ない!!!!」

少女は今まで感じたことのない氣にあたり、武器を落とし、身体を萎縮させてしまった。
一刀は、私がこの場を納めてくれた事に安堵した。

華琳「お前の言いたいことは分かった・・・お前の名は?」

??「えッ?あっ,ああ、ボクは許緒と言います。」

華琳「そう・・・許緒、ゴメンなさいね!私達が不甲斐ないばかりに・・・」

夏候・一刀「華琳ッ!?」

私の行動に皆が驚いている。

華琳「私は『曹操孟徳』。今回、この部隊を率いる総指揮官です。今の意見は私の主である『曹弥孟徳』に必ず伝えます。貴女の村の管轄ではないけれど、必ず改善できるように話をつけます。」

そう言って改めて、頭を下げる。

許緒「えっ？曹、孟徳？・・・もしかして、最近、陳留に赴任された新たな州牧『曹孟徳』様？」

秋蘭「そうだ。我らが主は曹弥様、曹孟徳様だ。」

許緒「陳留に赴任された州牧様の噂は聞いています！！『月と太陽』曹孟徳様！！ボクこそ、ごめんなさいッ！！領民にとても優しく、沈んでた心を立ち上がられてくれたボクたちの味方の曹孟徳様にヒドいことを言いましたッ！！」

・・・『月と太陽』ってなに？

初めて聞く二つ名ね。

桂花を除く私達は首を傾げてその言葉を繰り返す。

桂花「知らなかったの？『月と太陽』曹孟徳。『復活の太陽・曹操孟徳』。曹弥様の妹君の事を指してるけど・・・あんたの事よ。そして『不蝕の月光・曹弥孟徳』様！腐ることも、朽ちることもない！！この世の闇に降りた私達を照らす光ッ！！ああ、曹弥様・・・」

惚けだした桂花は置いといて『月と太陽』、私達の事か。

太陽みたいな人と例えられたタチバナの妹『曹操』の名は、死して

なお残っており、私が同名と言うこともあり『復活』したように見えたのだろう。

『不蝕の月光』と呼ばれる曹弥は、腐りきった宦官や、地方領主に染まらず、税金を減らし、不正を働いた役人を一掃しているのだから、民からみれば味方であり救世主なのだろう。

華琳「そう・・・なら、私はその太陽に例えられているのかしら？」

許緒「はい！！『治世の能臣』と言われた曹操様は亡くなったと聞きましたが、曹弥孟徳の下で今もその名は聞かれます！・・・この辺りの役人は本当にヒドい奴ばかりで・・・本当にごめんなさいッ！！！！」

華琳「謝罪は受けたからもういいわ・・・それより、許緒？多分、先ほどの賊は私達が討伐する予定の一部だと思うわ。」

一刀「一応、斥候を放ってるからすぐにアジト見つけれるよ？」

許緒「奴らのアジト、ボク、わかります。案内させて下さい！！」

春蘭「能力があるのは分かるが、お前もわたし達が守るべき民だ。危険な事はさせられないぞ？」

春蘭がまともな事を言っているわ。

確かに戦闘能力の高さは分かるが・・・

華琳「直接の戦闘は私達に任せてもらうわ。気持ちは分かるけど、春蘭、夏候惇の言うとおりだから分かってね。」

許緒「・・・はい、わかりました。」

秋蘭「こちらの軍師殿は戦闘に慣れていない。彼女の護衛を頼みたい。」

桂花「ちょっと!!私も曹弥様の塾で護身術を・・・いえ、許緒、お願いするわ。」

許緒「分かりました!!頑張ってその役目、果たします!!」

その後、許緒の案内と斥候の報告により３０００人の賊を保有するアジトに着き、前の世界と同じように私を囮に使い、春蘭・秋蘭・一刀で賊を一掃した。

戦死者なし・負傷者軽微のほぼ完璧に近い形で、遠征は終了した。

・・・食料の問題は除いて。

華琳「ねえ、桂花？」

桂花「な、何よ！？」

華琳「私、おなか減ったわ。」

一刀「華琳・・・言うなよ。我慢してんだから・・・」

春蘭「だがなぁ、北郷、それを言いたくもなるぞ？昨日から何も食べていないのだから・・・」

桂花「う、五月蝿いわよ！！軍人なのだから少しは我慢しなさいッ！！」

秋蘭「いや、桂花・・・かなり厳しいぞ？今回の約定、守れたかと聞かれたらどうするつもりだ？」

桂花「ぐッ！！」

許緒「うにゃ？皆さん大丈夫ですか？」

華琳「そろそろ、不味いけど、まだ、大丈夫よ？・・・ほら、城が見えてきた。」

桂花とタチバナの約定は失敗と見ていいか？
私の時と同様、食料は昨日の昼に底を尽き、私達将は昨日から何も食べていない。
ここの許緒も相当な量を食べるのだから、仕方ないといえばそうな

のだが・・・

桂花「仕方ないでしょ！？許緒がこんなに食べるなんて思ってもなかったんだから！！こんなの想定外よ！？」

許緒「ボク、何か悪いことしました・・・？」

桂花「ぐッ！！」

一刀「大丈夫だよ？何にも悪いことしてないよ。ご飯美味しかった？」

許緒「はい！！こんなに美味しい料理、久々に食べました！軍事行動の時の食事はあまりいいものではないと思ってましたが・・・」

華琳「どこかの、呑気な領主様が『やっぱり、何時でも美味しくご飯は食べたいですよね？』とか言って携帯食料の改善を早くにやったのよ。」

許緒「へ～その領主様、スゴいですね！？」

秋蘭「今から会うのだがな・・・しかし、桂花？軍師が想定外と言うのはあまりよろしくないのではないか？そういう事態も含めて、知恵を出すのが軍師の仕事だろう？」

桂花「う”ーッ！！曹弥様に言いたければ言えばいいでしょ！？煮るなり焼くなり好きにしなさいよ！！」

春蘭「桂花お前・・・自分から煮るとか焼くとか言うなんて！煮た

ら美味しくないぞ！？」

春蘭・・・止めて・・・集中力が切れるわ・・・

すっとぼけた事を言う春蘭以外、皆、倒れそうになる。

春蘭はどうしたことかと首を傾げていた。

タチバナ「お帰りなさい・・・予想通りの結果ですね。私としては嬉しい限り・・・食事の用意が出来ています。皆さん、先に召し上がって下さい。」

タチバナの優しさに今は感謝するわ。

将は皆、嬉しそうに食堂へと駆け足で移動していった・・・桂花と許緒を除いて。

桂花「言い訳は致しません・・・どうぞ、我が首をおはね下さい。あなたの信頼に背きました・・・」

タチバナ「？？どういう事ですか？」

華琳「食料が途中で底を尽いたわ。あなたとの約定に背いた事になるわ？」

桂花「はい。予想外の事があったにせよ、それを計算に入れなかっ

た私の犯した失敗です・・・どうか、最後は曹弥様！！あなたの手で引導をお与え下さいッ！！」

地に膝をつき、頭を垂らす。
タチバナはどう言うのかしら？
正直、これだけ有能な人材を手放す事はしないだろうが・・・

タチバナ「？？あなたは約定は守ってますよ？どうして、成功した者を罰しなければならないのですか？」

華琳「ちょっとタチバナ、それはどういう事よ？食料は底を尽き、私、達は？」

ん？そういえば、あの約定？

タチバナ「『兵士を飢えさせない』、『兵士を殺さず生かしてここに帰すこと』と言うのが約束でしたね。報告を聞く限り、あなたはいずれも果たしているじゃないですか？」

桂花「しかしッ！！私は華琳・・・曹操や夏候惇、夏候淵と言った将を飢えさせました！！」

タチバナ「まあ、彼女達も兵士と言えばそうですが、今回、私が言った中に彼女達は入っていません。」

華琳「見解の相違、ね。まあ、あなたの言い分は間違ってはいない

わ。」

タチバナ「問題があるとすれば、私は今回『大食らいだが力強く、心優しい少女がいる』と言うことを資料には載せませんでした。味方からとは言え、その情報が正しいのか、何かが抜けていたり間違っていたりする事を確認しませんでしたね。時間がなかったとはいえ、ここは軍師として問題があります。」

あまり気にしなかったが、確かにそうだ。
私は過去の記憶があるからある程度予測していたが、タチバナから貰った資料、あれは用意が良すぎると思っていた。

タチバナ「約定で言えば、あなたは問題なく守っています。しかし、この課題の前段階から貴女は間違いを犯しています。それはわかりますね。」

桂花「・・・はい。弁明の仕様がありません。」

今回の失敗は、相当大きいものだったのね。
ある意味、軍師として決定的に欠落している事が分かってしまったのか・・・

タチバナ「では、今回の罰を与えます。荀文若！！貴女を曹弥孟徳の配下として迎え入れ、我が軍師として任に着き、その力、存分に発揮しなさい！！・・・ようこそ、桂花さん。いつまでも『曹弥様』

でなくていいですよ？塾に通っていた時と同じようにタチバナと呼んで下さい。」

桂花「あ、ありがとうございます・・・曹びさ、タチバナ様！！この失敗以上の成功を必ずや、あなたに捧げま、す・・・」

そう言って、倒れてしまった。
多分、緊張の糸が切れたのとお腹が減って気絶したのだろう。

タチバナ「こんなに頑張って・・・私には勿体ない素敵な方ですね。さて、ご飯を食べに行きましょうか？貴女も来て下さい。量は沢山用意していますから。」

許緒「え？でも・・・勝手についてきただけだし。それに村に帰らないと・・・」

タチバナ「それは心配しなくて大丈夫です。貴女の村周辺も私の統治下に入り、数日前には貴女が此方に来ることを伝えてありますから。ゆっくりしてから帰っても問題ありませんよ？」

許緒「だったら！！ご飯いただきます！！ボクもうお腹減ってて！！」

そう言ってあっという間に城の中に入っていく。
場所は分かるかしら？

タチバナ「問題ないでしょう。彼女なら匂いで場所を判別するでしょう。」

華琳「心を読まないで・・・あなた、性格悪いわね。最初から軍師にするつもりだったのでしょう？『私に渡した資料』には許緒の事書いてあるし、食料の配分も事細かに書いてあったわよ？」

そう。

私の持っていた資料と桂花の持っていた資料は違うのだ。

あらかじめ、私には何も言うなと釘を指し、食料配分の件だけ私に話に来るよう仕向けていた。

昨日の昼には将の分だけ食料が無くなるようになっており、兵士と許緒の分はちゃんと残るように計算されていたのだ。

タチバナ「我慢した分、今日の料理は美味しいですよ？今日は、華琳の好きな料理ですから。」

華琳「まあ、いいわ。料理はあなたが作ったのでしょうね？」

タチバナ「それはもう。桂花さんには後でオムライスを作ります。何か要望がありましたら、何でもお作りしますよ？『復活の太陽』様？」

華琳「あなたは知っている訳ね・・・いいわ。あなた秘蔵のお酒も出しなさい。今日は兵士も混ぜて宴会よ？」

２人でニヤリと笑い、城へと足を運んだ。

桂花はタチバナが背負っている。
幸せそうな顔をして・・・ほっぺをつねってやろうかしら？

こうして、今回の遠征は無事終わった。

次の日、待っていたのは山の山の書類が置いてある執務室だった。

華琳「タチバナ？私達がいない間、仕事は？」

タチバナ「ああ、休みました。皆さんいないとはかどら、いっったーーーッ！！！！」

華琳「休むのは1日だけよ！？一体、何日休んだのよ！！」

桂花「・・・結構、早くに失敗をチャラに出来そうですね・・・」

頭が痛いわ・・・

少女の決意と仲間と華琳（後書き）

コルトです。

戦闘描写書いたら、字数がかなり増えてしまい・・・

諦めました♪

まあ、大体原作と同じ様なものだったし、あんまりうまく書けなかったし、いらないやとか思ってしまいました。

次はちゃんと書こう。

今回の約定の考えや、資料についてはどうだったでしょう？
説明が足りないところもありますが、軍師なら鵜呑みにしないよね？とか考えてちょっと取り入れてみました。

ご指摘ありましたら言って下さい。

次は、あの方が登場。
物語は少し動き出す？

世界の疑問と華琳（前書き）

過去最高の長さ&オリ展開により読者置いてけぼりの可能性あり！！

それでも良ければどうぞ？

世界の疑問と華琳

今、私と一刀はタチバナに連れられて街のとある一角に来ている。

一刀「曹弥さん、ここに何があるんですか？」

タチバナ「私の友人と言いますか、私を知る人です。」

華琳「この時期に何用よ？正直、忙しいのだけれど？あなたのせいで！」

タチバナ「ははは・・・その辺は後で私がやりますから・・・着きました。開いてますね、よかった・・・」

そう言いながら、店に入っていく。

華琳「ちょっと待ちなさい！！こんな所に入っていかないでッ！！」

一刀「2人とも待ってよッ！！この店大丈夫なの！？」

タチバナの入っていった店は『踊り子・貂蝉の店』と言う看板がかかっていた・・・

華琳「・・・店の中が暗いわ。タチバナ！！どこにいるの！？」

一刀「華琳、早いよ・・・曹弥さん！！どこにいるんです！？」

？？「あらン？まだ、お店は開店して・ナ・イ・ワ・ヨ？そんなにアタシに会いたかったの？」

華・一「「ッ！！！！」」

本当にびっくりした。
タチバナではない誰かの声がしたこと、その声が妙に気持ち悪かったから。

華琳「わ、私は連れがここに入っていったから・・・」

一刀「右に同じ、ってぐぇッ！！」

？？「あーーーいたかったわッ！！御主人様ッ！！！！」

姿が見えないが、一刀が正体不明に捕まった事はわかった。

タチバナ「ここにいましたか・・・貂蝉、私です。久しぶりです。」

？？「あら、曹弥ちゃんじゃない？どうしたのよ？こんな時間に。」

どうやらこれが、タチバナの訪ねたかった人物らしい。
暗いからよく分からないわ。

タチバナ「開店前にすみません・・・暗いから明るくしましょう。」

そう言って、いつもの様に氣をどこかに向けて数個放ち、蝋燭があったのだろう、それに火を付けていった。

一刀「肋骨がッ！！背骨が折れるッ！！早く放してッ！！！！」

貂蝉「ゴメンなさいね。知り合いによく似ていたから・・・」

そういって『正に踊り子と言わんばかりの体つきと衣装の派手な女性』は一刀を開放する。

タチバナ「ここではそんな姿なんですか？」

？？「そうよ？これは本来のす・が・た♪可愛い？」

タチバナ「普段の姿に慣れていますから違和感がありありです・・・今日はこの2人に話をしてもらいたくて来ました。」

？？「そう・・・間もなくだから？」

タチバナ「はい。この世界について話をして下さい・・・私の目的については話さなくていいです。」

??「それとこれは一緒のようなものじゃない?戻れなくなるわよ、2人?」

タチバナ「そのために私の目的は話さないのです。まあ、聡明な2人ですから解るとは思いますが・・・突然すみません。華琳、北郷君。この世界の事、知りたくないですか?」

華琳「その言い方は卑怯よ・・・教えてくれるのね?」

タチバナ「今の段階で言えることはお話しします・・・貂蝉が。」

一刀「え?曹弥さんが教えてくれるんじゃないじゃないんですか?」

タチバナ「私は今から仕事してきますから・・・私の話はこれを聞いてそれでも!!と思ったら言って下さい。今日は2人とも休みになりますので・・・では貂蝉、後を頼みます。」

タチバナは、貂蝉と言われた女性に後を任せ、とっとと店を出て行った・・・

貂蝉「そんなに急がなくてもいいのに・・・いいわ。コチラへいらっしゃい?飲み物を用意するわン。」

そう言って指をパチンと鳴らすと何も無かった空間から机と椅子、

タチバナの用意するお茶が出てきた。

貂蟬「さあ、どうぞ♪曹弥ちゃんから1日自由を貰ったんだから、私が喋れることなら聞かせてあげるわよ？」

一刀「スゴい・・・今のどうやったんですか！？マジックみたい！！」

華琳「子供みたいに騒がないでッ！！」

貂蟬「こ・れ・は・・・企業秘密なの？御主人様ゴメンなさいね。」

一刀「そうですか・・・残念です。」

貂蟬「さて、改めて私は貂蟬。漢女道亜細亜方面継承者、よ。あなた達の名前はよく知っているから大丈夫よ？」

一刀「お、漢女道、亜細亜方面継承者？何ですか、それ？」

貂蟬「ンフフ、御主人様、き・き・た・い？」

一刀「いえ！！今日はこの世界の事を教えて下さいッ！！」

華琳「自己紹介は不要なら、早速教えてほしいものね。この世界は何？私の知る過去と違うことに繋がるわよね？」

貂蟬「んもう、せっかちね。曹弥ちゃんとは三日三晩、語り合ったのに・・・」

一刀「曹弥さん、こういう人が好きなのか？」

華琳「バカ言わないで！！体つきなら春蘭も同じじゃない！！貂蝉だったわね？貴女も変な事言わないでッ！！」

貂蝉「ちょっとした茶目っ気なのに『あ”ッ！？』・・・曹操ちゃんってこんな子だったかしら？・・・ん、さてこの世界の事だったわね。あなた達『正史』と『外史』って分かるかしら？」

私はいまいち分からないわ。
正しい歴史と違う歴史って事なのかしら？

一刀「ん～パラレルワールドって事ですよね？」

貂蝉「流石、御主人様！！そうね、曹操ちゃんは聞き慣れない言葉だから分からないわね。簡単に言うと、似てるようで違う２つの世界・・・今いるこの世界と、貴女が前に生きてきた世界、と言う事ね。」

華琳「私が生きてきた世界が『正史』で、ここが『外史』って言うことなのね？」

貂蝉「それは違うわね・・・理解できるか分からないけど『外史』は無数に存在するの。先程は例えで２つの世界を出したけど『外史』は星の数ほどあるわ・・・そして今も無数に増えているの。言ってしまえば、ここも貴女の前の世界も『外史』の一つなの。」

そう、なのか。
私と同じ様な者は無数に存在するのね。
そして、私は『正史』の人間ではなく、それを象った『外史』の一つなのか・・・

貂蝉「ショックを受けるのは勝手だけど、貴女がそこで生きてきたことは事実よ？『正史』とか『外史』は関係ないわよ？私がこの事を言わなければ、事実として別の世界があり、貴女が無数いることは知らずに生きていたんだし・・・」

華琳「大丈夫よ？・・・私は私『覇王』曹孟徳、よ！それは変わらない事実！」

貂蝉「そうね・・・話がずれたけど、この世界について分かったかしら？」

一刀「質問です！俺の知っている歴史は、正史なんですか？」

貂蝉「おおよそ間違っていないわ。御主人様の学んできた歴史が『正史』と考えていいわ。」

一刀「そっか・・・やっぱり、華琳の元はおと、ぐはッ！！！！」

華琳「それ以上は言わせないわ。私は『私』なの！それ以上でも以下でもないわ！！」

一刀「・・・あ、浅はか、でした・・・」

貂蝉「御主人様、大丈夫？・・・話を続けるわ。今までのは基礎の

部分。今からがこの世界の事よ。」

華琳「『外史』なのでしょう？それ以上の説明がいるの？」

貂蝉「それが簡単じゃないの・・・この世界、何時出来たと思う？」

一刀「かは、は？どういう事ですか？」

貂蝉「そのままの意味よ・・・この世界は約３０年前、曹弥ちゃんの妹『曹操』が産まれた時に出来た世界なの。」

華・一「「はっ？約３０年？」」

貂蝉「そうよ・・・他の『外史』は少なからず、歴史の流れを汲んで形成されていくものなのだけれど、この世界は『過去』がないの。」

華琳「意味が解らないわね。過去の記憶がないのなら、漢王朝の歴史や、人の生涯に歪みが生じるのではなくて？」

一刀「あっ！！あの本！！」

華琳「何よ、一刀。」

一刀「前に、曹弥さんの研究室行っただろ？あの時に歴史書を貰ったんだ。あの後も何個か三国志の歴史書貰ったんだよ・・・何れも内容がバラバラでしかも、黄巾の乱か反董卓連合辺りの時期で歴史が終わってるんだ。」

華琳「それがどうしたって言うのよ？」

一刀「予測を立てたんだ・・・この世界、同じ時期を繰り返しているんじゃないか、と。黄巾の乱や反董卓連合は起こらない歴史を・・・」

貂蝉「曹弥ちゃんはヒントを与えていたのね。そうよ！さっき、『この世界は約３０年前に出来た』と言ったけど、本来はちゃんと過去の歴史を汲んだ『外史』だったわ・・・あの子達の遊び物になるまでは。」

華琳「あの子達？」

貂蝉「曹操ちゃんは会ったことあるのではないかしら？あの双子、よ？」

私をこの世界に送った張本人！！

『白』と『黒』！！

こんな所でその２人が出てくるなんて・・・

貂蝉「心当たりはあるみたいね・・・あの２人の目的は全くの不明。私の知り合いが一生懸命探しているけど発見できないの。元々、私は『外史』を管理する立場にあるからどこへでも行けるのだけれど、この『外史』については完全に切り離されていてね。管理官は誰１人来ることが出来なかったの。」

一刀「？今いるじゃないですか！それはどういう事ですか！？」

貂蝉「・・・この世界は双子に切り離され、あの子達の遊び場にな

った。世界は何度も壊され、作り変えられた・・・切り離された『外史』には私みたいな者は行くことが出来ない。手の打ちようが無かったわ。『外史』に行けない、双子も見つからない・・・そんな時、奇跡が起きたの。」

華琳「何があったの？」

貂蝉「この世界が出来て一番に交流した男の子・・・もう分かると思うけど当時は『曹操』と言われた『曹弥』ちゃんが私達に交信してきたの。」

タチバナは本当に私だったのか！

『覇王』曹操、その人だった。

貂蝉「本当に奇跡だった・・・本来なら彼は、この世界と同じように壊れ、新しく作り替えられるはずだった。だけど彼はそうならず、何回も壊される世界の中で賢命に生き残った。元々『氣』の扱いがどの世界の者よりずば抜けて高く、初めて相対したあたしの漢女スーツに傷を付け、本気を出させたくらいの子だったからね。」

昔は血気盛んだったのね、タチバナは。

貂蝉「彼がどうして私達に交信できたか、どうやって生き残ってきたかは分からないわ。唯一話してくれたのは、自分が世界崩壊に初めて関わったのは１７の時と言っていたわ。でも、そんな事どうでもいいの。この世界を救うきっかけを作ってくれたのよ、彼は。」

一刀「助けてくれる人は誰もいない中、1人で、か。」

貂蝉「心の支えになったのは・・・これは彼の口からの方がいいわね。彼はどうすれば世界を救えるか聞いてきたわ。少なくとも繰り返している世界なのだから、その繰り返しを止める、未来へ世界を動かせばあの子達も別の手段を講じて来るだろうと結論に至ったのよ。」

華琳「具体的に何をしたの？」

貂蝉「まず、自身の完全消滅。それにより力を無くし『曹操』の役は新たな人間がする事にしたの。それは分かるわね？彼の妹『太陽・曹操』よ。自身は役を無くし、力を無くした不確定要素にしたの。仮に自分がいなくても世界を救う道を残したのよ？自身の消滅を起源に発動する術を世界に施したの。これが一つ。」

淡々と話すが、どれだけの歳月と力を使ったのか理解できない。力を無くしたと言ったが、仮に万全のタチバナはどんな存在なのだろうか？

貂蝉「世に言う『化け物』は赤ん坊に等しい力を持っているわよ？貴女が曹弥ちゃんによく言う『人の皮を被った何か』。『何か』なのは間違いないわ。こんな状況じゃなければ、彼はスカウトの対象よ？」

何のスカウトよ！？

そして人の心を読むな！！

貂蝉「だって顔に書いてあるもの♪『覇王』曹操も可愛く・・・話を続けるわ。次にやったのが、世界崩壊をどの様に起こすのか判らないけど、それを抑えるために各地の地脈を調べ、そこに結界を張ったの。少なくとも地脈を壊して大地を破壊することは出来なくしたわ・・・他にも方法はあるけど、今までの壊れ方からそれが一番可能性があると分かったわ。」

一刀「それだからよく色んな所に行くのか。ただ遊びに行ってるんじゃないんだね。」

貂蝉「半分は遊びに行ってるわよ？目的は見失わないようにしてるけどね。」

華琳「あれの放浪癖はどうにもならないでしょう・・・さらに行ったのは、この国の人間の教育ね。」

貂蝉「そうね。彼は世界の異変に気付けるように有能な者を探し続けた。そして自分との面識を与え、もしもの時の橋渡しが出来るようにしたの。彼女たちが出てきたときに多くの者が戦えるように・・・」

一刀「曹弥さんがやっている事は、ちょっと壮大過ぎて理解が出来ないよ・・・」

貂蝉「あたしも正直、理解できていないわ。これはすべて彼が示してきた事だから。説明出来るのは多くないのよ？」

華琳「結局、彼はどうしたの？」

貂蝉「大体分かっているのじゃない？貴女なら。」

華琳「私と一刀を必要としている。先の見えない歴史。普通に考えれば歴史の変革、歴史を紡ごうとしているわね。」

貂蝉「あたしは彼の目的には触れられないから何も言えないわ。けど、一つ言えるのはあなた達は未来から来た。歴史を知る者、ということ。」

華琳「そこらは彼の口から聞きましょう・・・これが疑問ね。私と一刀はなぜこの世界に来たの？あなた達も入れなかったのでしょう、この世界に。」

貂蝉「御主人様は『外史』になくてはならない存在なの！外への接触が出来るようになった『世界』が自分で『北郷一刀』を呼び出したの・・・外と隔離されてきたから時間のズレはあったのだけれど、ね。本来はこの時期に来るようになってたのよ？」

一刀「そうなんだ。俺は必ずここに来るようになってたんだ・・・」

貂蝉「落ち込まないで！大変だったけど、有意義な時間を過ごせたでしょ？曹操ちゃんはね・・・直接的に曹操ちゃんをここに呼んだのはあの双子よ。だけど貴女が選ばれた理由、それは曹弥ちゃんにあるのよ？」

華琳「どういう事よ？」

貂蝉「それは言えないわ。曹弥ちゃん怒ると怖いし、そろそろ店を

開けないといけない時間になったから・・・」

よく見ると、外は既に太陽が落ち始め、暗くなってきていた。
そんなに時間が経ってたのね。

貂蝉「思ったより時間が進んだわね・・・何か質問があったらまた来なさい。ここは何時でも開いてるから。」

一刀「ありがとうございます！少しですが謎が解けた気がします。また何かあれば聞きに来ます。」

貂蝉「それだけではなくて、お店の方にもキ・テ・ネ♪」

一刀はお礼を言いながら足早に去っていった。
綺麗な人なのに何か不満があるのかしら？
まあ、少し悪寒の感じる言葉使いだが。

貂蝉「曹操ちゃんは・・・あたしより曹弥ちゃんから聞きなさい。今は話してくれないと思うけど、彼は貴女を一番大事にしているわよ？」

華琳「そう。それ以上の問題を擦り付けてくるから大事にしているのか疑問ね。」

貂蝉「そうかしら？」

華琳「そうよ？」

2人で顔を見合わせ笑っていた。

タチバナに会ってくることを告げ、貂蝉と別れた。
この世界の事もわかり、彼の目的もある程度わかった。
まだまだ聞き足りないこともあったが、これ以上は頭で処理できない。
少しずつ整理して行こう。

城壁の上に彼はいた。
仕事は多くあっただろう。
私と一刀の分もやったのだ。
普通ならこんな所にいる訳がないのだが・・・

華琳「休憩かしら？そんな時間があると思っているの？」

タチバナ「・・・仕事は終わらせましたよ？明日の分も仕上げたのでゆっくり出来ますよ。」

華琳「そう・・・お疲れさま。」

タチバナ「大したことではありません・・・これからのことを考えれば。」

華琳「そうね。これから大変ね。」

タチバナ「何も聞かないので？」

華琳「あなたはちゃんと私に話すと言ったわ。その約束があるのだから、あなたから言うまで待つわ・・・待つのは得意ではないけれど、いい女はそれくらい出来ないと、ね。」

彼はこちらを一切向かず、ただ、城下町を眺めている。

タチバナ「・・・そうですね。華琳は私の補佐には勿体ないくらい素晴らしい女性です。出来たら、貴女を巻き込みたくはなかった・・・」

華琳「寝言は寝てから言いなさい・・・さあ、行くわよ？ここは冷えるし、お昼食べていないの。たまには新作の料理が食べたいわね？」

タチバナ「華琳には勝てそうにないですね。まだ思案中ですが、新作があります。用意しましょう。」

そう言って少しコチラに顔を見せて、食堂に歩いていく。

華琳「私もあなたに勝てそうにないわよ・・・」

だれの耳にも届かない、本当に小さな声で私は今の言葉を出した。

今日は色々あった。
頭はまだ混乱しているように思う。
明日からの仕事の為にも気合いを入れないと。

黄巾の大反乱が始まる、数ヶ月前の事だった。

世界の疑問と華琳（後書き）

毎度の無理矢理感、ヒドすぎる！！！！

コルトです。

この外史は他の外史と隔離され破壊と再生を繰り返しています。
それを破ったのがタチバナであり、華琳や一刀を呼び出す事に成功。
これから少しずつ世界の事を説明していきます。

意味がわからん！！とか、これ何よ～？ってことあったら言って下さいｍ（＿＿）ｍ

大乱と苦戦の華琳

真桜「東側の防護壁、もう保たんでッ！！ぶつかり合いになったらこっちは勝てんよ！？」

沙和「西門の方は、思ったより負傷者が多いの！まだ、耐えれるけど。余裕がないの！！」

凪「南の要員を東に回します！！こちらは多少、余裕があります！！」

一刀「くそッ！！数が多すぎる！！曹弥さんの援軍が間に合う、か！？」

華琳「泣き言を言っても仕方ないわ・・・しかし、数が多い！異常よ、これは！！」

貂蝉から世界の事を聞いた数日後、いつも通り忙しい日々が続いていた。

今回、私と一刀は兵の訓練と警邏を兼ねて、遠征に出ていた。

たまたま寄った街に凪、沙和、真桜がいて、久々に話をしていた。

そこで、賊の襲撃を受けた。

その街は義勇軍４００人ほどいて、私達の部隊８００人と合わせ１２００人が戦闘に参加できた。

街の警備部隊は他の賊討伐に出ておらず、私達のみで街の防衛に当たることになった。

始めはほぼ被害もなく防衛に当たれたが、段々、相手の数が増えてきた。
当初の目算は、３０００ほどの数だったが、今では１００００近くの数になっている。
・・・正直、防衛を考えず撤退する道を選べばよかったと思っている。
私の記憶では、前はかなりの数がここを襲ってきたが、何とか防衛出来ていたのだが・・・。

タチバナ『この遠征中、賊と鉢合わせしたら撤退をして下さい。仮に街や村が襲われたら、人命を第一に考えて下さい・・・戦う事は考えてはいけません。』

遠征前にこう言われていた。
自分の力を過信し、甘く見ていた。
タチバナは分かっていたのだろう。
つい最近に朝廷から賊の鎮圧を命令された。
黄色の頭巾を巻き、自らを大賢良師と称し太平道というものを作った『張角』とその信者の蜂起が一斉に始まった。
賊の台頭は前からあったが、ここにきて、一つの勢力が周辺を巻き込み大蜂起、反乱に移っていったのだ。
ここでは、張3姉妹は出てこなかった。
彼女たちとは別の人間が『黄巾の乱』を起こした。
彼女たちはどこかにいるのかしら？
・・・その話はまた別の時にしよう。

今はこの状態を何とかするべきだ。

一刀「華琳ッ！！西側から未確認の大軍が来ている！！」

華琳「ッ！！確認急いで！！西と南はどうなっている！？」

凪「・・・南は謎の生物により、賊は壊滅しました・・・」

は？壊滅？何があったのよ？

耳を疑った。

沙和「西は土煙で何にも見えないの！！けど、すごい悲鳴や怒号が聞こえるの！！所々、細い縄みたいなものが見えるよ！！」

華琳「何があったのよ？・・・東は！？」

一刀「旗は赤い夏候の字・・・春蘭だッ！！曹弥さんの援軍間に合ったよ！！」

・・・間に合ったか。

それにしても早すぎる。

早馬を確かに出したが、ここまで早く着くとは考えにくい。

華琳「西と南に５０ずつ人を残して後は東に！！そのまま押し戻せ！！沙和と凪は西と南を警戒して！」

凪「了解しました！！」

沙和「西の状況は確認できてないよ～？いいの？」

華琳「西は一番問題無いわ・・・煙が晴れれば1人しか確認できないでしょうから。」

沙和「？？」

皆に指示を出し、混乱している東側の賊を一気に討伐しにかかった・・・

タチバナ「かなりの数、死傷者が出ましたね・・・義勇軍の被害は？」

凪「はッ！！４００人中４０人が死亡、２００人が何かしらの怪我をしています！！即時、行動できる者は５０人ほどです！！」

一刀「被害は大きいな・・・こちらは１０名が死亡、重傷者が５０、軽傷と疲労困憊が２００、即時行動できるのは４００といった所です。」

タチバナ「１２００名中、半数が行動不能ですか・・・」

春蘭「今回の遠征は、新兵ばかりです。１００００近くの賊を相手によく保った方だと思います・・・わたしの隊は被害なしッ！！です！」

華琳「任されていながら申し訳ないわ・・・第一陣を退けた後、撤退をしていればこれほどの被害にはならなかったわ。」

タチバナ「いえ、撤退は不可能だったでしょう・・・被害はありますが、戦えない者達の被害はありませんでした。それは誇って下さい。皆、よく頑張った！！つらく、苦しい戦いだっただろう・・・だが、お前達は街を守り、力無き者達を救えたッ！！自分達の行いを誇れ！！その手で守ったものはとても大きいものだッ！！！！」

兵士『『『おおッーーーーーー！！！！！』』』

タチバナは皆に労いの言葉をかけている。

この街の警備部隊は全滅していた。
私達がこの街に来る前日に賊討伐に出て行ったが返り討ちにあった。
その賊の一団が周りの賊に呼び掛け、今回の数になったそうだ。
ある意味、幸運だった。
私達がいなければこの街は賊に荒らされ、義勇軍は全滅していただろう。
タチバナは警備隊が外に出た情報をいち早く手に入れ、春蘭に命じ

て、私達の救援とこの街の防衛に回らせたのだ。
早馬が城に着き、タチバナと歌は2人？で救援に来たらしい。

正直、助かった。

春蘭だけでは西と南の賊に対して、今以上の被害を被っていただろうから・・・

凪「曹光様、華琳様・・・本当にありがとうございました！！私達だけでは、間違いなく街を守りきることは出来ませんでした・・・」

沙和「曹光様スゴいの！！煙が晴れたら、あれだけいた賊が曹光様1人残してみんな消えていたの！？」

真桜「あん時の兄ちゃんの上司って曹光様だったんやね。そっちに驚いたわ。」

タチバナ「3人共久しぶりですね・・・義勇軍に入ったので？」

華琳「そうらしいわ。村の数人と共に呼び掛けあってこれだけの数を集めたそうよ？」

凪「曹光様に統治されて以来、私達の村は生活がとても楽になりました・・・しかし、周りの村はとても苦しい生活状況で賊に怯えていました。」

沙和「曹光様の統治の及ばないところを、私達がせめて賊に怯えないで生活出来るようにしたかったの！」

真桜「周りの村の若い連中呼んで、集めたんやけど、この街でたまたま警備隊が賊討伐の呼びかけしてるって聞いて来たんやけど・・・」

タチバナ「警備隊は既に出発した後。どうしようか悩んで、とりあえず、警備隊が帰ってくるまでここを守ろうと考えた、と言うことですか。」

3人はその通りと言わんばかりに、それぞれの仕草で伝える。

華琳「それで、これからはどうするの？警備隊は全滅したと言うことだけど・・・」

タチバナ「城に戻り、改めてここに逗留する部隊を選抜します・・・まあ、辺りの賊は一掃したようなものですが一応、ね。あなた達はどうしますか？」

凪「はい！！3人で話し合った結果・・・曹光様、義勇軍と共に私達をあなたの配下にして頂きたいと思います！」

春蘭「義勇軍を立ち上げたのは、周りの村を救うためと言っていたがいいのか？」

真桜「そりゃあ、最初はそうやったけど・・・」

沙和「私達だけじゃ限界あるもん！」

凪「今回の事で、私達だけでは人々は救えない事がわかりました。

華琳様達がいなければ、今回、私達は死んでいました。確かに、敵の数が増えれば私達に対処は出来ません。ですが！！私達は少しでも多くの人を救いたくて義勇軍を作りました。ならば、その想いをしっかり受け止め、この荒れた世を変えてくれる人について行きたいと考えました！！」

一刀「それが曹弥さん、と。」

真桜「周りの領主で曹光様より優れた統治者はおらんやろ？まあ、仮に優れていても仕えたいと思う領主は曹光様だけやで！」

沙和「私達知ってるの、曹光様くらいなの！仮に知っててても曹光様の所しか行かないの！」

凪「こらッ！！月様・・・董卓様がいるだろう？まあ、私も仕えたいのは曹光様だけなのだが・・・」

華琳「大人気ね、タチバナ？・・・他の義勇軍はそれでいいのかしら？」

凪「元々、曹光様の治世に感銘を受けて、いつかはあなたの配下として仕えたいと思っている者達ばかりです。文句など一つも出ません！！」

タチバナ「そうですか・・・正直、人手は足りませんから、とても有り難いです。歓迎しますよ？義勇軍の皆さん！」

義勇軍『『『わーーーーーッ！！』』』

三羽烏「「「ありがとうございますッ！！曹光(なの)様！！！！」」」

タチバナ「今更ですが、桂花さんもそうでしたが何でタチバナではなく曹光なのでしょう？」

華琳「敬意を評しているのではないかしら？戦後処理の後、春蘭の部隊を残し撤退するわよ！？」

一刀「りょーかい！！」

春蘭「後は任せろッ！！タチバナ様の為に、しっかり任務は全うするぞ！？」

三羽烏を配下に加え『黄巾の乱』前哨戦は終わった。

季衣「タチバナ様～お腹減ったッ！！歌もお腹減ったって！！」

タチバナ「歌さん・・・口元、真っ赤・・・いえ何でもありません。」

大乱と苦戦の華琳（後書き）

コルトです。

最近、書いて読み直すことをあまりしていません。
改めて見直すと、文章変だったり違和感ある文面ばかり目立ちます・・・

いけませんね。
時間をかけても、そういう所はちゃんとやらないとダメだと思いました。

次は、休憩を挟もうかと思います。
その後は黄巾の乱をやっていこうかと考えています。

何かこんなのやってほしいとかありましたら言って下さいｍ（＿）ｍ

初めての部下と報告と北郷と

違う世界にいる、お父様、お母様、そしてお爺様、お元気でしょうか？
わたくし、北郷一刀は元気でやっております。

・・・女尊男卑のこの世界で、華琳や春蘭、桂花達にボロボロにされながら何とか生きております。

俺は北郷一刀。
この変な世界『三國志』に迷い込んだ、ここより遠い国からやってきた迷い人です。
立場は、エン州の州牧『曹弥光孟徳』の部下であり、彼が治める陳留城下街警備隊総隊長をやっております。

・・・曹弥さんの部下と言っても実質、華琳の部下のようなものだし、総隊長と言ってもこの街だけの警備隊の為、あまり立場は高くない・・・
たまに、軍の指揮もするけどね！華琳の補佐として・・・

そんな俺にも部下が出来た！！
先日入った義勇軍は俺が受け持つ事になり、その中心的立場にいた、楽進、李典、于禁の３人が部下として配属された。
真名も交換し、これから頑張ろうと思うけど・・・

一刀「沙和、真桜・・・何をしているの？」

沙和「阿蘇阿蘇見ているの！」

真桜「今、話しかけんといて・・・からくり夏候惇将軍、もう少しでできるんや・・・」

凪「2人とも！！書類は出来たのか！？隊長に昼までに提出してくれ、と言われただろう！！」

一刀「ははは・・・この様子じゃ、やってないね・・・ああ、華琳に何て言おう。」

警備隊の人数の増加に伴い、隊を多く再編し、それの管理用の書類を提出するように言われていた。

一応、3人には自分達の隊の管理を任せていたのだが・・・

真桜「うちのは終わってんで～。」

沙和「沙和のは、字が分からない人がいるから何人か出来ていないの！」

凪の分は丁寧にまとめてあり、修正も必要なかった。

・・・が、あとの2人は・・・

一刀「真桜、組別で分けてって言ったよね？管理用だからまとまっ

てないとダメだよ。沙和のは、字が分からない人はその人の出身地だけでもいいから分かるようにしておいて。ちゃんと人数も分かるようにしてね。今から何とか終わらせてほしいですm（＿＿）m」

切実です・・・
怒られるの俺だし！
とか思ってたら、背中からとても重い氣が・・・
凪、俺の後ろ見て震えてるし。

華琳「一刀、管理用の書類はどうなったのかしら？昼はだいぶ過ぎているけれど。」

一刀「申し訳ありません！！まだ、終わっておりません！！」

俺は出来る限りの謝罪、土下座で場を凌ごうと考えた。

沙和「隊長、カッコ悪いの～。」

凪「沙和！！元はお前達が悪いのだぞ！！書類を早くに渡せば、隊長がこんな事しなくてもいいのだぞ！？」

凪・・・お前だけだよ、俺の味方は。

華琳「は～・・・自分の部下なのだからうまく使いなさいよ。」

一刀「面目次第もありませぬ・・・」

華琳「タチバナからファッション雑誌貰ってきたのだけど？」

沙和「人数把握と出身地の確認終わりました！！なの！」

華琳「さっき、新しい工学技術を伝授しようかと、タチバナ言ってたわね。」

真桜「組分け終わったで！！綺麗に纏めたから管理もしやすいよ！？うち、タチバナ様ンとこ行ってきますッ！！」

2人とも、今までの行動が嘘のように書類を一気に終わらせていた。真桜は、あっという間に消えている。

一刀「俺、下っ端のままでいいや・・・部下、うまく扱えないし・・・」

凪「隊長！！しっかりして下さいッ！！頑張りましょうよ！？まだ新生警備隊は始まってもいませんから！！」

って言われてもね・・・

部下持ったことなかったけど、ここまでうまく扱えないとこれからが・・・

華琳「まあ、今回はたまたまよ。一刀、あなたも初めての部下を持つのだから不安もあると思うけど頑張りなさい。タチバナは『北郷君なら大丈夫です。信頼していますから。』ですって。期待されているのよ？」

一刀「曹弥さんが？」

華琳「そうよ？私は一刀には部下を持たすのは早いって言ったのだけれど、ね。」

一刀「そっか・・・なら頑張ろう。曹弥さん、無茶は言ってきたけど無理は言わなかったから。」

凪「私も手伝います！・・・そういえば、隊長はタチバナ様を真名では呼ばないのですね。」

華琳「そういえば、一番始めは呼んでたけどすぐ呼ばなくなったわね。」

一刀「えっ？ん～タチバナさんより、曹弥さんの方が言いやすかったってのがあるけど・・・」

華琳「他に何かあるの？」

一刀「いや、それだけだよ・・・」

俺は少し言い掛けたけど、止めた。

『曹弥の方が本当の名前な気がしたから』

ということを。

華琳「そう？・・・ああ、タチバナが呼んでたわよ？忙しかった私に雑誌を渡して、これで仕事が進みますよ？って言われたのよ。」

凪「タチバナ様はお見通しだったということですか。どこまで見えているのでしょうか？」

一刀「分からないね・・・あの人はスゴいよ、本当に。それじゃあ、華琳、お待たせしました！沙和と真桜から貰った資料で終わりです！」

華琳「あら？もう終わっていたの？」

一刀「今の間にね。凪、今日はこれで終わりだから、後は自由に、ね。それじゃあ！」

俺は資料を華琳に渡し、凪に今日の業務の終了を告げ、曹弥さんの所に急いだ。

華琳「前はこんなに早く仕事終わらなかったのに・・・」

凪「隊長はなかなか優秀な方なんですね！」

華琳「そうかもね・・・タチバナの見る目は間違ってないわね。」

俺は曹弥さんの執務室に来た。
最近はここにしかいないから、前ほど探さなくていい。

タチバナ「お疲れさま、北郷君・・・真桜、ここの絡繰りを代えれば他の駆動系の負担がなくなります。」

真桜「おおきに！！これでからくり夏候惇将軍、完成するで！！」

タチバナ「後は自分でやってみて下さい。また何かあれば聞きに来て下さい。」

真桜「は～い。それでは！！」

先程、高速で移動していた真桜はまた高速でいなくなった。

タチバナ「部下を持ってどうですか？慣れなくて大変でしょう？」

一刀「そうですね。やっぱり、なかなかうまくいきませんよ？曹弥さんほど上手に出来ませんよ？」

タチバナ「私と比較しても意味がありませんよ？自分の思った通りやればいいんです。それと私とあなただけですから、言葉を楽にしていいですよ？」

一刀「それなら・・・でも曹弥さんもそうだよ？北郷君なんて言い方しなくてもいいのに・・・」

タチバナ「これからは一刀君と呼びますよ？」

一刀「まあいいんだけどね。それで、何か用があったんだよね？」

タチバナ「あなたに聞かれた情報を纏めました。一つは、劉玄徳と言う者ですが幽州の白蓮の下で義勇軍として立ち上がり周辺の賊討伐を行っています。ああ、関羽と張飛と言う女性がいましたね。ついでに諸葛亮とホウ統と呼ばれる方もいました。」

一刀「居ないわけがないと思ってたけど、これは俺の記憶通りと言うことか・・・一部違うけど。なんで諸葛亮とホウ統が？」

タチバナ「それは知りません。私は一刀君に聞かれたことをそのまま調査しただけですから。ついでに今は南下して平原にいます。」

一刀「もう少ししたら会えそうだね。」

タチバナ「次の軍事行動如何ですね・・・もう一つは麗羽さんと月さんの治世ですね。月さんはよくやってますが・・・正直やりすぎましたね。中央に目を付けられました。この乱が終われば、彼女は利用されます・・・漢王朝への怒りの矛先にされます。」

一刀「曹弥さんはいいの？お気に入りの生徒でしょ？」

タチバナ「私も目を付けられていますから、容易には動けません・・・ですが、必ず助けます！」

一刀「ならいいんだ。助けるって言うのは分かってたけどね。」

タチバナ「人が悪いですね・・・麗羽さんはよくも悪くもと言う所ですか。よく治めていると見えますが、張角の出現は冀州からです。それを考えるとなかなか難しい・・・部下が少ない、と言う理由があるんですがね。それが解消されていればこんな事は起こらなかったと考えます。」

一刀「そっか・・・これまでの事、華琳も聞いてきた？」

タチバナ「はい。等しく情報は伝えています・・・これ以外は。」

曹弥さんの重い氣が集まってくる。

タチバナ「一刀・・・この2人、本当にいたんだな？」

一刀「ああ・・・いた。あの、防衛戦で見かけたよ。一瞬だったけど、あまりにも場違いの『双子』だったから覚えてるよ。あなたに深く関係あるはずだから、報告したんだ。」

そう。

先日の義勇軍との街防衛の際に、賊一団の中にまだ子供としか思え

ない双子を見かけたのだ。
俺以外、誰も見ていなかったため、気のせいかと思ったが・・・

タチバナ「気にはなった。あれだけの賊があの街の近郊にいるはずがなかったんだ・・・しかし、あれだけ集まり街を襲った。それに一瞬、大気がブレた。あのブレはこの世の存在では確認したことがない。」

一刀「ゴメンね。余計な負担をかけて・・・」

タチバナ「いや・・・問題ありません。情報は少なくてもいいし、小さくてもかまいません。きっかけがないと何も出来ませんから。何かあればその都度、報告をお願いします。」

一刀「分かったよ・・・じゃあ俺、警備があるから。」

タチバナ「時間をとらせました・・・頑張って下さい。」

一刀「曹弥さんも、ね・・・それでは曹弥さん！失礼しました！」

そう言って俺は執務室から退出する。
今から警邏だ！
曹弥さんの負担を減らすためにも頑張ろう！！

曹弥

かなりマズい状況だった。
この時期に彼女たちが出てきてるのは完全に予想外だ。
今までとは状況が違う。
ようやく、世界を変える鍵『北郷一刀』と『曹操孟徳』が自分の所に来てくれたのに・・・

タチバナ「貂蝉、近くにいますか？」

貂蝉「一応、ね・・・御主人様と2人の時は、言葉遣いを代えさせているのね。」

タチバナ「彼は同士ですから・・・何の同士かはあなたにも秘密ですよ？」

貂蝉「ンもう。教えてくれてもいいじゃない・・・まあいいわ。何をすればいいの？」

タチバナ「于吉君を呼べますか？」

貂蝉「あの子を呼ぶと左慈も来るわよ？」

タチバナ「かまいません。外の力には外の力を使います。この世界の問題はこの世界の力で解決します。」

貂蝉「ようやく姿が見える所に来たものね・・・身体は問題ない？」

タチバナ「・・・何の事ですか？私は元気ですよ？」

貂蝉「ならいいけれど。じゃあ、こちらはこちらのやり方で行動するわ。何かあればすぐにお・し・え・て・ね♪」

貂蝉は影のように姿を消した。

ここで世界を崩壊させてたまるか！！

目が見えなくなろうが、腕がなくなろうが、絶対に止めてみせる！！

俺の全てをかけて！！

タチバナ「約束は守るよ・・・『華琳』」

初めての部下と報告と北郷と（後書き）

オリジナルな展開を混ぜています。

コルトです。

どこかで言いましたが、基本は原作の流れに沿って本小説はできていきます。
その流れで、オリジナルな事もやっていきます。

一応、今のところは王道ルートを進めています。
軌道修正もしながらなので無理矢理な所もあると思いますが、生温かく見守って下さいｍ（＿＿）ｍ

次回からは、黄巾の乱本番です。
４話くらいやるかな～？
それ以上やるかも・・・それ以下もあるかな？
そこらの予測が立ちませんね。

2面作戦と英雄と華琳

春蘭と秋蘭が帰ってきた。
先日の防衛戦の後処理と、新たな警備隊を設置するため秋蘭は街の方に赴いていた。
春蘭は新しい警備隊が来るまで彼女の部隊が警備を任されていた。
それが一段落して、ようやく城に戻ってきた。
そして今、彼女たちが帰ってくるまで待たせていた軍議を行うことになっている。

秋蘭「・・・質問をいいか、華琳。」

華琳「・・・何かしら？くだらないことは聞かないでよ。」

秋蘭「まあ、その、なんだ・・・お前の頭に付いているのは、何だ？」

黒陽「それはくだらないことになるのぅ・・・兄上からの薬を飲んでこうなった。」

秋蘭「そう、か。すまんな。余計な事を聞いた。」

華琳「・・・出来たらあなたの姉を何とかしてほしいわ。桂花は陰で笑ってんじゃないわよ！！」

桂花「くく・・・ねこ被り・・・」

華琳「あなたも一緒でしょうがッ！！！！」

春蘭「あっはっは！！可愛いぞ、華琳！！よく似合ってるじゃないかッ！！！！」

秋蘭「姉者、止めとけ。後でヒドいぞ？・・・それにしても、どんな薬を飲めばそうなるのだ？」

・・・今、私の頭からちょんと『ネコ耳』が生えている。

どうしてこうなったかは、あのバカから『たまに頭痛あるんですよね？調合した薬がありますが飲みますか？』と言われ、数日前、薬を飲んだのだ。

確かに頭痛は前ほど起こらなくなった。

しかし！！今日の朝になって異変に気が付いた！！

耳がよく聞こえるな、と思っていたのだが鏡を見て驚愕した！！

・・・すぐにタチバナの所に行きましたよ？

タチバナ「綺麗な女性から可愛い女の子になりましたね？・・・どうしたんです？」

華琳「ど・う・し・て・・・こうなったのかしら!?予想として、あなたからもらった薬が原因なのだけれど?」

タチバナ「なるほど・・・やはりあの薬草を混ぜるとこういう副作用が『私を実験台にしたのッ!?』いえ、華琳の頭痛を治し、可愛い姿を見るために予測をも”ッ!!!!」

華琳「これが事の顛末、よ。問題ないかしら?」

秋蘭「あ、ああ・・・」

華琳「では、軍議を『なあ、華琳?』・・・何かしら?一刀。」

一刀「うん・・・君の気持ちはよく分かるし、早く軍議を進めたいのは分かるんだ。でもね・・・」

華琳「でも、何よ?」

一刀「一応、俺たちの主だしさ。蓑虫みたいに逆さの簀巻きで天井にぶら下げられている曹弥さん、降ろしてあげない?曹丕につつかれて遊ばれたり、歌の爪とぎにされているのは流石に可哀想だよ・・・ほら、体裁ってあ『べしゃッ!!』る・じゃん?」

白桜「あっ、紐切っちゃった♪」

白桜は悪びれもせず、タチバナを吊していた紐を切っていた。
顔面から直に落ちたためか、ピクリともしない。

華琳「・・・適当な時に起きるでしょう。さて始めるわ・・・桂花、報告。」

桂花「タチバナ様・・・こんな暴力ネコ耳女など側に置かず、私を置いて下さい。そうすればこんなヒドいことにはなりません！」

タチバナ「イタイ・・・しかしこんな事している時間はありません。もう少し見ていたかったですが、華琳、これ飲んで下さい・・・我が命を賭けてこの薬は絶対に大丈夫です。」

簀巻き状態をすぐに解き、私にまた、謎の薬を渡す。
一応、警戒はするが自分の命を賭けると言ったし、大丈夫でしょう。

秋蘭「これで落ち着いて会議が出来るな・・・お前達、大丈夫か？」

凪「えッ？あ、はい。塾の時と印象が全く違うので困惑しました・・・」

真桜「そうでもないで。うちの印象はこんなもんや。華琳様もな。」

沙和「沙和の時もこんなだったの～。いっつも華琳様に怒られてたの！」

秋蘭「・・・まあ、人それぞれだな。タチバナ様、遅くなりましたが帰りました。」

タチバナ「お帰りなさい、春蘭、秋蘭。報告は後にします。桂花さん、内政面の報告を。」

桂花「はッ！！やはり農業と商業は不味いです。黄巾党の出没で、畑は荒らされる、人手が足りない状況になっています。商人の流動もかなり悪いため税収に一部低下が見られます。さらに・・・」

先程までのふざけた雰囲気はどこへやら・・・

凪は少し動揺しているわね。

他の者は、いつもの事とみて桂花の報告を聞いている。

・・・頭を触るとネコ耳は消えていた。

何だったのかしら？

桂花「・・・以上。内政部門の報告です。」

タチバナ「ありがとうございます・・・財政は曹家から繰入します。それで、この乱の間は保つでしょう。人材の補充は今からの軍事部門で話をします。」

一刀「え？まさか、黄巾党をひき、ムグッ！！」

白桜「静かにしろ～、一刀～。」

タチバナ「・・・まあいいでしょう。軍事部門は私から話します。」

華琳「自分で報告するのね。」

タチバナ「はい・・・先日の件の時にも話をしていますが、ようやく朝廷が重い腰をあげました。官軍と共同戦線を張ります。彼方からの要請で黄巾党本山を攻めます。」

秋蘭「他の諸侯はまともに動けない状態で、そんな事をするのですか！？」

タチバナ「『十常侍』自らの采配です・・・皇甫嵩将軍や朱儁殿もかなり進言しましたが聞き入れてもらえなかったみたいですね。彼らと張角を討つよう言われています。」

一応、大将軍である何進でさえ簡単に呼び捨てする彼から『将軍』や『殿』などの言葉が出てくるとは思わなかったわ。

春蘭「タチバナ様が珍しく官名を付けて呼ぶ、皇甫嵩将軍とは？」

タチバナ「官軍最高の人材です・・・彼がいるから朝廷は保っていると言っていいでしょう。まあ、肺を患っていますから今回の出撃で軍を去るでしょうが・・・」

華琳「そんな人物がいたのね。で、編成は？」

タチバナ「私には絶対に来てほしいと皇甫嵩将軍から言われていますので私が出ます。後は、春蘭、秋蘭、桂花、季衣を連れて行きま

す。」

一刀「華琳は連れて行かないの？珍しいね。」

桂花「やっぱり、タチバナ様は暴力女より私の方が必要なのですね！？」

誰が暴力女よ！！

タチバナに心酔しているのはいいけれど、私を目の敵にしないでほしいわ！！

タチバナ「はい。今回、呼んだ人達には皇甫嵩将軍と朱儁殿の指揮や采配を見てもらいたいので・・・貴女達はまだまだ伸びる。彼らのは参考になるでしょう。」

華琳「色々言いたいことはあるけれど、呼ばれなかった者は待機でいいの？」

タチバナ「いえ。華琳、一刀君、凪、真桜、沙和には徐州に行ってもらいます。下ヒ周辺にも黄巾の賊が多くいます。それを袁術軍と共に討伐して下さい。」

華琳「そういうこと、ね。それなりに戦力があるから2面の戦闘を行う訳ね・・・朝廷が文句を言ってこない？」

タチバナ「彼らは『私』が張角討伐に出ていればいいのですよ・・・共同戦線が張れるか分かりませんが、そちらは華琳に任せます。秋蘭、陳留に戻した兵を合わせて出せる人数はどれくらいですか？」

秋蘭「はッ！！７０００は問題なく動かせます！後は守備要員と新兵なのでこれくらいになります！」

タチバナ「では、本山攻略に４０００連れて行きましょう。３０００よろしくお願いします。」

華琳「分かったわ。任せなさい。」

白桜「兄上～、わたし達は？」

タチバナ「白桜、黒陽、徐晃、堅さんはお留守番です・・・帰ってくる場所を守って下さい！」

黒陽「了解じゃ、兄上！」

徐晃「・・・頼マレタ・・・」

タチバナ「出発の準備はほぼ出来ています！明日の昼には出撃出来るように！」

『『『御意ッ！！』』』

次の日には皆、戦地に赴いていった。

？？「貴女が『曹孟徳』ね。『復活の太陽』の方？それとも『不蝕の月光』？」

・・・私が『殺した』英雄、孫策伯符。
袁術軍との共同戦線だものね。
いない訳がないわ。
しかし、殺気を隠そうともしないのはどうかしら？

凪「いきなり何ですか！！私達は袁術殿に会いに来たのです！！使者を出し謁見の話もついています！！」

孫策「そんな事、どうでもいいの。でどうなのよ？私は気が長い方じゃないの。」

華琳「『不蝕の月光』の方、と言ったらどうするつもりだった？」

孫策「そうね・・・こうかしらッ！！」

私の言葉を聞き、スッと踵を返した。
が、次の瞬間、キインと金属の重なり合う音が私の真横で起こる。

一刀「一応、味方のはずなんだけど、ね。」

孫策「優秀な護衛さんね！振り切るつもりはなかったけど力が入りすぎちゃった♪」

??「おいッ！！雪蓮、何をしている！！曹弥軍の面々が来ないから、袁術が喚いているのだぞ！？」

孫策「ごめーん。仇が来たかと思って、先に挨拶していたの！」

??「仇ではないと言っているだろうに・・・謝って済む問題ではないのは承知だが・・・このバカ娘の非礼は詫びる、済まなかった！」

眼鏡を掛けた褐色の美女『周瑜』は、孫策の頭に拳骨を落とし、私に謝罪をする。

凪は何か言おうとしたが真桜と沙和が止めてくれていた。

華琳「挨拶、だったのでしょう？問題ないわ。」

周瑜「そういってもらえると有り難い・・・袁術、殿が待っています。此方へ・・・ほら、行くぞ雪蓮！！」

孫策「痛いよ、冥琳！！放してよ！！」

周瑜は孫策を連れて先に行ってしまった。

・・・また、逢えた。

わたしが認めた英雄に。

一刀「まさか、初っぱなにこんな事あるなんて・・・華琳、無事？」

華琳「大丈夫よ、ありがとう。まあ、タチバナが私達を助けていたら、と言う想いが強いのでしょうね・・・実際、彼が救援に入れば孫家は袁術の下につくような事態にはならなかったでしょう。」

一刀「でも、他に弊害が出ていたよ？あの時はあれが、最前だった、でしょ？」

華琳「タチバナにとっては、ね・・・言い出すときりがないわよ？さあ、行きましょう。」

これ以上、袁術を待たすのもどうかと思い、彼女のいる幕に進んでいく。

さて、どうなるかしらね？

2面作戦と英雄と華琳（後書き）

コルトです。

ちょっと書きたくなって書いたんだ。

ネコ耳華琳さん・・・

ワタシシンジャウヨ？

冒頭ので思い付いたのがあるのです。
需要あるかわかんないですし、既にあるかもしれないですけどちょっと書いてみようかなとか思います。

いつ書くかは不明。

こっちもちゃんと書いてないのにそんな事してはダメ！！かなぁ？

次回は、恋姫達が多数出る予定です。
ちゃんと捌けるかは分かりません！！

仁徳の人と小覇王と華琳

入り口での軽い挨拶？の後、私と一刀は袁術に会っていた。
・・・なんで、ここに白蓮がいるのよ。

袁術「妾が袁術じゃ。そなた達が今、噂の『2人の曹孟徳』かえ？」
華琳「私はそうだけど、彼は違うわ。私は曹操孟徳。エン州州牧、曹弥孟徳の補佐官をしている者よ。彼は北郷一刀・・・私の部下よ。」
一刀「違うから！俺、曹弥さんの部下！あなたの部下違う！！」
華琳「似たようなものじゃない・・・お互い名を伝えあったし、用件を聞きましょうか？」
？？「でわでわ、そこは私が伝えま～す。」

確か、張勲だったかしら？
袁術の側近兼御守の、有能だか無能だかイマイチ分からない存在だったわね。

？？「私は袁術様の部下、張勲で～す。よろしくお願いします！でわ説明しますね。今回、私達はこの下ヒ城の北部で悪さしている黄巾党を討伐するよう命が出されています。」

華琳「この辺りを統治している者は？」

白蓮「既に逃亡している。ここらは無法地帯となっているぞ？」

華琳「あら？白蓮いたの？」

白蓮「目、合っただろうが・・・華琳、相変わらずヒドいな。」

張勲「公孫さんの影の薄さはいつもの事じゃないですかぁ？それと、私が説明しているんですから横から口を挟まないでくださ～い。」

白蓮がイジケだしたわね。

・・・私は知らないわよ。

張勲「それでですね、袁術軍はあまり戦闘のイロハを知らない者ばかりなんです。そこで、公孫さんと曹操さんの軍で戦ってほしいな～っと。勿論、後方支援などはこちらが引き受けますから。」

華琳「あなた達の軍にも戦闘が得意な人達いるでしょう？」

張勲「あの人達は袁術様の護衛ですから～。そ・れ・に、曹操さんの軍と共同行動とれないと思いますよ～？」

まあ、そのように見られるのは仕方ない、か。

最悪自分たちの軍だけとは思っていたが、白蓮がいるのだからそれはなくなった。

周瑜「発言をお許し願います、袁術殿。」

袁術「なんじゃ？構わぬ、言ってみよ。」

周瑜「些か不穏な発言を聞きましたが・・・一応、我々も戦闘には参加しなければ他の者への示しがつきませぬ。我らの宿将である黄蓋だけでも彼らと共同戦線を張らせて頂きたい。」

張勲「ええー！出ちゃうんですか！？こんな所で無駄にお金をだし、とと。」

そこまで言って、止まらないでよ？
はっきり言ってすべて聞こえたわよ。

袁術「出ないといかぬかえ？」

周瑜「間違いなく。袁術殿の名声に傷が付きますよ？」

袁術「それは困るのじゃ！！七乃！！妾達も討伐に出るのじゃ！！」

張勲「もう、押しに弱いぞ、お嬢様♪分かりました。それでは、黄蓋さんにその旨は伝えて下さい。曹操さん達もそれで宜しいですか？」

華琳「問題はないわ。後は公孫賛と黄蓋で打ち合わせをするわ。」

張勲「お願いしま～す。では、これで謁見は終了ですね♪お嬢様、

蜂蜜水を用意していますよ？」

袁術「蜂蜜かえ！？早く行こうぞ、七乃！」

あっという間に出ていった・・・

まあいない方が話もしやすいからいいけど。

華琳「で、周瑜？貴女はそれでよかったの？一応、仇なのでしょう？」

周瑜「それを言っているのは孫策と数人の文台殿を慕っていた者だけだ・・・まあ、曹光殿が救援に来てくれればこのような無様な立場には今いなかっただろうとは思うがな。アレほど、強くは思っていない。」

華琳「そう・・・あまり深い意味はないわ。先程の件があったから気になってただけ。」

周瑜「そうか。私は過去より未来を見据えて行動するだけだ・・・私も曹光殿の生徒だったからな。彼の人となりは分かっているつもりだ。黄蓋殿を呼んでくる。少し待っていてほしい。」

そう言って周瑜も出ていった。

後に残されるは私と一刀と白蓮。

白蓮「一応、言っとくぞ？久しぶりだな、華琳。」

華琳「そうね・・・何で貴女がこんな所にいるの？貴女は冀州の黄巾党攻略に回されるはずでしょう？」

白蓮「最初の予定はそうだったんだが、賊と戦いながら段々南下していってな。ついでだから、そのまま、徐州の攻略に行けと言われたんだ・・・」

何でそんなことになるのよ？
自分の領地で何かあったらどう対応するのよ！？

白蓮「ずいぶん前にタチバナ様から言われた北部の鮮卑、烏桓のような先住民族とは友好を保てるようになったんだ。代表として丘力居と同盟を結んでいるから問題ない！」

華琳「そこらは問題ないでしょうけれど・・・まあ貴女がいいと言うのならどうでもいいわ。」

白蓮「どうでもいいって・・・まあ、私と同じで幽州から義勇軍が来ているよ？桃香・・・劉備と言うのだが。」

ようやくその名が出てきたか。
以前タチバナからその名を聞いていたが、まあ、台頭してくるのはこの辺りだし疑問はないわ。

一刀「どんな人なの？」

白蓮「ん～いいやつだよ？世の弱い人達を助けたいって想いで義勇軍を立ち上げたわけだし・・・私の兵もかなり義勇軍に行ってしまったがな。」

自虐的に言うがかなり問題があるのよね。
正規の部隊が野に降ることも問題だが、義勇軍はあくまで有志の集まりなのだ。
そこには食料や装備の管理など軍を造っていく資財が必要なのだ。
周りから食料は厳しいながらも分けてもらえるが、装備は無理だ。
あちらに武具を工面する商人がいるのかしら？
そして金銭はあるだろうか？

色々聞きたいことはあるが・・・

黄蓋「済まんのう。遅くなった。」

華琳「久しいわね、黄蓋。もう数年ぶりになるわね。」
黄蓋「おおう、曹操殿か。策殿が騒いでいたから誰が来ていたのかと思っていたが・・・久しいな。主がここにいるならあやつは黄巾党本山に行っていると言うところか。」

華琳「色々言いたいことはあるでしょうが、先に打ち合わせをしましょう？」

黄蓋「そうじゃな。してどのように動く？」

華琳「そうね、まず・・・」

私は白蓮、黄蓋と共にこれからの動きを話し合った。

一刀

一刀「追い出されちゃった・・・」

何でか知らないけど、黄蓋さんが来たのと同時に外に追いやられてしまった、私、北郷一刀。
とりあえず、陣内ぶらぶらしますか。

凪達と合流も考えたが、ちょっと気になる事もあったからね～。

??「あのぅ?」

一刀「ん?何?俺に何か用?」

何かほわほわした、ピンク色の髪した胸の大きい女性に声をかけられた。

こちらに来てから、知らない女の子から声をかけてもらえる機会が減っていてので少しうれしかった。

??「先ほど来た軍の方と思うのですが・・・曹光軍の方ですよね？」

一刀「うん、そうだよ？一応、そこの将やってるよ？」

??「それでしたら『曹弥光』様に会いたいのですが、取り次ぎをしてもらえませんか？」

一刀「曹弥さんに会いたいの？あ～取り次ぐのはいいけど、彼、ここにいないよ？」

??「えっ？そうなんですか？曹孟徳様がいらっしゃったって愛紗ちゃんが嬉しそうに言ってたから・・・」

すごい残念な顔されてるよ・・・

俺、悪くないよね？

一刀「うちには曹孟徳は2人いるんだよ。『月と太陽』って知らない？月は君の言ってる曹弥さんで、今は太陽がここにいるんだ。」

??「そうでしたか。ごめんなさいッ！！早とちりしました！！」

一刀「謝らなくていいよ

。せっかくだから、太陽の方と会う？今は無理だけどすぐ取り次ぐよ？」

??「えッ！？いいんですか！！」

一刀「それくらいは大丈夫だよ？・・・えっと俺は、北郷一刀。君の名前は？」

??「ごめんなさいッ！！名前も名乗らず・・・えっと、私は『劉備玄徳』って言います！！義勇軍として各地で転戦しています！」

はっ？劉備？
こんなほわほわした子がそうなの？
有名所は本当に女の子だな～。
それなりに慣れたけど、やっぱりびっく『貴様ーーッ！！桃香様に何をしているッ！！』りって、は？

何か黒髪の子が、俺に向かって突進してくるよ！？
武器振りかざして！！！！！
俺の武器！！？？
ランス忘れたッ！！！！！
てか、そんなの必要ないと思ってたよ！！！！！

??「桃香様に仇なす者は『死』あるのみッ！！」

一刀「ちょおッ！！話を聞いてッ！！」

曹弥さんにもらった短剣で何とか最初の一撃を返した・・・
まじありがとう！！曹弥さん！！

??「私の初撃を軽く返すとは・・・だが!!次はかわせるか!?」

一刀「だーかーらーーッ!!話を聞いてってッ!!」

劉備「愛紗ちゃん!!彼は何にも悪くないよ!?私が尋ねてただけ!!」

??「そうなのですか?てっきり軟派をされていたのかと・・・」

殺気が消えて周りの空気が軽くなる。
いや、春蘭じゃないんだからさ、もう少し考えて行動してほしいな。

孫策「へー。今の一撃、その短剣で返しちゃうんだ・・・なかなかの腕ね。」

周瑜「あれが本来の武器ではないだろう。さっき、背中に手を回す仕草をしていたからな。」

さっきの問題児さんと褐色の眼鏡美女も現れた。

・・・何、この状況?

華琳「一刀?あなたどこにいたのよ、探し、た・・・」

一刀「あ、えっとね?説明しますと・・・」

『仁徳の人』劉備玄徳

『小覇王』孫策伯符

『乱世の姦雄』曹操孟徳

三國志を象る、英雄が一同に集まった瞬間だった・・・

仁徳の人と小覇王と華琳（後書き）

コルトです。

なんで公孫贊が徐州にいるんでしょうか？
正直、イミワカラナイ！！
もうちょっと気の利いた理由付けしたかった・・・

次回、邂逅した3英雄。

何書こうかね？

苦労人な白蓮さん

・・・これどんな状況だよ・・・

さっきまで、華琳と黄蓋とでこれからの動きについて打ち合わせしていたのに！！

北郷がいなくなった事に気がついた華琳が、

華琳「一刀がいないわね・・・タチバナじゃないんだから、話はちゃんと聞いてほしいわね。ごめんなさい、ちょっと彼を捜してくるわ。」

黄蓋「あの男も聞いてないといけないのか？後で伝えればよかろうに。」

華琳「・・・あれでもタチバナからきっちり信頼されているの。今回の実質的な指揮官は、彼なのよ。」

へ～、すごいな。

タチバナ様から高い評価もらっているのか。

私も以前に評価をもらったが、今の私にはどんな評価をしてくれる

だろう？

そんな事を考えていたら華琳はサッと陣幕から出ていった。

黄蓋「まあ、仕方ないのぅ。公孫贊殿、少し休憩しましょう？」

白蓮「そうだな・・・少し外出てくるよ。」

この時、外に出ないで黄蓋と待っていれば良かったんだよ！！

ふらふらしていると、すごい喧騒が聞こえたじゃないか。

自然とそっちに足が向かうわけだ。

そこには、北郷と華琳、桃香と関羽、孫策と周瑜がにらみ合っていると言っていいか？そんな状態だった。

白蓮「・・・なあ北郷、どんな状態だよ？これ。」

一刀「ああ、白蓮！！助かったッ！！これ、どうにかならない！？」

そう言って、実質にらみ合っている華琳、孫策、関羽に目を向ける・・・

桃香はオロオロしているし、周瑜は溜息ついてるし・・・

白蓮「どうしろと言うんだよ・・・コホンッ！華琳！！北郷が見つ

かったんだから会議を続けようじゃないか！？黄蓋殿が待っている！！」

華琳「・・・空気が読めない子ね、白蓮？」

孫策「・・・この状態でよく声がかけれるわね？神経の図太さはそこの女と一緒ね。」

桃香「白蓮ちゃん・・・状況読めるようになった方がいいよ？」

お前らーーーーーッ！！！！

決死の覚悟で声をかけた私にその仕打ちはないだろうッ！！！！

ってか、桃香に言われたくないッ！！！！

華琳「興が削がれたわ・・・白蓮、一刀、打ち合わせの続きに行くわよ？」

そう言ってさっさと歩いていく華琳。

・・・泣いていいか～？

桃香「白蓮ちゃん！！私も会議出たい！？」

桃以外『『『はッ？』』』

皆の目が点になる。

桃香「私も義勇軍率いているんだから、軍議に参加したい！！」

白蓮「いや、義勇軍は私の指揮下だろう？私が話を『いいんじゃない？』って、おい！！華琳！！」

華琳「別に隠し事してるわけではないし、今ここに集まっているのは黄巾党を何とかしたいと集まった謂わば同志なの。それに大したものでもないんだから問題ないわ。」

お～い。

じゃあ、北郷呼びに出なくてよかったんじゃないか～？

孫策「じゃあ、私も出るわよ。祭も出ているのだから問題ないわよね？」

周瑜「おい、雪蓮！！何のために祭殿に出てもらっていると思う！？軽く行ってきますじゃ済まんぞ！！」

孫策「大丈夫よ♪袁術ちゃん、蜂蜜に目がいって何にもわかんないから！」

周瑜「しかしだな・・・」

周瑜～頑張って止めてくれ～！！
しかし、祈りは届かなかった・・・

黄蓋「おお、ここにいたか・・・どうした？何かあったのか？」

いえ・・・もうどうにでもして下さいm（＿＿）m

そして冒頭に戻る。

今ここには私、華琳、北郷、孫策、周瑜、黄蓋、桃香、関羽、諸葛亮とほぼ、ここに集まった将がこの陣幕にいる。

孫策「で？さっきまでどんな事、決めていたのよ？」

華琳「北上する際の戦う順番と、途中に出現する賊の排除の役割分担よ。基本は私達が先頭に出て戦うわ。公孫賛と義勇軍には私達の支援、並びに周辺警備を任しているわ。」

黄蓋「儂らは、後方で部隊の警護が主な任務じゃ。」

関羽「なぜ、我々は前に出させてくれないのか！？」

白蓮「えっとそれはだな・・・」

華琳「兵の状況をさっき見たわ・・・大分、戦闘を繰り返したわね？疲労が溜まっている、あれでは前衛を任せることはできない。義勇軍が崩れるのは私達にとって得がないわ。」

関羽「しかし！！それでは何のためにここまで来たか、わからないッ！！まだ、私達は戦える！！」

関羽は負けじと戦えることを強調する。

華琳「そこのあなた。」

？？「はわわ・・・私ですか！？」

華琳「そうよ。見たところ義勇軍の知者と見えるけど、違う？」

よく見てるなぁ。

私は最初見たときこの子が？って思ったのに。

？？「はわわ・・・諸葛亮、孔明でし・・・」

噛むなよ・・・
華琳は何か知っていた様な素振りだな。
北郷は、えッ！？マジで！！って言っているな。

華琳「では、諸葛亮。あなたはどう考える？」

諸葛亮は桃香と関羽を見て意見を聞こうとするが、桃香に頑張って言われて逃げ道を失った。

孔明「・・・では、発言させていただきます。はっきり申しまして次の戦闘行為を行えば我が軍は敗北するでしょう。」

関羽「朱里ッ！！私はまだ『だまれッ！！今は諸葛亮が話している！！』っくぅ・・・」

華琳の一喝で関羽が静かになったよ。
私には無理だなー。

孔明「・・・発言を続けます。実際、食料はほぼ底をついています。公孫贊さんから何とか軍を維持する食料はいただいていますが、戦闘行為をするための体力はあまり残っていません。さらに、武器の疲弊が激しくそれを工面できる資金もありません。公孫贊さんの所にも余裕があるわけではないので言えませんでしたが・・・」

桃香「そんな状態だったなんて・・・朱里ちゃん、ゴメンね。そん

な状況を知りもしなかったよ。」

孔明「桃香様！！謝らないで下さい！！私達にもう少し知恵があればだ打開できた事なんです！！」

孫策「そこで話をしないで！悪いけどそんな軍をここに置いておける余裕はないはずよ？どうするつもり？」

孔明「ある意味私達にとって好機な場に出会えました・・・曹操様、軍は動かせませんが、将なら・・・ここ関羽と待機している張飛と言う者、かなりの手練れです。彼女達に戦える場をお与え下さい。そこで得る物資を私達に分けていただきたい。」

義勇軍からの要請とはいえ、ここで華琳が断ればここにいる諸侯からの評価は落ちる、か？
さらに民衆からの評価も気になる所だ。

・・・どう対応する、華琳？

華琳「一刀、あなたが決めなさい。」

一刀「俺！？何でよ？華琳が判断すればいいんじゃなイカ？」

華琳「何、その語尾は・・・あなたが言うと気持ち悪いわ。さっきは私の部下と言ったけど、今回の実質的な指揮官はあなたなの。私はその補佐を任されているわ。だから、あなたが決めなさい。」

えー！？
すごい責任転嫁を見た気がする！！
そういえば、今回の指揮官って言ってたっけ。
どうする？北郷。

一刀「えー、だったら一時的に俺の指揮下に入ってもらうよ？凪達いるけど指揮慣れてないし、指揮できるでしょ、関羽さん？・・・文句言わないでよ、華琳。」

華琳「文句はないわ。あなたが決めたこと・・・責任はあなたが持ちなさいよ？」

北郷はへーいと気のない返事をし、桃香と関羽は嬉しそうにはしゃいでいる。

孔明「曹操様、北郷、様で宜しかったですね。ありがとうございます！これで軍が崩れず済みます。」

孫策「そっちは終わったかしら？なら私達だけど・・・」

周瑜「お前は前に出れないぞ？何とか黄蓋殿は前に出れるようになったがお前は袁術の子守、だ。」

孫策「ええーー、やだ！！」

黄蓋「さすがにワガママを言える立場におるまいて・・・儂はどうする？」

華琳「黄蓋も私達の指揮下で動いてもらうわ・・・その方がやりやすいでしょう？」

周瑜「助かる・・・では私達は用意してくる。雪蓮！！行くぞ！！」

孫策「もーーーッ！！引っ張らないで、めーりん！！」

孫策、周瑜、黄蓋は退出していった。

桃香「じゃあ、私達も用意してくるね！みんなに話してくる！！」

関羽「桃香様！！それでは失礼しますッ！！」

桃香も関羽と一緒に出ていった・・・諸葛亮を残して。

孔明「はわわ・・・置いて行かれました・・・」

華琳「諸葛亮？『は、はひ！！』・・・緊張しなくていいわよ？貴女は他に言いたいことがあったのではなくて？」

孔明「ッ！！」

華琳「みな出ていったわ・・・ここにいるのは私達と影の薄い辺境の太守様しかいないから。」

白蓮「おーい、私はいい加減怒っていいと思っているのだが！？」

華琳「今までのやりとりでまともに発言した？仮にも一軍の指揮官様が？」

白蓮「はい・・・止めて下さい・・・私の心はズタズタにされました・・・」

イジケる私を無視して華琳は、諸葛亮と話をする。

孔明「よろしいのですか？」

華琳「かまわないわ・・・一刀、周りに注意してね。」

一刀「さっきから『氣』を張り巡らしてるから大丈夫だよ？」

華琳「そう・・・準備は万端よ？さあ、どうぞ？」

孔明「・・・それでは。曹操様、貴女の・・・いえ、あなた達の目的は何ですか？天下太平、が目的ではないですよね。」

華琳「なぜ、そうだと？」

孔明「独自に調べました『曹弥光』と言う者。朝廷とも深い繋がりがあり、劉焉や袁紹と言った有名な諸侯からの評価のとても高い人物でありながら、ここ最近まで表舞台に一切出てこなかった・・・知者としてではなく、以前江湖で確認された5つの光、あれは彼の仕業と結論が出ています。武力は天下の飛将軍が赤子と同義と想像

します。」

あ～以前にそんな報告があったな～。
あれ、タチバナ様がやったことだったのか。

華琳「想像力が豊かね。それで？」

孔明「はい・・・なぜ、それだけの実力を持つ者が、この時期に台頭しだしたのかと。私の主、桃香様とは違い名も力もあるのにも関わらず。もう少し早くに出ていれば、世は早くに安定しこのような事にはならなかった・・・違いますか？」

一刀「そうだね。それは思うよ・・・彼が早くに台頭していればこの地はここまで荒れることはなかったと、ね。」

華琳「憶測で物事を進めてはダメよ。」

孔明「証拠はあります・・・私の友人が共に通った塾の書庫から見つけました・・・この三冊の本です。」

一刀「それ、曹弥さんが俺にくれたやつ！！」

孔明「やはり、まだ数点あるんですね。解読には時間がかかりましたが・・・この書物は歴史書です。漢王朝の。いずれも３０年くらいしかありませんでした。先生に聞けばこれはとある人から貰ったものだと聞きました。言わなくてもわかると思います。」

華琳「・・・」

孔明「この本は若干の違いはありますが道筋は同じで、この大乱はありません・・・この後に続くだろう争いも起こらない様になっています。そして、ある時を境にぷっつり歴史が『止まって』います。ただの悪戯だったらよかった・・・彼の活動が始まると、この本にも変化が起こりました。」

一刀「えっ？そんなことがあったの？」

孔明「はい・・・一冊だけでしたが、以前なかった歴史が出てきました。３０年より前の過去の分が・・・」

北郷はその本を確認しにいく。
その本の内容に驚愕しているようだ。

一刀「俺が探していた本だ・・・華琳！！これがこの世界の、正史を描く歴史書だ！！」

華琳「・・・」

孔明「彼の目的はおそらく歴史の変革、この変化のある歴史書と同じ道をたどり、ある時に別の道に先導するのが目的と・・・如何ですか？」

華琳は一切言葉を出さなくなっていた。

一刀「華琳？」

華琳「・・・私には彼の目的はわからないわ。仮に歴史の変革だとしても、彼からその言葉を聞いていないから何も言えないわ・・・よく調べたわね。」

孔明「私もそうですが、友達はその人をとても尊敬しています。いつかこの人の役に立ちたいとも思っていました。だから、色々な事を調べました・・・そこから矛盾点が見えてきたんです。」

華琳「そう・・・これを知って貴女はどうするの？」

孔明「どうもしません。今は桃香様を助力する者です・・・いつか彼と相対する事になるかもしれない立場にいます。そうならないように願うだけの存在です。」

一刀「俺たちと来ないか？」

諸葛亮はふるふると首をふる。

孔明「彼の目的と私の願いは違うのですよ。彼の下には行きたいですが・・・私は桃香様の志に惚れました。それが答えなんです。」

華琳「貴女のしたいようにすればいいわ・・・話は終わり？」

孔明「ひとつだけ・・・曹操様、貴女は人の上に立つ存在です。なのになぜ彼の下にいるんですか？」

華琳「簡単よ？彼の下にいるのは楽しいから、よ。くだらないことばかりしているけど、ね。」

孔明「そうですか・・・曹操様、時間をとらせました、ありがとうございました。」

華琳「時間は経っていないわよ？どこかのお節介がちょっと細工したみたい。」

孔明「え？え？どういうことでしゅか？」

華琳「可愛いわね・・・諸葛亮、私は華琳と言います。貴女に真名を預けます。」

孔明「えッ！？いいのですか？」

華琳「貴女のおかげで頭の整理もついたし、ね。自力でそこまで調べた事に敬意を評するわ。」

孔明「・・・私は朱里と言います。これからよろしくお願いします、華琳さん。」

華琳「よろしく、朱里。」

あ～とってもいい雰囲気だね～。

・・・とっても置いてきぼりの私ですがどうしましょう？

今のってとても重要な事だよな？

私が聞いててもよかったの？

華琳「影の薄い貴女が聞いてても大して問題にもならないわ。」

白蓮「思考を読まないで下さいッ！！そしてもう影が薄いとか言わないでくれッ！！」

苦労人な白蓮さん（後書き）

説明下手は何とかしたい。

コルトです。

朱里と雛里はタチバナの目的に自力で到達しています。
書庫に本があることや、調べればわかる行動の矛盾点などある程度のテコ入れはありますが・・・

実際、彼女達がこのことを知っているからと言って何かが変わることはありません。

ただ、ショック（変換できない）との繋がりを作るための処置なんですよ？
呉はそういうのありますから。

なので、後半のやりとりは私の自己満足の部類です。
気になったら言ってね？

話の進まない黄巾の乱ですが、次回は、戦闘です。
軽く流すかもしれませんがね。

指揮と周瑜と華琳（前書き）

冒頭、微アンチ的要素あり。
ご注意を。

指揮と周瑜と華琳

北上は問題なく進んでいく。
義勇軍も白蓮の軍も袁術軍でさえも、大きな被害なく戦闘行為を行えている。

総勢６０００人規模の軍事行動で、タチバナからの要望で『賊以外の殺生は極力禁止』と言う普通なら考えられない難題を私達に課していたにもかかわらず、だ。

・・・どうせ、後で懐柔してこちら側に引き込むのでしょうね。
私も張3姉妹を使い、同じ事をしたのだし。

それにしても厳しい課題だった。
周りから様々な不満をぶつけられたが、うまく流した。
関羽が特に五月蝿かったのよね。

『賊の命を何故とらないのか』、と。

自分の正義に酔いしれるのはいいけど、現実も少しは見なさい。
あえて理由は言わなかった。
彼に会えば、嫌でも理解できるでしょうから。

華琳「・・・そういえば、白蓮の軍には趙雲いないわね。」

一刀「ああ、少し前までいたみたいだよ？ちょっと気になる人がいるとかで、文官2人と出てったみたい・・・文官の人も優秀だったみたいで、いきなり3人抜けたから大変だったって。」

優秀な文官2人、ね。
趙雲と共にいると言うことはあの2人なのでしょうね。

白蓮「北郷、華琳！！間もなくこの辺り最後の黄巾党の砦が見えるぞ！？準備は大丈夫か？」

華琳「貴女じゃあるまいし、いつでも急襲かけれるくらい準備は万端よ？」

白蓮「地味にヒドいな・・・北郷、どうだ？あそこは賊徒くらいしかいないみたいだぞ？」

一刀「んー・・・そうだね！他の『氣』が感じられない！数は多いけど大丈夫だろう！！みんなに伝えて、一気に攻勢かけるって！！」

だんだん一刀も人間じゃなくなっていくわね。
タチバナや華陀から『氣』の扱いを本気で体得しだし、今のように遠いところの相手を確認し、どんな存在かある程度わかるくらいになっている。
・・・高速移動も短距離ながら出来て、空中蹴りも2段階までなら出来るそうだ。

もうどうでもいいわ。

一刀「篭城せず出てきたか。悪くはないが・・・いずれにせよ蹴散

らすまでだ！！弓隊、用意せよッ！！1番、2番、3番の順で放て！！2周して左翼を前に出す！！真桜、沙和、張飛！！頼むぞ！？」

真桜「任しときー！！」

沙和「被害なく終わらせるのッ！！」

張飛「鈴々は負けないのだッ！！」

一刀「右翼ッ！！左翼の突撃後、回り込んで後ろをとれ！！我々が攪乱するッ！！凪、白蓮、関羽、出来るな！？」

凪「必ず成果を出しましょう！！」

関羽「言われなくとも！！」

白蓮「・・・私の出番あるのかな～？」

一刀「華琳、黄蓋！！中央の行動は任せるッ！！」

黄蓋「はっはっは！！任されよう！！」

華琳「一刀、あなたはどうするの？前に出るのかしら？」

一刀「うんッ！！！！ずっと指揮してたからストレス溜まってんだ！ここで発散したい！！」

華琳「は～・・・一応、総指揮官なのだからね。まあいいわ。北郷隊！！右翼が回り込めるように攪乱をしなさい！！一刀が出るわよ！！」

もう少ししたら接敵するな。
見たところ１００００、か。
今までよりは多いわね。

しかし！雑魚は雑魚ね！
負けることはないわね！！

周瑜（冥琳）

弓隊の使い方が面白いな。
一気に矢を降らすのではなく、満遍なく連続で降らせるのか。

賊の足が止まるな。
何か心理的なものが働いたか？

すぐに左翼が動くか。
もう弓は使わないと言うことだろうな。

先程、北郷が叫んでいたことが円滑に進んでいくな。
この数を指揮するのは初だ、と言っていたが問題はなさそうだな。

雪蓮「めいりーん！！私も出たいよーッ！！」

冥琳「それは無理だろう。袁術はこの先から行きたくないそうだ。この辺りの黄巾党はほぼ全滅だ。我々はここで領地に帰ることになる。」

雪蓮「つまんない！！祭ばっかり楽しい事してッ！！」

冥琳「・・・次があるさ。近い内に。」

雪蓮「そうだよね・・・次は絶対出るからね！！」

ころころ表情が変わって楽しいな。

・・・まあすぐ次の戦はあるだろうな。
諸侯の実情もわかった。
必要な情報はだいぶ手に入ったな。
目まぐるしく変わる情勢から少しでも早く活きた情報を手に入れなければ、孫呉は復活しない！！
私は少しでも早く文台殿が築いた地を取り戻したい！！
そのために死に物狂いで知恵を使ってやるッ！！

・・・曹光様はどう思われるだろう？
ゆっくりやりましょう？って言われそうだな。
だが私は、いつまで持つか・・・

北郷の活躍により、負傷者は多数出たが、死者はまさかの無しとい

う恐ろしい結果を叩き出した・・・

指揮と周瑜と華琳（後書き）

コルトです。

戦闘シーンはめんどくさくなって全カット。
途中まで書いていましたが、なかなかうまくいきません。
そのため描写がヒドく薄っぺら♪
期待された方がいたかもしれませんが、ごめんなさいm（＿＿）m
まだ、黄巾の乱は続くのでその中でうまく書けれれば、と思っています。

次回は、冀州に入ります。
どうしようかは考え中・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9819v/

２人の覇王？ 少女と覇王の奮闘記

2011年10月19日03時00分発行